

302.4

0965a



* 0001013000 *

0001013-000

302.4-0965a

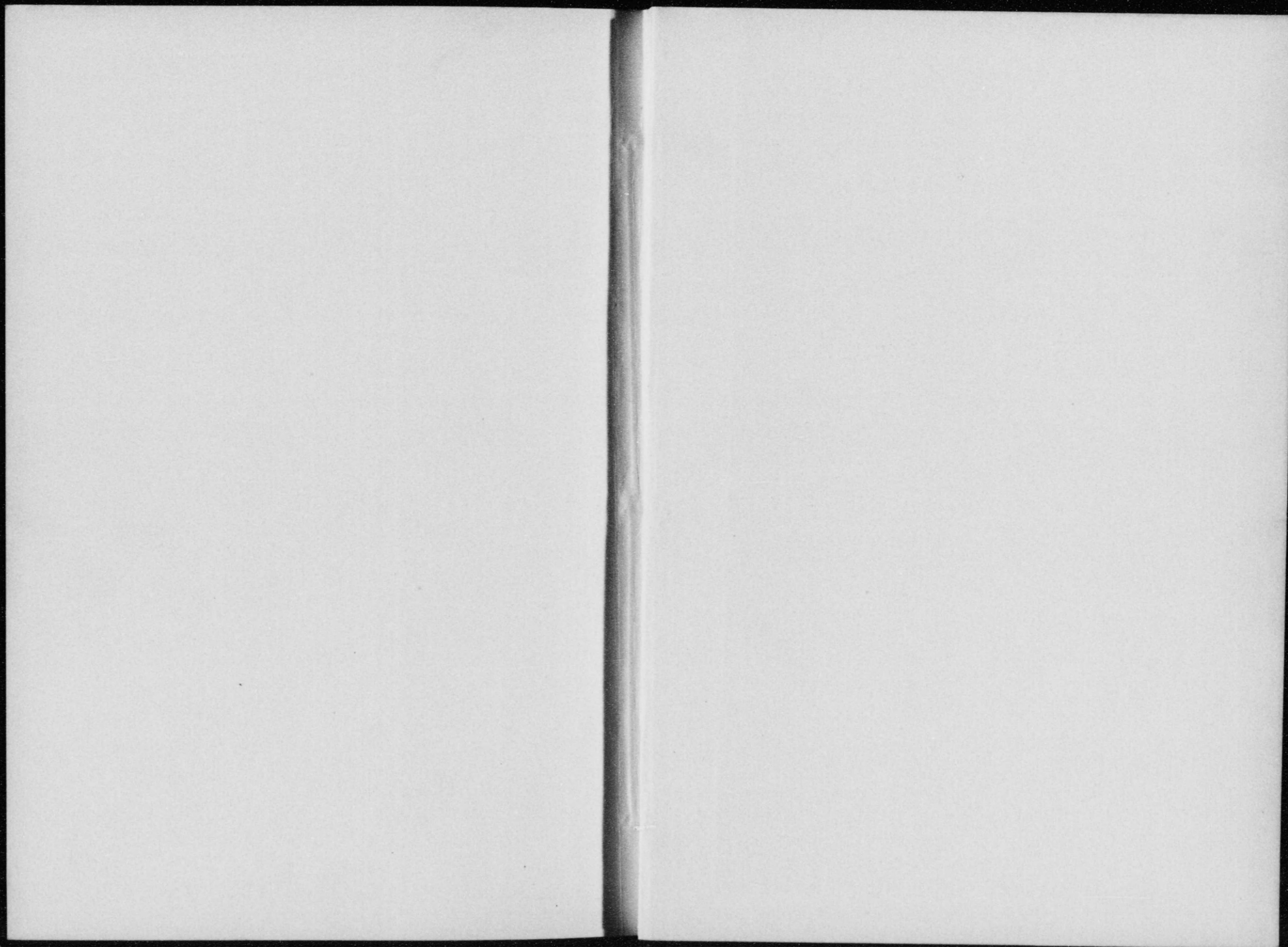
阿弗利加土產

大山卯次郎・著

赤爐閣書房

1930 2版

AAB



K100

法學博士 大山卯次郎著

奇談
一東

阿弗利加土產

附、日本人海外發展の葉

東京 赤爐閣書房

天皇陛下貴殿、講話

東亞弗利加、事情

(通商貿易) 被聞召候間

来十七日午後三時迄

參内可有之此段申

進候也

昭和四年五月十四日

侍従長鈴木貫太郎

大山卯次郎殿

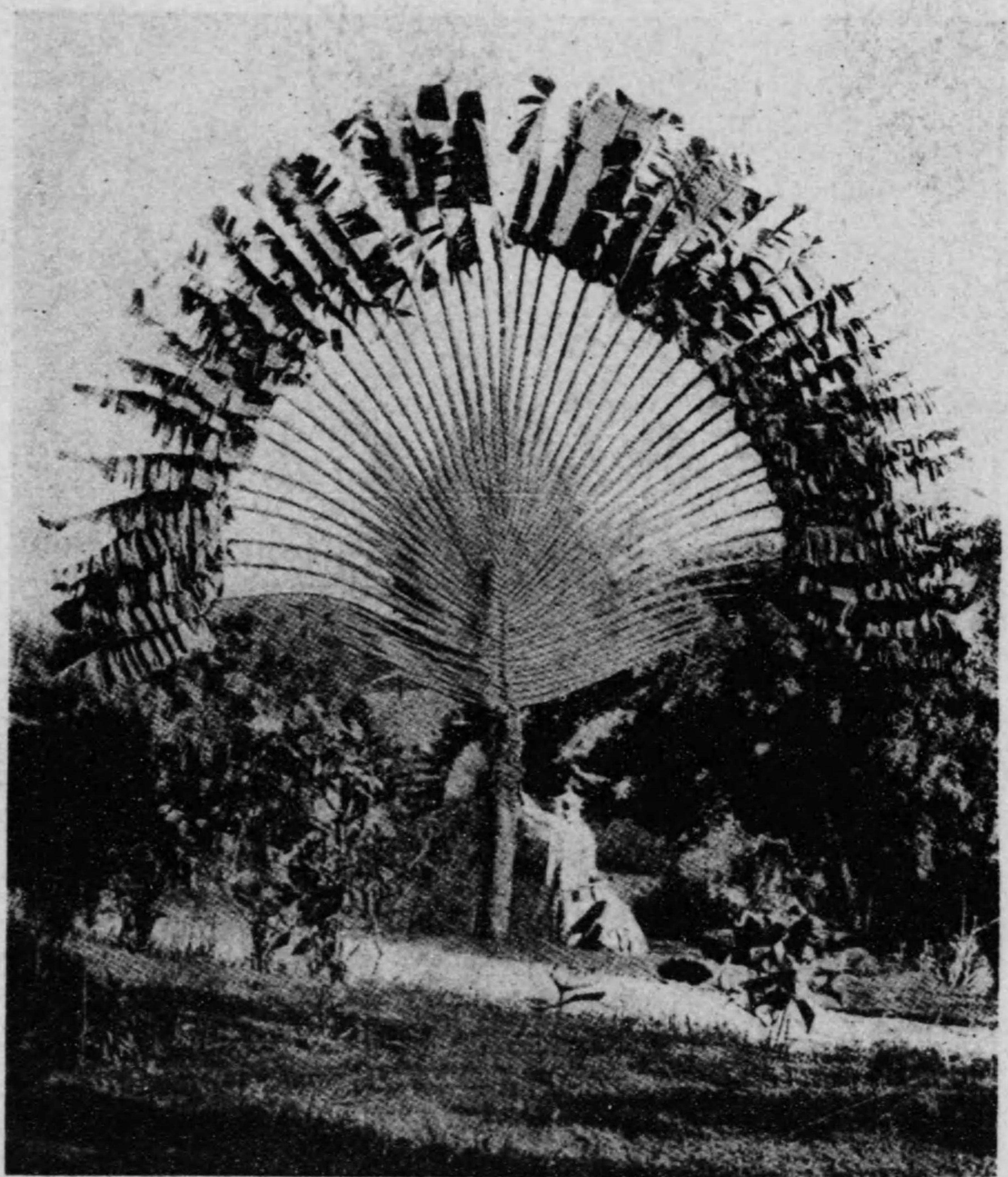
狀召おのり陛下上聖

302.4
0965a



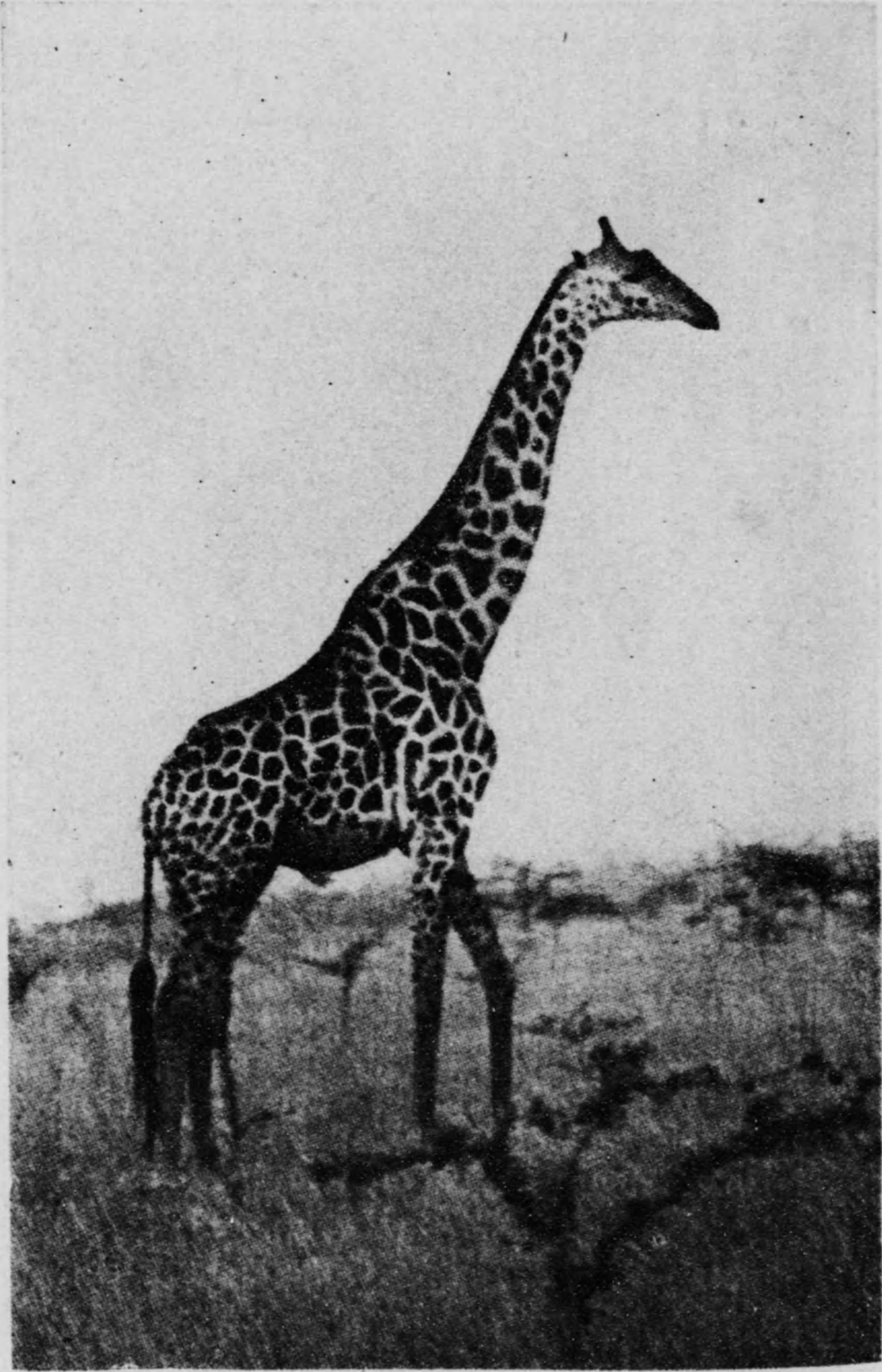
512633

象 歩 寛 原 高 の 阿 東



有名なダマカスル島の旅人木此、此の木は竹の如く空中にて
水を蓄ふところにあり



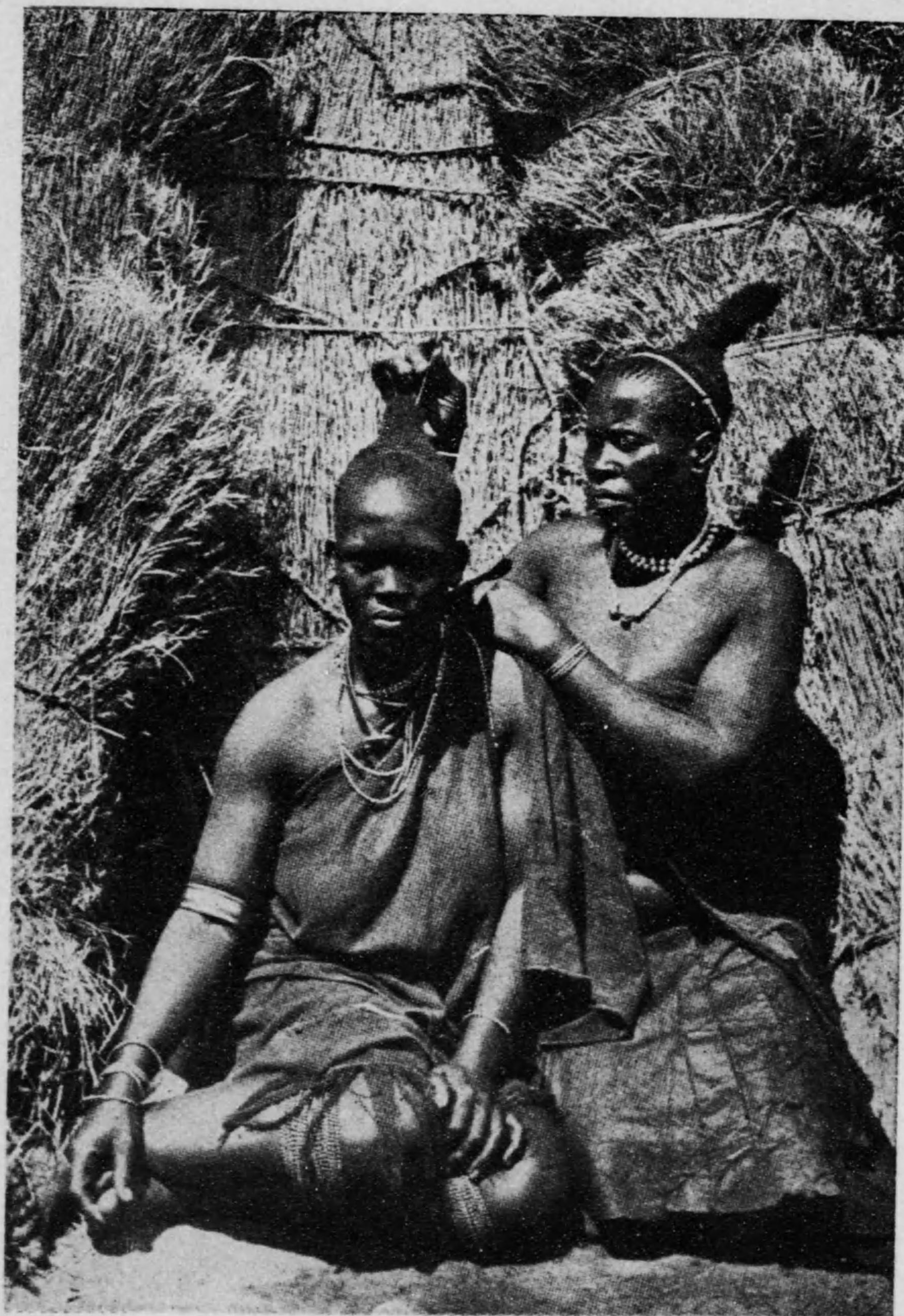
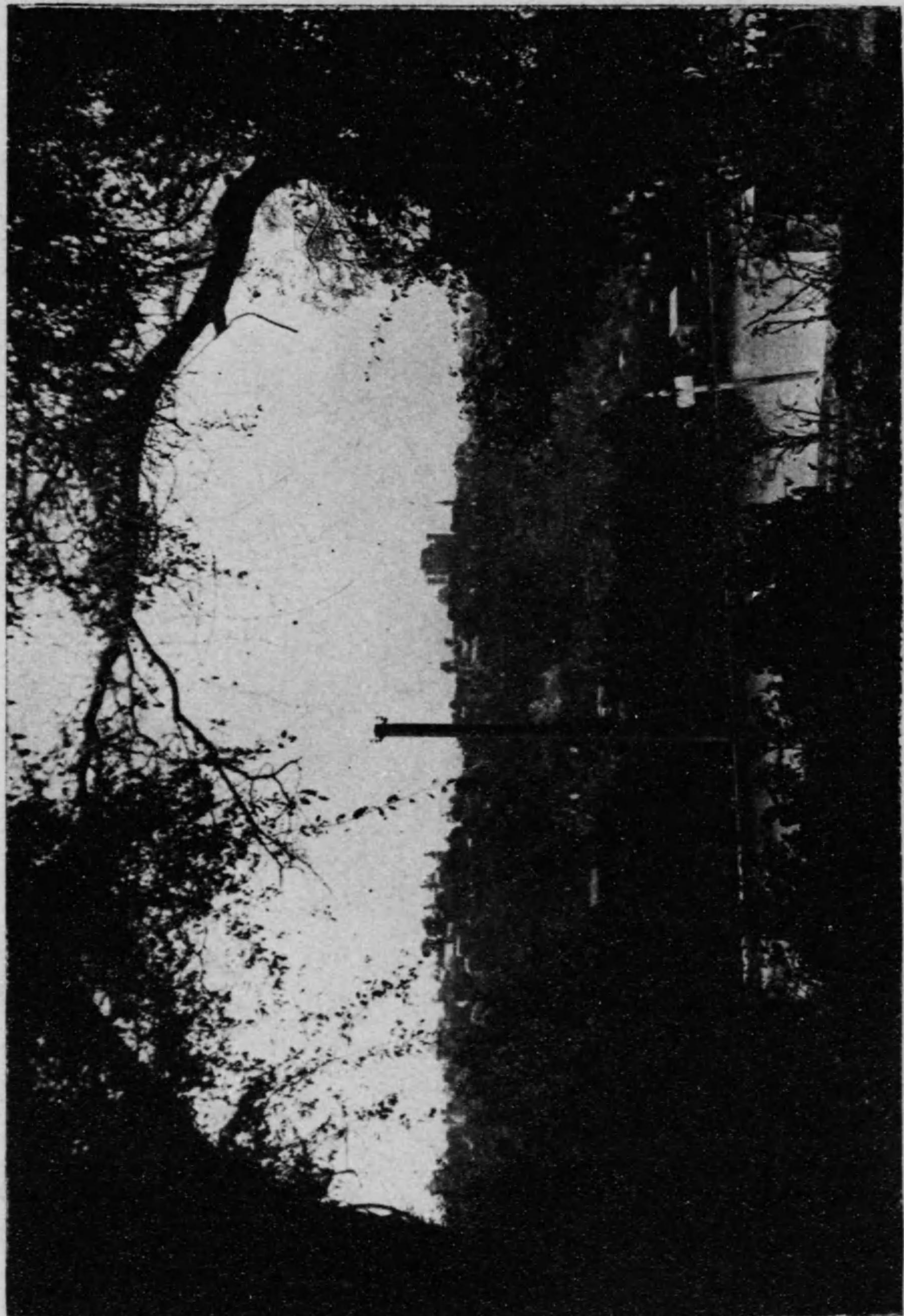


王者の如き麒麟



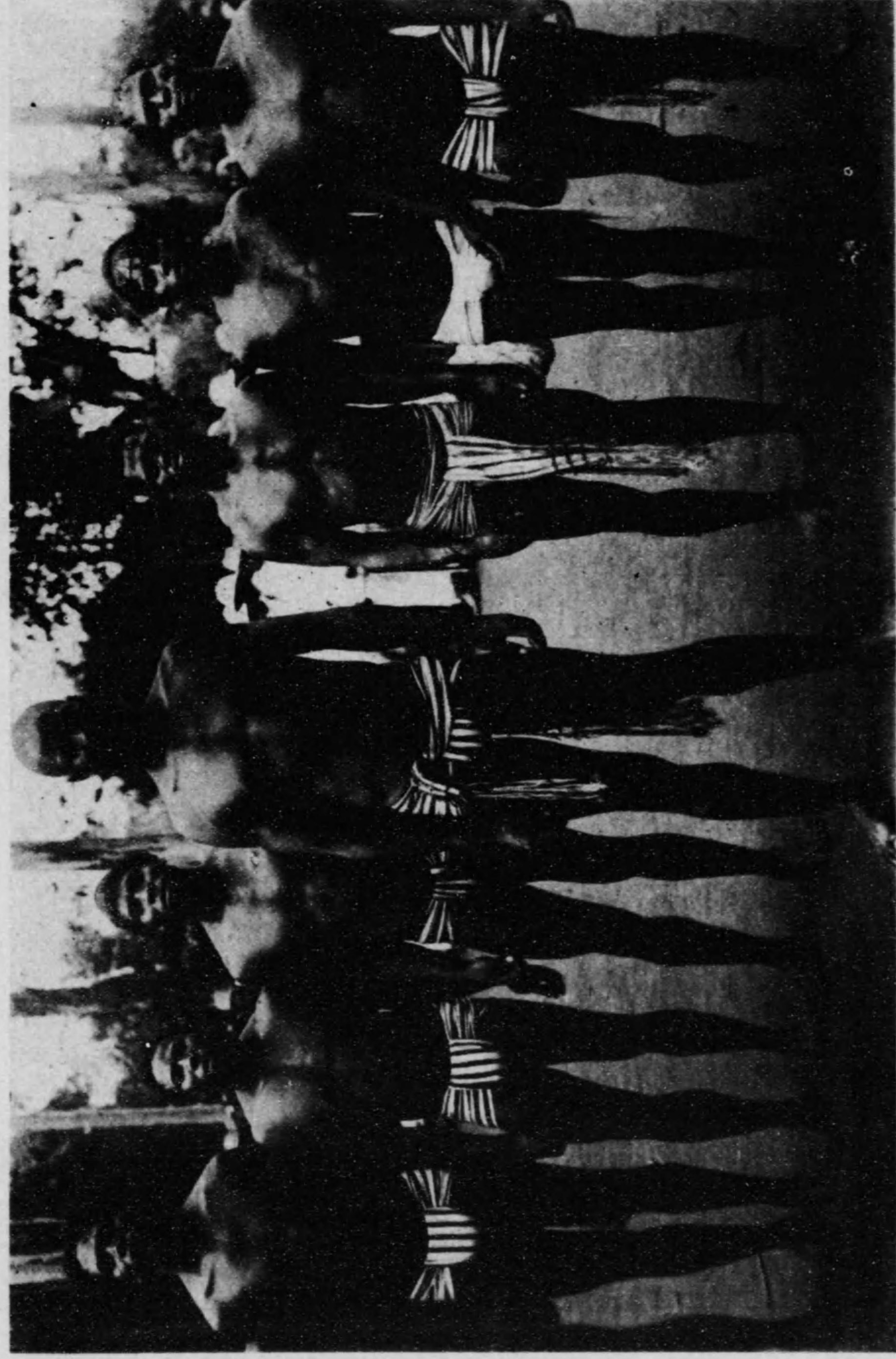
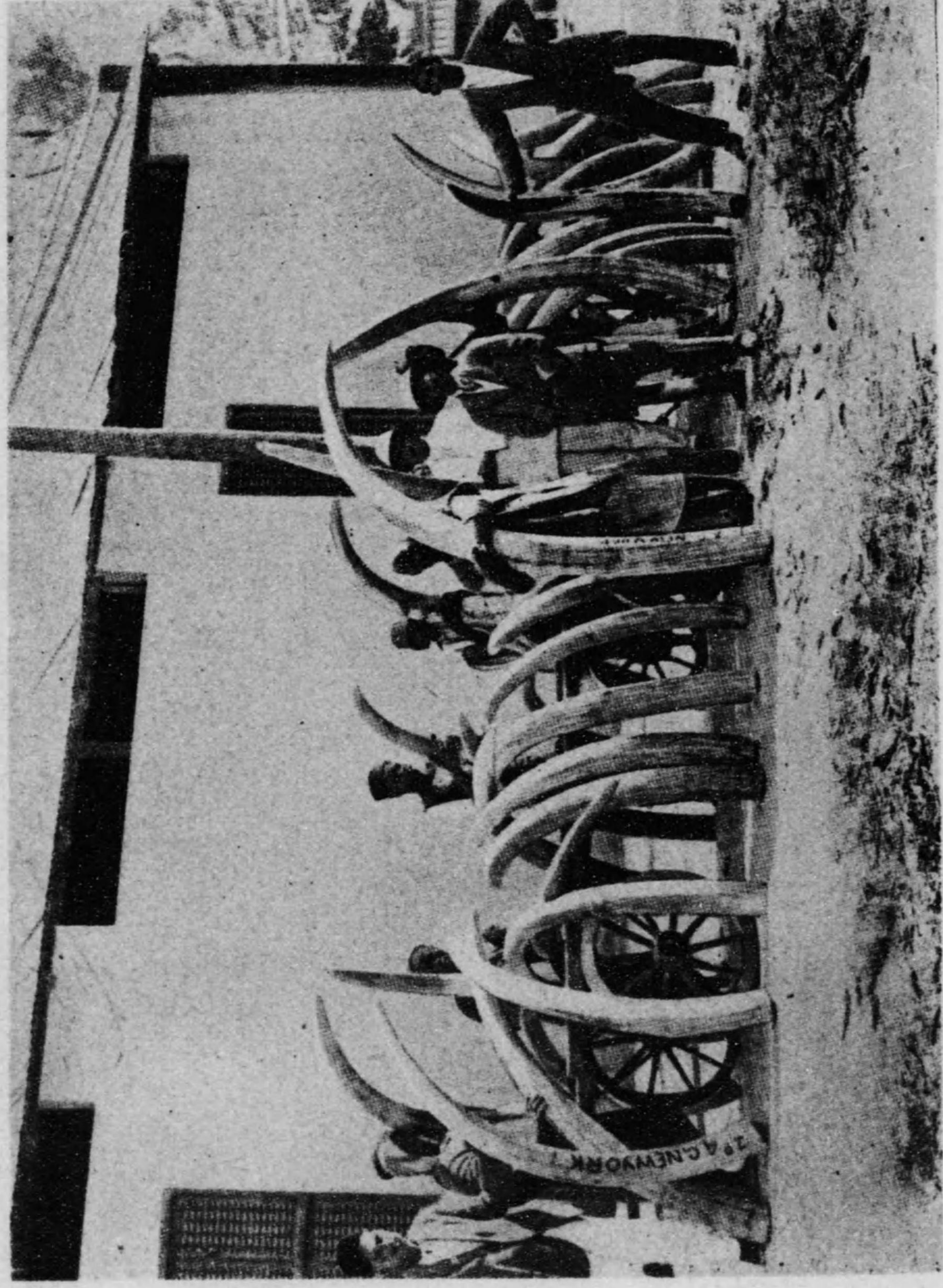
「ピグミー」族の魔術師

首府の遠望巨大の建物は舊王宮



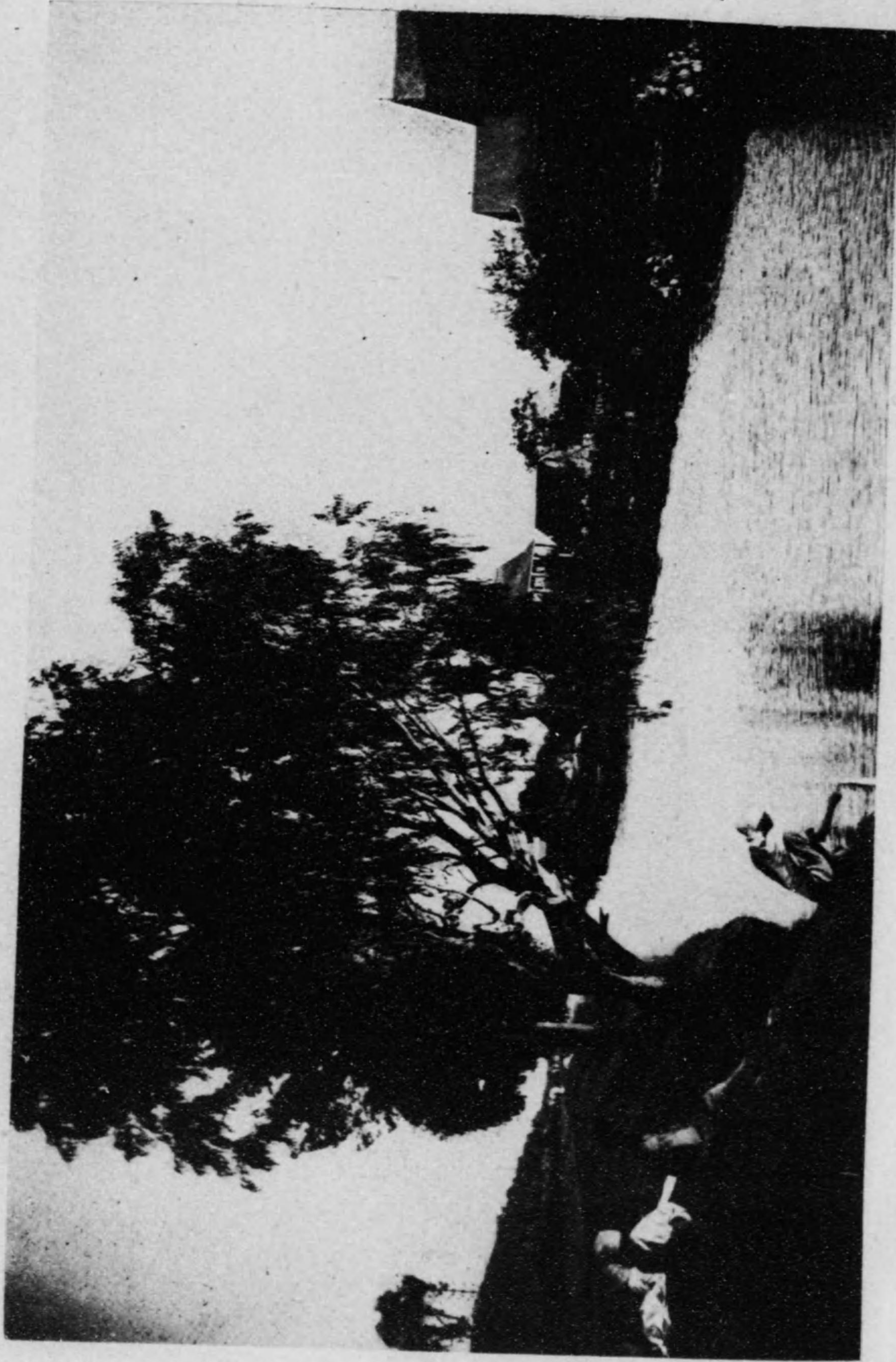
女の族種「ルス」りあ師容美もに【地蕃野

ダレサラーム税關に於ける輸出象牙検査の光景

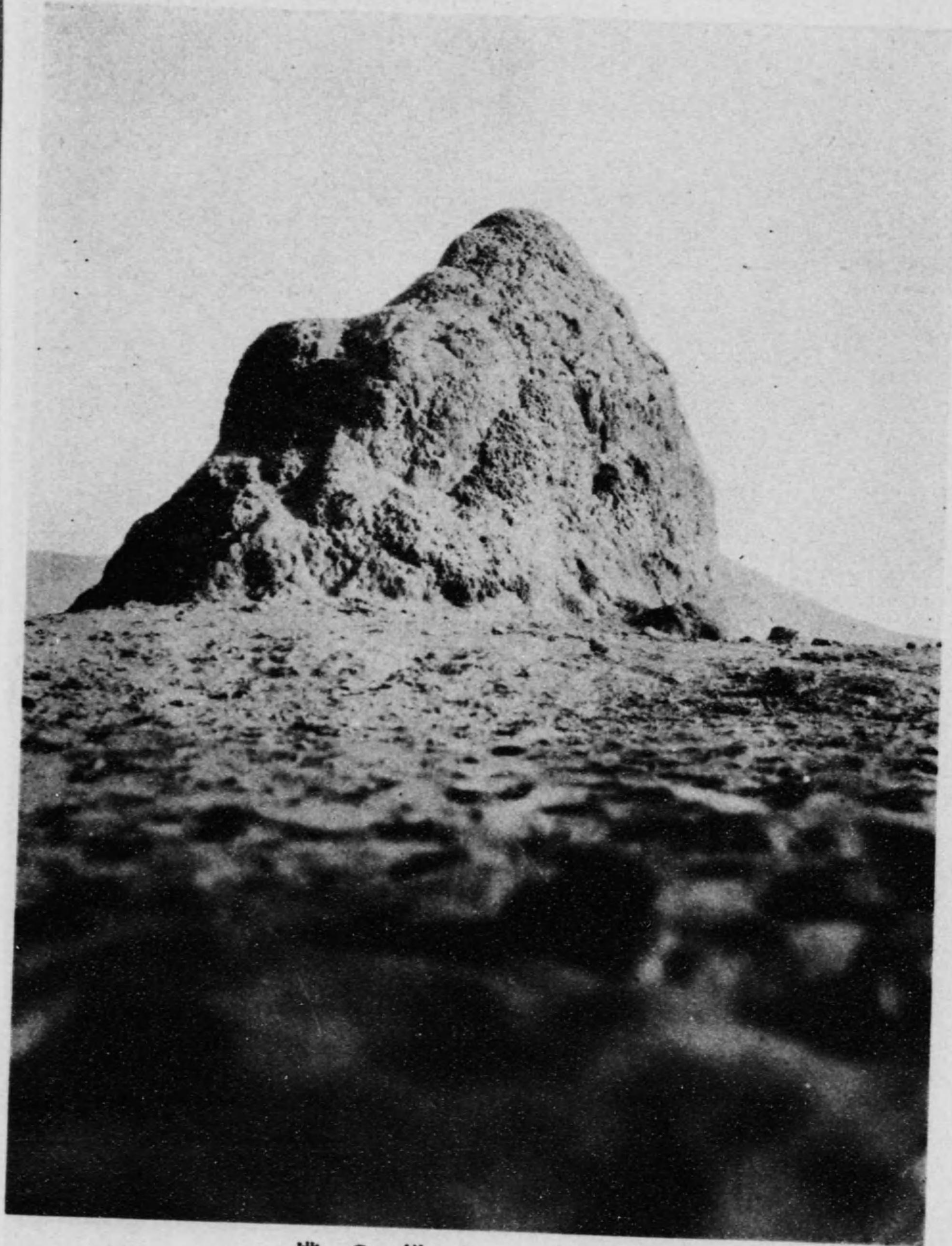


美體肉の人士島ルカガマ

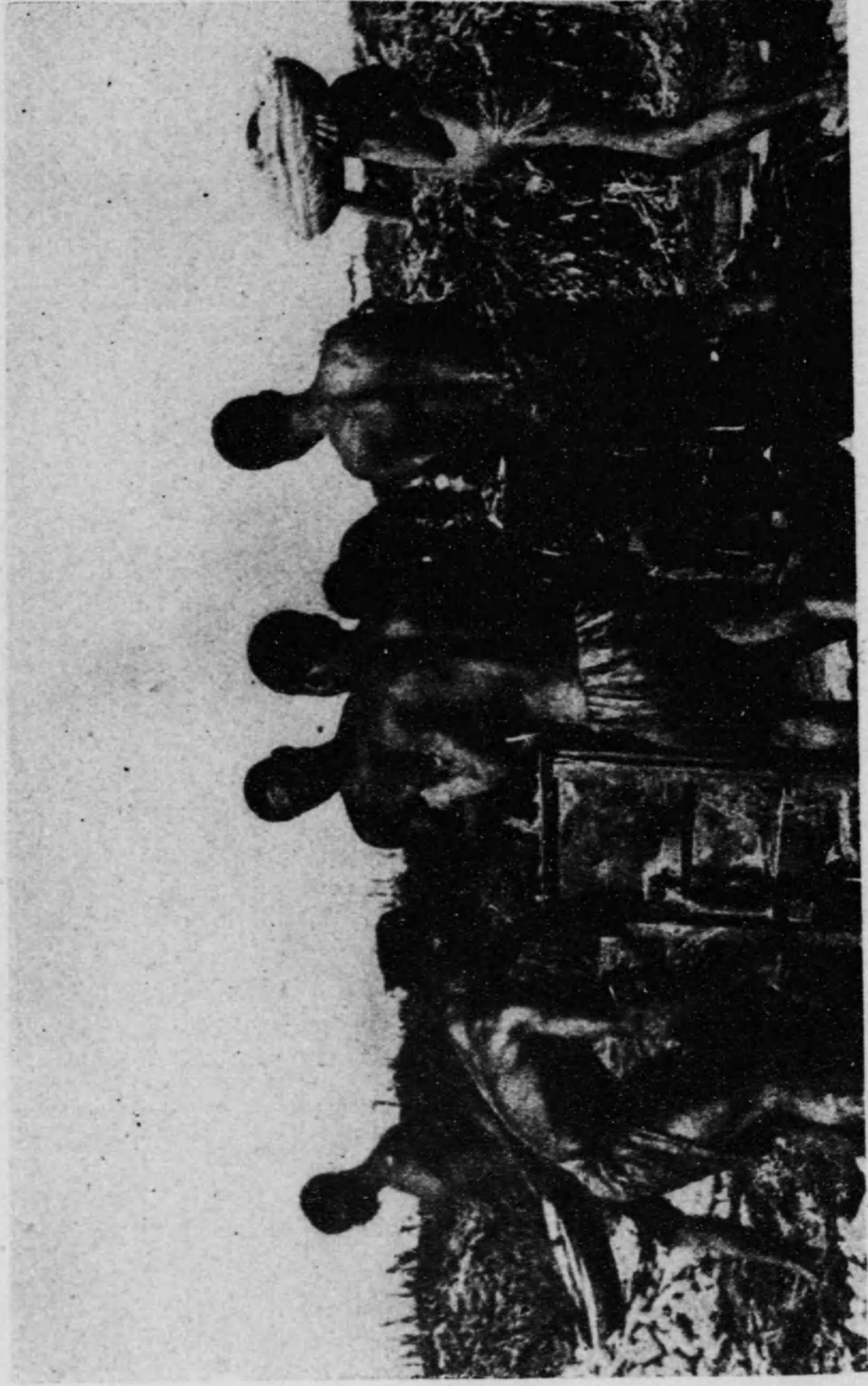
首 府 郊 外 の 風 俗



土人の女縁崖に寄り清流に白衣を洗ふ 此邊の家は皆赤土煉瓦造り其周囲と相對し色彩極めて美なり



塔の蟻さへく驚

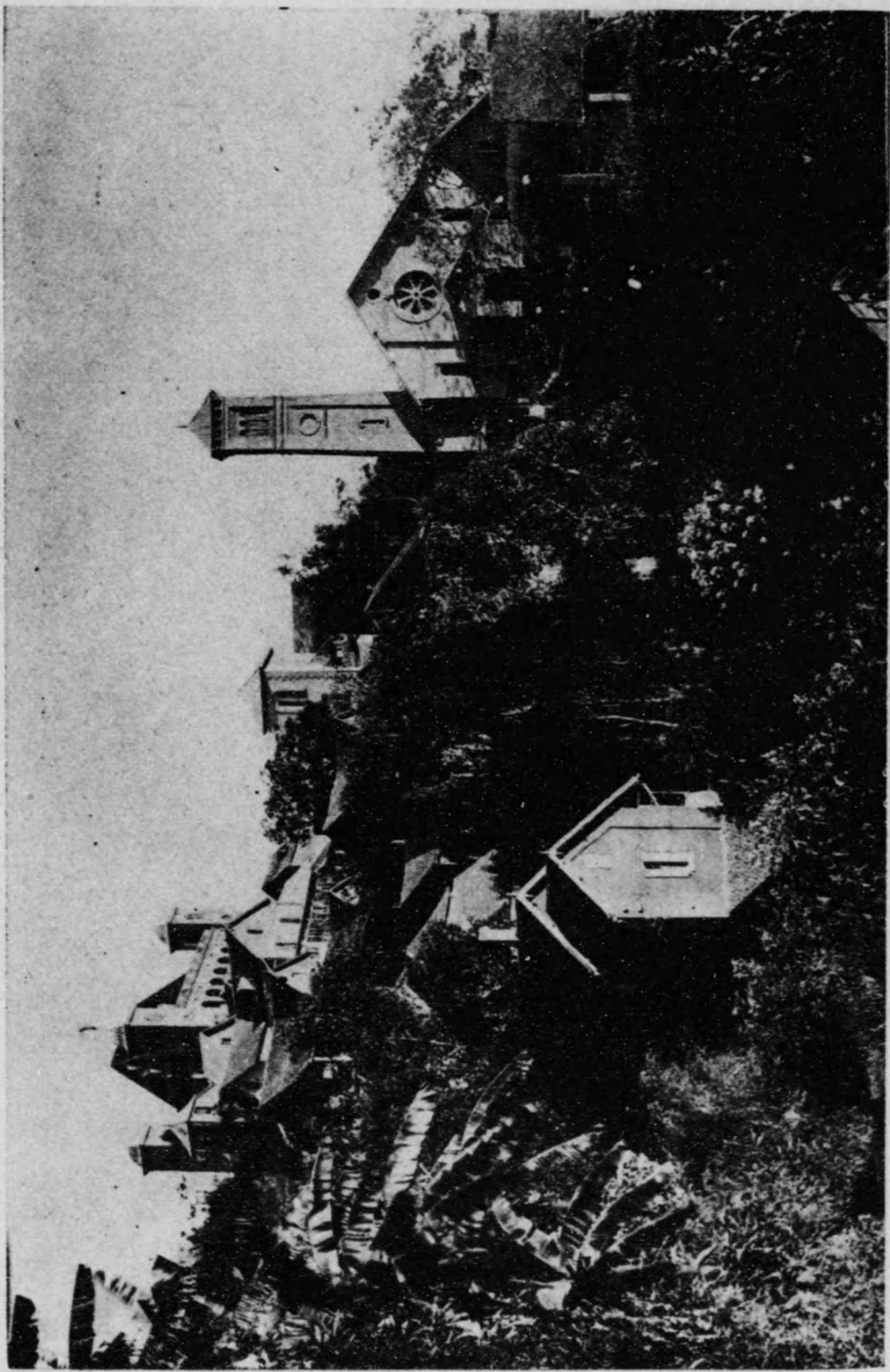


土人労働の状況

「タンガ」に於ける印度人經營のサイザル麻耕地の状況



マダガスカル島首府タナナリツの光景

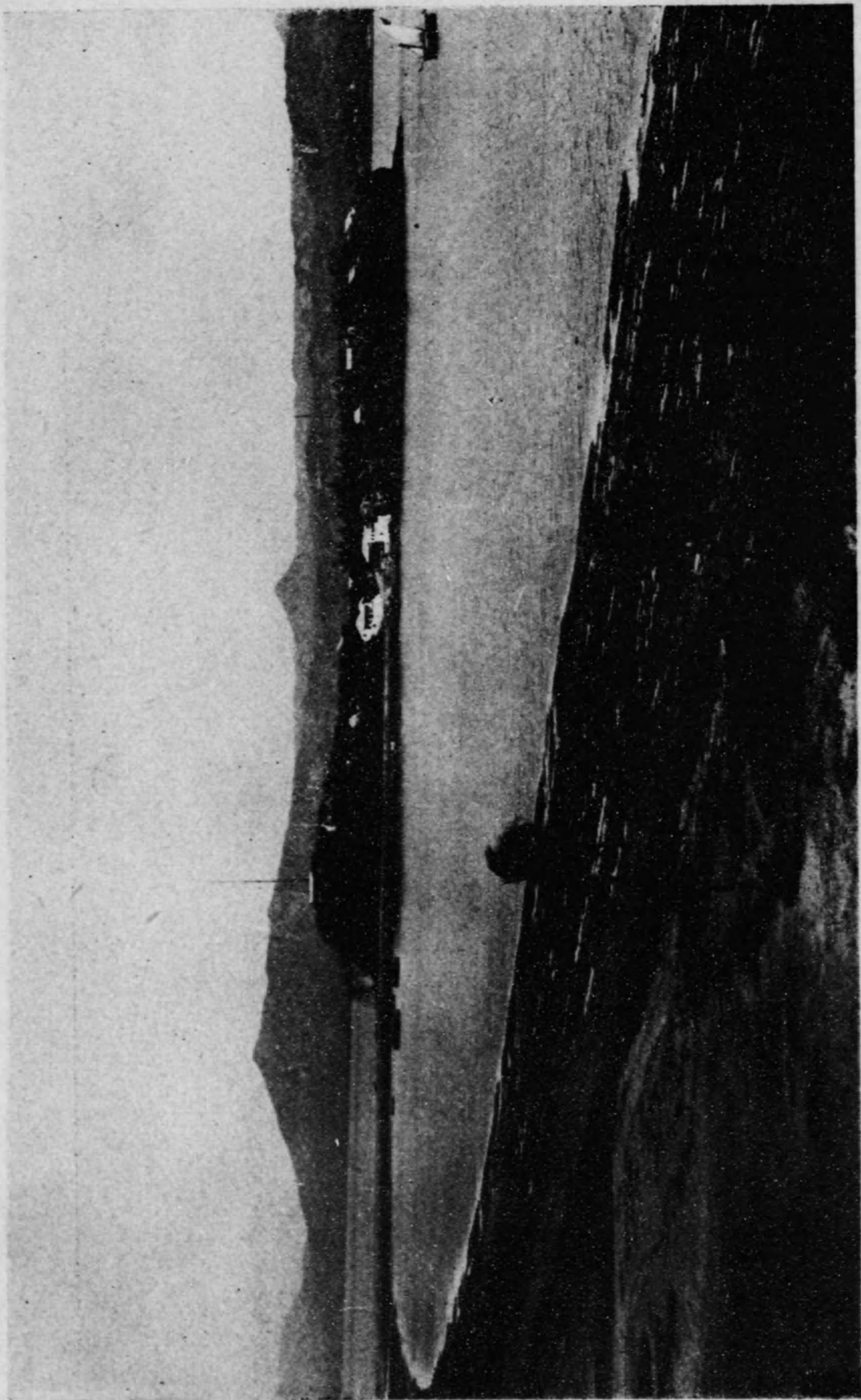


左上は舊王宮。右下は基督教會。風光の美眞に繪の如し



「マサイ」族の母と子

携へるものは瓢箪の水入、母の背に子供の安んずる狀面白し



はしがき

阿弗利加が暗黒の世界と見做されたのは最早昔の事である。現に今では遠き偏避の地方までも交通の便が開かれ、或重要地點には鐵道が通じ、雨季にあらざる限り、自動車さへも自由に使用せられて居るのであつて、リヴィングストーンとか又はスタンリーとかの探險家が、毒蛇の口にも飛び込む様な決心で、其内地に侵入した時の事を思へば實に隔世の感がある。然らば今日は阿弗利加内地の事情が何れだけ、世人に知られて居るかと云ふと、夫は矢張り分つて居ないのである。例へば山川風土にしても、土人の人情風俗にしても、將又産業其他の事にしても、世人は其最も簡単な皮想の事さへも、尙且つ知つて居ないのであつて、此意味から云ふと、阿弗利加は今も尙昔の儘の暗黒世界なのである。

併し實を云ふと阿弗利加は世人が不可解だとして居る間に、社會的にも、經濟的にも、將又其他の關係に於ても、駸々と進歩して居り、其輸出入總計が、東阿弗利加全體で二億餘萬圓に

上り、我日本との取引のみにても、勿驚輸入が約千七百萬圓、輸出が約千三百萬圓、合計約三千萬圓に達して居るのであつて、吾等は之を憚然世界の不可解國だとして、濟まして居る譯には行かないのである。

其處で我外務省に於ても、我國と最も貿易關係があり、又將來非常に有望だと認められて居る。東阿弗利加諸邦に就て、一應其實情を調査する事と成り、是等の地方に對し、經濟視察團を派遣したのが、即ち著者の阿弗利加探險と成つたのであつて、同視察團の一行は各方面の専門家七名より成り、約九ヶ月間に亙り、廣く是等の各地に就き、風土、衛生、通商、産業、交通、土人の風俗、其他の事情を手當り次第に調査したのであるが、其結果出來上つたのが、過般外務省より出版せられた、著者の東阿弗利加事情報告書である。然るに其内容は孰かと云へば、羽織袴を着けた様な、眞面目専門のものであつて、興味本位のものとは全然省略して置いた爲、聊か無味乾燥の誹を免れないのみならず、實は右の省略した部分こそ、多くの奇抜種を包藏して居るのであつて、所謂抱腹絶倒的な事、奇想天外より落つる様な事、珍無類の風俗習慣、偕は野獸の跳踉跋扈する有様等、眞に阿弗利加情緒を味ふべき事は、大抵其内に見出される

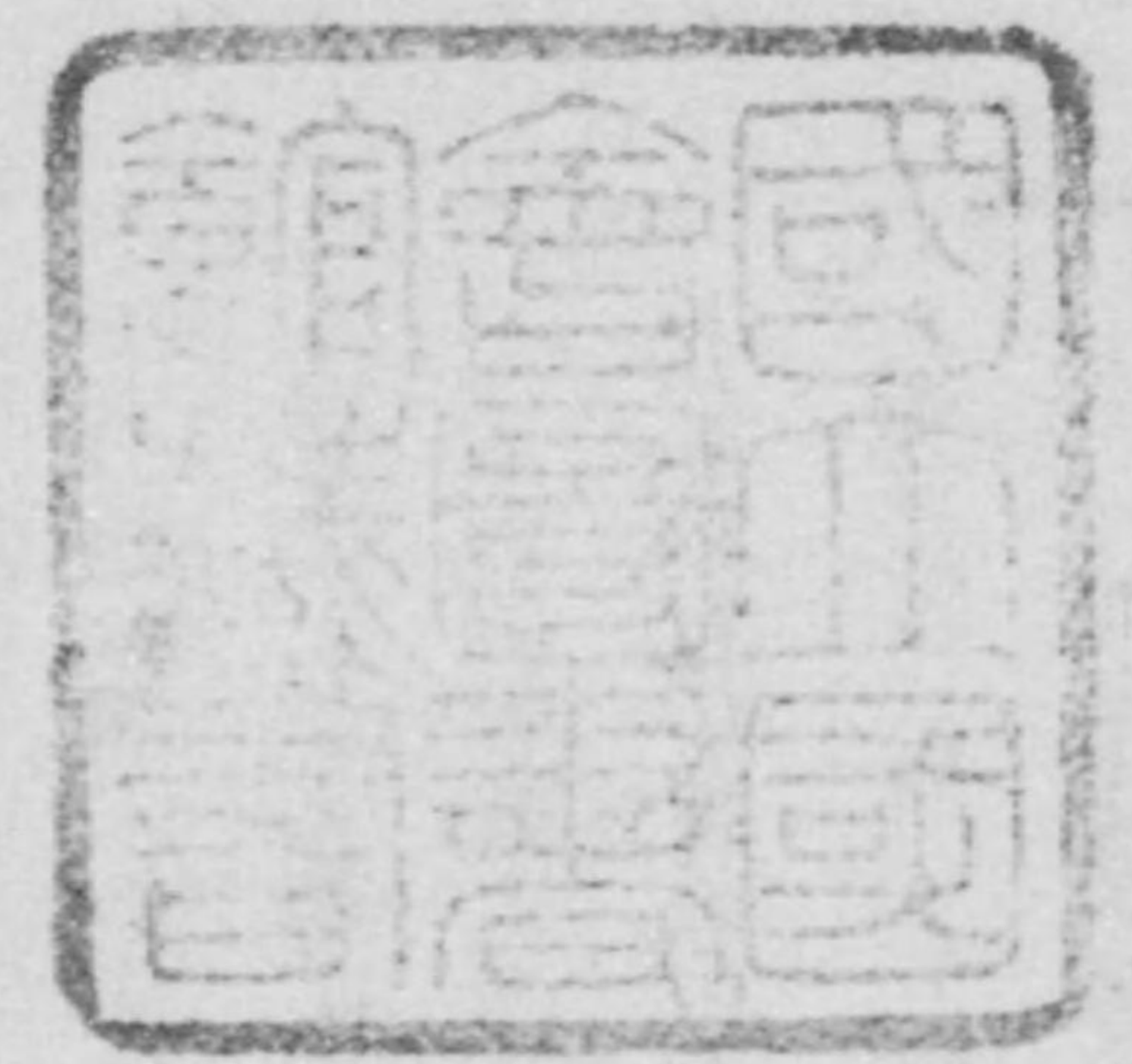
ものなれば、之を其儘に打棄て、著者限りの腦裏に祕め置く事は、著者の甚だ物足らずとする所である。されば今回圖らず友人諸君の勧めに應じ、急遽多くの珍種を蒐集し、之に最も必要と認めた、産業、貿易、其他の眞面目種を配合し、一は海外に志を有する諸君の研究の一助とし、他は閑人各位の爲め消暇の一餐に供し度く、之を一冊の單行本として、廣く江湖に分つ事とした。併し總てが極めて草卒の間に成りしものにて、甚だ杜撰の嫌なきにあらざるも、若し右の報告書と共に、多少なりとも、阿弗利加の暗黒を照らす光明と成り得るならば、著者の爲には實に望外の幸である。

昭和五年七月下浣

於東京市外下北澤偶居

著者

302.4
Q965a



512633

一 奇談
東 阿弗利加土産

附、日本人海外發展の契

目次

東阿中堅英領諸國

珍らしい野獸の話

天然の動物園……………

眞に物凄しい野獸の群……………

獅子に喰はれた怪談……………

危険極まる阿弗利加の旅行……………

面白い野獸生活の色々……………

縞馬の斥候で失敗した活動撮影隊……………

貴族の如き麒麟の一園……………

注意周到なワイルド・ピース……………

鋭敏な頭脳を持つハーストピースト……………

天使の如きグラランドカセルとトミー……………

人間の様なゴリラと可憐なバブーン……………

土人と獅子の白兵戦……………

小鳥の番人を付けて置く視力乏しい犀……………

年々減少して行く象の群……………

猛獣狩り奇談……………

苦心を要する活動寫眞の撮影……………

命がけの撮影技師……………

土人の話

人種天覽會……………

二萬年前の先住人はニグロ（黒坊）……………

代表的種族の色々……………

パンツ―種族……………

阿弗利加日本人……………

エデンの神園ウガンダ―……………

王の寵愛を受けぬ黒白雜種女……………

美男美女の多いスロヒリ種族……………

勇猛なマサイ種族……………

岩貝重太郎式武勇傳……………

三人の盜賊を相手に手槍を振ふ少年……………

農業に趣味を持つキクニ種族……………

進化の遅れて居るカピロンド種族……………

裸體から着物へ……………

出生より死亡まで

出産は四大事件の一……………

面白い人情笑……………

若者を招待せぬ産み月……………

生れた赤子は姑が綺麗になめる……………

八ヶ間敷い産後の規則……………

産兒の命名と赤子を牛に乗せて乳を搾る儀式……………

下顎から先に齒が生へると殺される男の子……………

割禮の儀式

……………

武装して三日間の立ちん坊……………七
 神に犠牲を獻げて罪障の消滅を祈る……………八
 卑怯の舉動は兩親の恥となる男子の儀式……………九
 處女にあらざれば恥辱となる小女の割禮……………一〇

結婚珍話……………

態々遠廻りして連れ歸へる花嫁……………一三
 頭の黒い牝牛が欲い……………一四
 花嫁を背負つて逃げ出す儀式……………一五
 結婚申込みは直接本人へ……………一六
 妻に排斥され夜通し主人の立ち往生……………一七
 姦通制裁と結婚資格……………一八
 夫婦喧嘩の仲裁は良人の同年者に……………一九

病氣と葬式……………

御機嫌よく迷はずに逝て下さい……………二二
 有夫の婦は葬式の御馳走は喰はぬ……………二三
 八ヶ間敷い服裏規定……………二四

蛇は祖先の化身だとして可愛がる……………二五

面白い遺産相続……………

樂天的な土人の生活……………二七
 勞働のかわりに過重なる頭税……………二九
 出獄すると洋行歸への新智識……………三〇
 投げ銭をして勞働者を集める……………三一
 欲を知らない無邪氣な土人……………三二
 泥棒と人力車夫の鼻歌……………三三

マサイ種族の奇習……………

男は長髪、女は坊主……………三六
 長老でなければ坊主になれない……………三七
 牛の生血は吸ふが野獸の肉は喰はぬ……………三八
 客の接待は妻にまかせ主人は第二夫人へ……………三九
 牧草は神聖にして平和の徴象……………四〇
 奇抜な迷信……………四二

小供の學校教育 九三

 感心すべき家庭教育 九四

新舊思想の衝突 九六

土地所有の觀念 九八

 土地の讓渡は一時的と考へて居る土人 九九

眞理を穿つた土人の方諺 一〇一

野蠻地にも華町はある 一〇八

 久米仙人正に雲間から滑べり落ちんとす 一〇九

 検事長の案内で魔窟見物 一一〇

 偉なるかな我が娘子軍 一一一

産業と日本人發展の可能性 一一四

優良な棉花の産出と重要輸出品 一二七

主要なる産業

ウガンダの棉作 一八

日、英、印三ツ巴となつて棉花買ひ入れ競争 三〇

タンガニイカの棉作と東阿の珈琲 三一

サイザル麻耕作 三三

丁字樹の栽培 三三

ココナツと其の他の農作物 三四

牧 畜 三五

驚くべきマカチー曹達湖 一三六

採掘權は英國人の獨占 一三七

日本人に適する棉作事業 一三八

 ウガンダに於ける棉花栽培 一九

 棉花栽培に無頓着の土人 三〇

 實地棉花栽培明細書 三一

 ウガンダに於ける適作品 三三

 薄荷、除虫菊、茴香、薑、大麻

五ヶ年間平均收穫表 一三五

小麥、陸稻、粟蜀、蜀黍、玉黍、大豆、小豆、豌豆、甘藷、爪哇薯、桑樹、茶、煙草、草棉
實地煙草栽培明細書 一三五

有望なタンガニカの棉作 一三六

薄資の日本人に好適な新事業 一三七

偉大なるサンジバル平原 一三九

日本人に適する丁字樹栽培地 一四〇

無資本で出來り丁字樹栽培 一四一

一英町一千六百圓以上の利益 一四一

前途有望の阿弗利加貿易 一四四

日本品の輸入は第二位 一四四

日本綿布輸入は印度人の功績 一四五

無際限なる綿布需要 一四七

注目せらるゝ高級綿布 一四八

綿布以外の日本輸入品 一四九

重なる輸出品 一五一

貿易に関する意見一束 一五二

金融機關の不備 一五三

取引相手に對する信用上の不安 一五四

帝國領事館設立の必要 一五五

商況其他に関する情報機關の不備 一五五

激甚なる賣込競争と長期信用賣 一五六

市場 雜 聞

金 融 一五八

關 稅 制 度 一五九

度 量 衡 一六〇

入 國 手 續 一六一

モンパサ港より奧地ウガンダへ

東阿の第一の關門モンパサ港 一六三

小川の如き静なキリンジン港 一六四

異人種雑居東阿一の殖民地 一六六

設備のすてきな野蕃地ホテル 一六八

蠻土に奮闘する日本人 一六九

雄大なるウガンダ鐵道の旅 一七〇

花のない原野と雄大な山脈 一七一

荒野から生れた首都ナイロビ 一七二

グイクトリア湖畔のキヌム港 一七三

グイクトリア湖横斷の記 一七五

斯んな香氣な旅行では相すまぬ 一七六

グイクトリア湖畔に榮へるウガンダ國 一七八

タッタ一人の日本人農業者 一七九

ジンジャは第二の商業地 一八〇

ウガンダ王國と土人の議會 一八一

農家の如き宮殿 一八二

ナイル河の水源地 一八五

悲惨極まる基督教史 一八七

傳道の根據始めて成る 一八九

三ツ巴の宗教戰 一九〇

殺戮の血汁は教化の種子 一九一

昔の奴隸賣買地美しいサンジバル 一九四

各國人種で混雜極まる市街 一九七

土産販賣店と商業中繼地 一九八

新舊事物のコントラスト 二〇〇

芳香馥郁たる丁字樹、綠滴る椰子の森 二〇一

サンジバル王に謁見の記 二〇三

恐縮した王様自身のお迎ひ 二〇四

日本一のスアヒリ語學者 二〇七

ダレサレムよりキゴマへ 二〇八

雄大な獨逸式ダレサラーム 二〇九

市内建物は印度人富豪の所有 二一一

市の人口と日本人 二一二

四通發達のタボラ市 二一三

中央の大都市ドマ市 二二四
 タンガニイカ湖畔のキゴマ 二二五
 ムロンザとブコバ 二二六
 ウジジは二大偉人の會見地 二二六
 有望のタンガ港と其他の諸港 二二八
 世界第一の植物研究所 二二九

歐洲人對土人問題

白、土優越權争ひ 二二一
 英國の押入り強盜 二二三
 勝手の理窟を付けた白人優越權主義 二二三
 看板と矛盾する英國の政策 二三五
 英人我利説と仁義主義 二三六
 植民地知事會議の決議 二三七
 英國の二重政策 二三八
 プーア、ホワイトの不安 二三九
 印度人入るべからず 二四一

抜くべからざる印度人の勢力 二四三
 名をさげ實を取るすい英國人の政策 二四三
 印度人と英人の睨め合ひ 二四五
 一般的政策 二四六
 將來の憲法的進化 二四六

實際上的問題

議會會議員 二四七
 參事會議員 二四八
 市會議員 二四八
 市内に於ける隔離問題 二三八
 高原地保留問題 二三九
 移民問題 二三九
 前途危険の東洋人排斥 二四〇
 阿弗利加は新しい且つ古い國 二四一
 三千年前に於けるアフリカの文化 二四二
 阿弗利加の大古時代に於ける文明 二四四

十五世紀始め支那人の東阿に於ける活動……………二四六

亞刺比爾人の跳梁跋扈……………二四七

悲惨極まる奴隸狩……………二五〇

 慘絶、凄絶なる奴隸の輸送……………二五一

 轟々たる奴隸廢止の聲……………二五三

探險時代來る……………二五五

 三大湖水の發見……………二五六

 リグイングストンの救護……………二五九

 スタシリーとリグイングストンの會見……………二六〇

 リグイシグストン・スタンリーの決別……………二六二

 カメロン大佐の阿弗利加大陸横斷……………二六三

 偉大なるスタンリーの功績……………二六四

東阿弗利加分割せらる……………二六六

 列國に於ける利害の錯綜……………二六八

 英獨の妥協と國防上の要地……………二六九

 英獨の勢力範圍……………二七〇

英佛の宗教戰……………二七〇

地理的概観

面積と人口……………二七三

内地は總て高原地……………二七四

不思議な地球の龜裂……………二七六

大陸の陷没……………二七七

 神秘を極める湖水の様々……………二七八

 有名な湖水の發見……………二七九

氣候と衛生

暑くない熱帶地……………二八一

低地の炎暑は流石に猛烈……………二八一

豪雨と長雨……………二八三

不良な衛生狀態……………二八四

マラリヤ熱の流行……………二八五

恐るべき睡眠病の襲撃……………二八六

荒武者蠅に咬まれて色を失ふ……………二八七
 指先に喰ひ付く砂蚤とペスト……………二八九
 全土人の七割半は梅毒……………二九〇
 土人の皮膚病と歐洲人……………二九一

政治組織の大要

諸王の威厳と安全とを保護する英國の政治……………二九三
 ケニヤの政治（沿革）……………二九四
 中央政治……………二九四
 地方政治……………二九六
 ウガンダの政治（沿革）……………二九七
 ウガンダ中央政治……………二九八
 諸王國の政治組織……………二九九
 タンガニイカ政治（沿革）……………三〇一
 タンガニイカ中央政治……………三〇一
 ザンジバルの政治……………三〇三
 現在の制度……………三〇四
 英領東阿聯邦問題……………三〇六

印度人排斥は日本にも大影響……………三〇七
 英國移民の聯邦組織運動……………三〇八
 東洋人を支配せんとする歐洲移民……………三〇九
 土人の利益を保護するは英政府の義務……………三一〇
 英政府の研究事項……………三一一
 文化に同化するまで土人の舊慣維持……………三一二
 聯邦組織は早尙……………三一三
 甲、暫定的方法……………三一四
 乙、恒久的方法……………三一五
 丙、倫敦に於ける諸機關の改革……………三一七
 丁、ケニヤ、ウガンダ、タンガニイカ立法議會……………三一八
 英國政府の苦しい立ち場……………三一九
 偉大なる二つの横斷鐵道……………三二一
 寢具もホーイもない列車……………三二三
 タンガニイカ中央鐵道……………三二三
 設備のよい獨逸人經營の鐵道……………三二四

黒人帝國アビシニア

不思議な國アビシニア

世界稀なる黒人帝國	三三九
地理的に天祐の國	三三一
氣候と衛生	三三二
梅毒と病院	三三三
驚くべき地球の龜裂	三三四
土人は皆黒坊	三三五
女の裝飾に電線を失敬	三三七
持て餘す奴隸狩と家畜の略奪	三三八
皇統連綿三千年	三四〇
世界一舊國を誇るアビシニア帝國	三四一
歴史から見たアビシニア	三四三
英雄大勢に通ぜずマクダラ城陥落	三四四
中興の皇祖メネツク二世	三四六

アビシニア獨立は三國協定のお蔭	三四八
大名の參勤交代	三四九
江戸時代其の儘の風俗	三五三
大名と武士	三五三
女皇と攝政	三五四
攝政殿下は佛國仕込み	三五六
複雑で不便な言語	三五七
面白い兵隊さん	三五八
綿布は日本から	三六〇
困難の内地旅行と沿道の光景	三六一
熱帯地氣分のダオウン市	三六三
珍らしい蜃氣樓	三六四
繪の如き首府アババの近郊	三六五
首府アガス・アババの珍光景	三六六
大寺院と死刑臺	三六八
不思議な自然石の大寺院	三七〇
驚くべき葡萄牙人の遺跡	三七二

珍無類の裁判

牛羊を賭ける裁判……………三七五
 債權、債務者を鎖で繋ぎ合す……………三七六
 暴に報いるに暴を以てす……………三七七
 外國人との係争は皇帝自ら裁定す……………三七八
 アビシニアの司法制度……………三七九

奇抜の結婚

結婚は保證人の責任……………三八二
 離婚を許さぬ教會の結婚……………三八三
 給料を拂はぬ雇ひ女……………三八四
 有給の妻……………三八五
 奴隸との結婚な恥辱……………三八六
 再婚の不名譽と血族結婚の禁止……………三八六
 強姦は罰金制……………三八八
 女子の出産は狼の餌食……………三八八
 異彩な放つ土人の葬式……………三九〇

面白い風俗珍無類共進會

今も行はれる奴隸制度……………三九二
 猛將ハプタ陸軍大臣……………三九六
 馬に乗つた乞食……………三九七
 臭い臭い英國人の血が臭い……………三九九
 口のへらないアビシニア人……………四〇〇
 嚴重な階級の區別……………四〇一
 部落の家族的生活……………四〇二
 珍らしく煙草を喫はない國民……………四〇二
 泥棒しても正直者……………四〇四
 御馳走に美女提供……………四〇五
 時間の觀念に乏しく國民の半数は僧侶……………四〇五

無學も又便利

賄賂を取りそこれた無學の役人……………四〇八
 不便な通貨……………四一〇
 隅に置けない外交手腕……………四一一

伊太利の計畫する鐵道布設問題 四二二

關知せざる三國協約 四二六

ツアナ湖の水利問題 四二七

經濟的利益に關する英、伊協定 四三〇

英領地との國境地方に於ける奴隸狩問題 四三三

重要なる産業と有望の棉花栽培 四三五

度量衡制度 四三六

關稅制度 四三七

入國其他の取締なし 四三八

我が貿易發展の可能性 四三八

別天地マダガスカル

世界の別天地佛領マダガスカル島 四三三

地理的特色と美しい風景 四三五

舊王朝の勃興と其の末路 四三七

佛國の武力を輕じ干戈を辭せず 四三九

女王の退去と舊王朝の没落 四四一

行政組織

總督府の組織 四四二

地方制度 四四四

村落行政 四四六

雄大な横斷鐵道

氣候と風景の良いたナナリブ 四四八

保養地として優れたアンチラブ 四五〇

重なる港

新年の行事

女王盛裝して人民の前に麗姿を現す 四五四

百官の面前に女王入浴の儀式 四五六

舊王朝衷中の風俗 四五八

土人の祖先と其の人種

..... 四六〇

代表的種族

最も優秀なウーヴ種族 四六三
 ベチレラ種族 四六五
 ベチミラカ種族 四六五
 サカラブ種族 四六七
 出生より死亡まで儀式の色々 四六七
 幅のきく男子の出生 四六九
 産湯贖罪式と雑炊の馳走 四七〇
 悪日に生れた子は皆殺す 四七一
 結婚儀式の様々 四七二
 死 亡 四七四
 葬式と費用 四七五
 死者を祖先の許に歸へす儀式 四七七
 住居と家の構造 四七八
 食物と鰐の卵 四八〇

面白い土人の迷信 四八一
 街路と公園の女 四八四
 奴隸制度と強制労働 四八五
 海 賊 物 語 四八八
 奇抜ふ土人珍話一束 四九一
 往復共数の違ふ坂道 四九二
 水を供給する旅人木 四九三
 雨を降らす珍木と毒草 四九四
 驚くべき螢の群 四九五
 土人の稻作 四九六
 土人藝術と宮技 四九七
 珍客として御輿に乗せらる 四九八
 土人哲學とイラン・イランの木 五〇〇
 土人のモダン振り 五〇二
 鼻ぎモッコと自動車 五〇四
 流行病と蠅の襲撃 五〇五

牛を盗まれば嫁が貰へぬ……………五〇七
 アフリカ唯一の日本人成功者……………五〇七
佛蘭西政府の繩張主義……………五〇九
 重なる産業……………五一一
 牧牛と納税……………五二二
 珍らしい養蠶と野蠶……………五二三
 有望な日本人發展地……………五二五
農業經營案内……………五一六
 (1) 經營方針……………五一六
 (2) 主なる農作物の耕作に要する資本……………五一九
 (3) 土地拂ひ下げ手續……………五二一
日本と貿易發展の可能性……………五二三
 度量衡、金融、關稅制度……………五二四
日本人入國手續と集團的移住……………五二五

間の抜けた葡萄東阿弗利加
葡領東阿弗利加
 隨氣に満ちた葡萄牙人……………五二九
 日本人の投資移住を歓迎……………五三一
 地理上の色々と衛生状態……………五三三
歴史上より見た東阿……………五三五
 土人へ入籍を強制し葡萄牙人の繁殖を謀る……………五三六
 人種と人口……………五三七
政治組織……………五三九
 (1) 直轄領……………五三九
 (2) 會社領……………五四一
 (イ) モサムビク會社領……………五四一
 (ロ) ニヤサ會社領……………五四三
 最も奇抜なブラソ一制度……………五四四

都市雜觀

ペイラ港は東阿航路の中繼地……………五四四
 不潔な葡萄牙人ホテル……………五四六
 ロレンソ・マルケスは東阿南方の重要港……………五四八
 享樂の巷マルケス……………五五〇
 其の他の都市……………五五二

主要な産業……………五五四
 (1) コブラ、(2) 砂糖、(3) サイザル麻、(4) 棉花

日本との貿易……………五五八

貨弊並に課税……………五六一
 金融、度量衡、關稅制度、輸入税、輸出税、

移民入國規則……………五六四

目次終

東阿中堅英領諸國

奇談
一 束 阿弗利加土産

附 日本人海外發展の栞

法學博士 大山卯次郎著

珍らしい野獣の話

天然の動物園

阿佛利加には我々が想像もつかない變つた事が澤山あるが、其内で特に珍らしいのは、ケニヤノ高原に於ける野獣の群である。而して其最も多數に群がつて居る地方はモムバサノ西方、二百十二哩のマキンジと云ふ處から、三百三十哩の奥地に當る、首府のナイロビ附近迄、大凡百二十哩四方の間に於て、ウガンダ鐵道の中に狹んだ一帯の大原野である。其處には編馬、麒麟

野牛、大鹿、小鹿、駝鳥其他色々な名もわからない動物の大群が、自由の天地を構へて居るの



(方地イサマ)群の鶴ウボラマ

は、彼方にも此方にも駝鳥が大股を擴げて悠々と寛歩して居る。麒麟が幾匹となく驚いたやう

な、長い首を伸して立つて居るやら、大牛の様なワイルドビーストとか又は、ハートビースト杯の大群が四方八方に駈け廻つて居る。馬の様に大きな鹿、美しい柔和そうな小鹿の群、其他見たこともない名も知れない各種各様の野獣が、吾等の視界に去來する有様は、恰も天然の動物園の如くである。然も夫が數時間に互り大きなバナラマに成つて、繰り返へされて來るのであるから、實に天下の偉觀である。之を評するに只快絶絶と云ふ外に言葉がない程である。

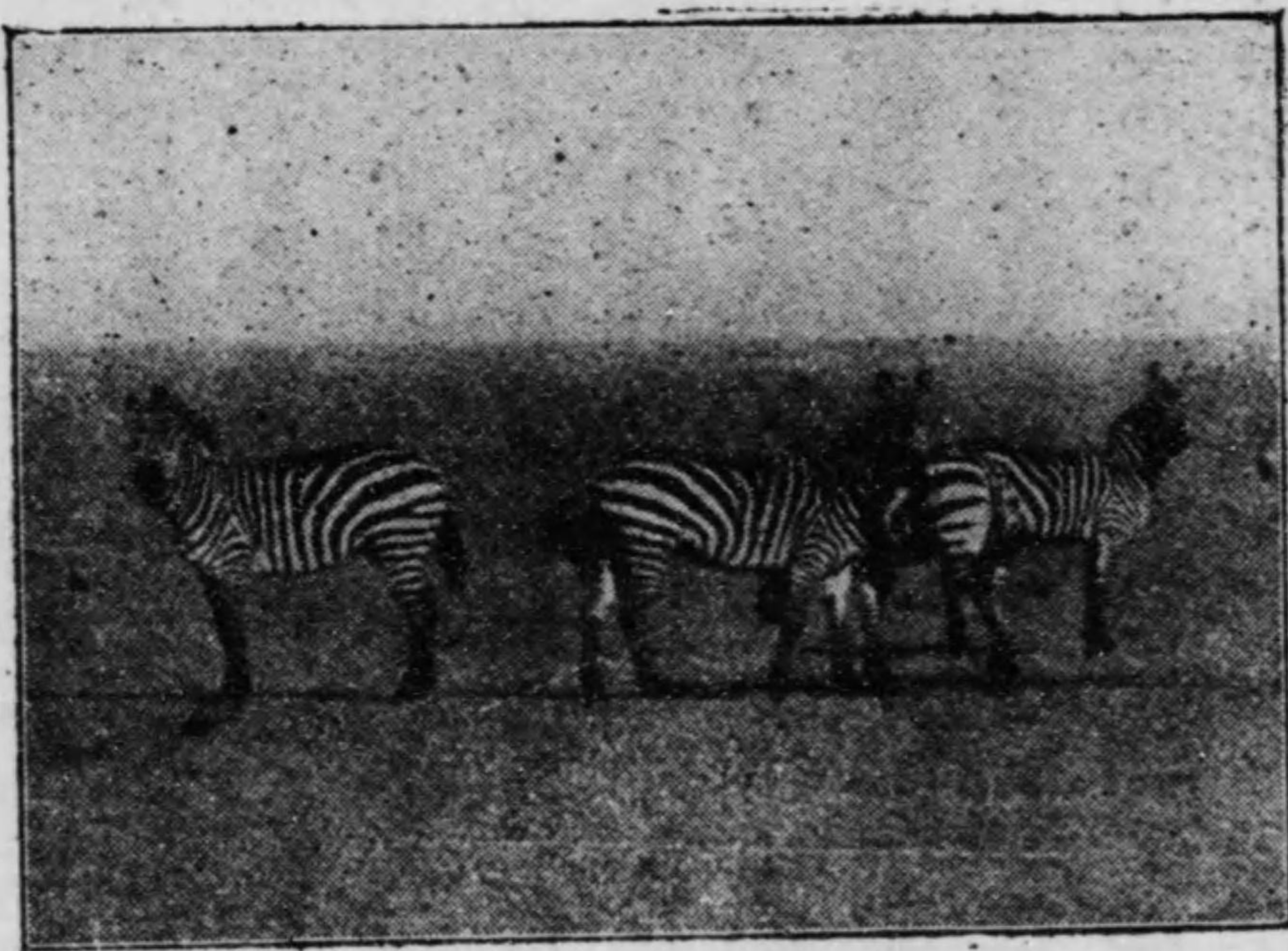
眞に物凄い野獣の群

事實を自白するなれば、吾等の見たのは、嘗て聞た程ではなかつたので、著者は心密に人の話には、多少の割引が必要であると云ふことを考へた。夫は聞いた話が餘りに大袈裟であつたからである。其處で著者は其日の晝、ナイロビのホテルに着くと、直に其支配人に向ひ、右の光景に就て感歎の言葉を述べ、豫て聞いた話と多少齟齬したことに付、自分の感じた儘を卒直に話して見ると、豈に圖らんや支配人の話は更に太袈裟であつて、極力鐵道線路から離れた方面に、自動車旅行を試みる様に勸告された。素より吾等に異存のある筈はない。即ち彼の周

旋に任かし一行七名しこたま辨當を仕入れ込み、自動車二臺に分乗し往復百五十哩の豫定で、カチアドと云ふ處を目標とし、所謂サファアリなるものを試みた。サファアリと云ふのは旅行と云ふ意味の土語であつて、東アフリカ一般の通用語である。其日ホテルを立つたのは午前八時、市街を離れると早くもボツ／＼野獸が其姿を現はし、進むに従つて出るは出るは、右も左も行く手も悉く驚異すべき野獸の群であつて、其光景は只驚くの外なく、其の内最も多いのは何と云つても縞馬の群である。素より其数は到底數ふるに遑なく、只群を以て算ふる位のものであるが、何か遠方に見へるものがあるので、岡か森かと望遠鏡を取り出して見ると、夫は幾群かの縞馬、又は野牛であつた。麒麟も頗る多く、駝鳥も又多い。大鹿小鹿も同様である。汽車から見たのも偉大であつたが、此の光景は又別世界の感があつた。これによつて吾等の満足は云ふ迄もなく、先に聞いた話の誇張でなかつた事も明かとなつた。斯くして大凡三十哩位下ライブしたが、何處迄往つても同じバナラマが繰り返へされる如くであつた。吾等は只世界に斯ふした驚異すべき處が廿世紀の今日あるのを不思議に思ふのであつた。

茲に於て衆議はアフリカの話が、實際と大に相異して居る事を認めしたが、今度の實見により

ケニヤの高原に跳躍する縞馬の群



野獸が話以上澤山居ると云ふ事に於ては、又話が相違して居たのである。時に午前十一時一同空腹を感じたから、用意の辨當を出して中食を喫し、此上は徒に豫定の行路を遂ふにも及ぶまいと云ふことに一決し、緩る緩ると歸途に就き、人も我も之をアフリカ旅行の一の大きな記念とした。

獅子に喰はれた怪談

聞く所に依れば象は嘗て澤山居たが、今日では餘程狩り盡されて少くなつたとの事である。又獅子、豹、犀等の如き猛獸は澤山居るが、日没から日の出迄の間で無ければ出遇はれないとのことであるが、獅子に就て最も悲惨な話のあるのは、ウガンダ鐵

道敷設工事のことであつた。當時技師の一人で陸軍中佐ゼー、エイチ、バターソンと云ふ人の、當時の記録に斯んな事がある。

一八九九年三月十日の夜、ヴォイ附近の鐵道キャンプで、非常な事變があつた。夫は外でもない。技師のオーハラ氏が獅子に噛まれたことである。其夫人が涙ながらに物語つた所に依ると、其夜夫人は良人と同じ寢臺で、又二人の小供は他の寢臺で、同じテントの内で寢て居た。處が丁度夜半頃夫人がふと眼をさますと、獅子がキャンプの外を歩んで居る様な音を聞いたので、直に側に寢て居た夫を揺り起して、それを知らせると、彼は直に飛び上り、鐵砲を片手に提げて外に出て、テントの廻りを見廻つたが何物も見へない。其處で土人の番人に申付け、少し離れた處で、空砲を發射せしめた後、土人をして其邊を見廻らしたが、ドンキーの外には何物も見えないと報告したので、オーハラ氏もすつかり安心し、夫人に向ひドンキーだ心配しないでもよいと云ひながら歸つて來た。其の夜は大變暑かつたので、テントの戸を明け放つた儘又元の様に良人の側で寢た。所が夫人は一寸マドロンダと思ふ頃、何やら枕を引つ張つた様に感じたので、直に起き上り側を見廻はすと良人が居ない、どうした事かと驚いて飛び上り、彼

を呼んだが返事がない。丁度其時戶外に物音がしたので、飛び出て見ると憐むべし、良人が其處に倒れて居るではないか、夫人は急ぎ抱き起こそうとしたが力及ばず、大きな聲で土人の番人を呼ぶと直ぐ土人は來たが獅子が居ると云つて近寄らない。そこで夫人は振り返つて自分の側を見ると、驚くべし、二呎程離れた處に大きな獅子が炬の様な目玉をして、夫人がする。多分餌食を取り戻しに來たのであらう。而かし土人が再び發砲したので逃げ去つたが



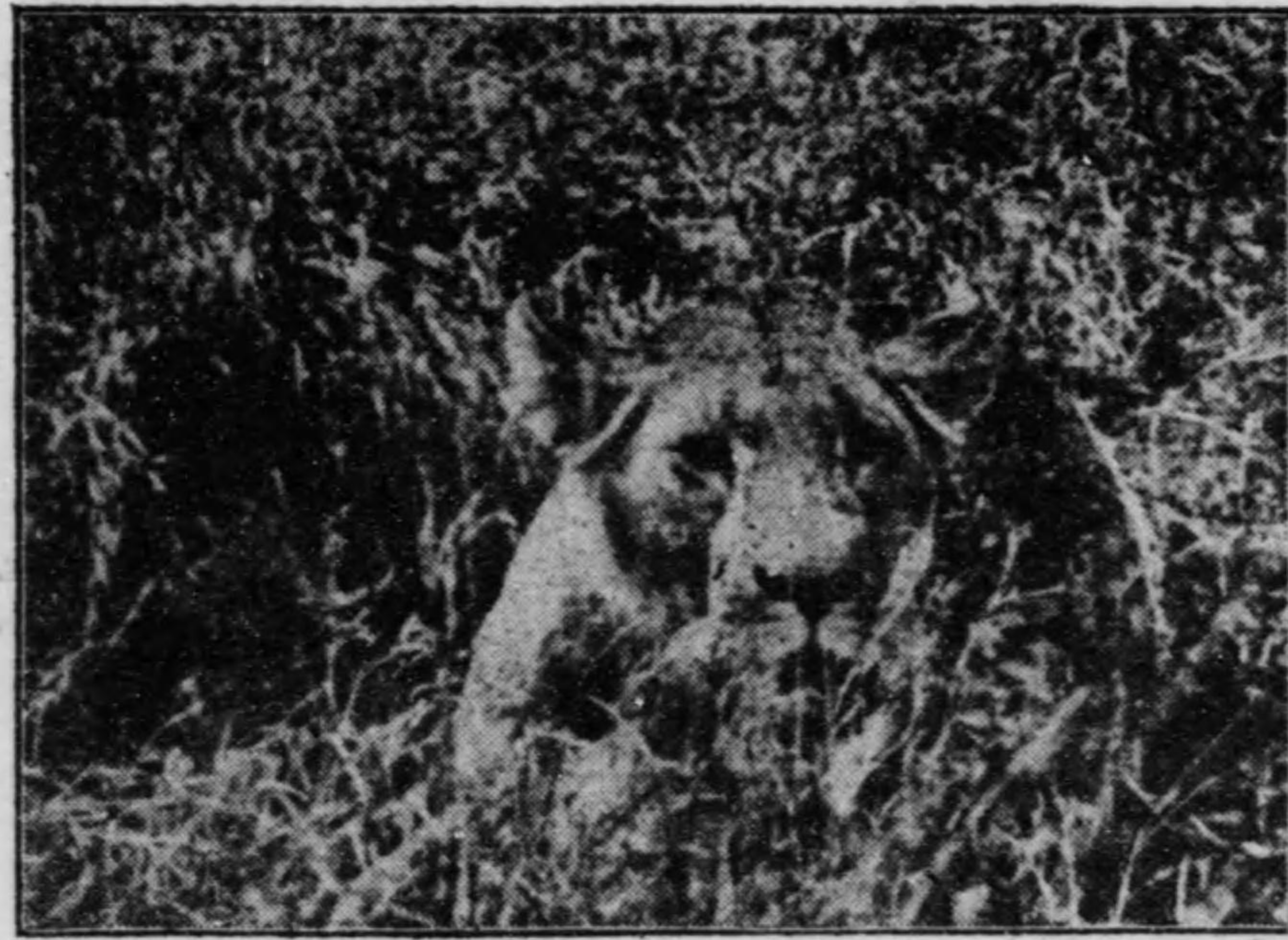
ラアセと豹

の方を見詰めて居る。夫人は殆ど氣を失つたが、幸ひ其刹那に土人が發砲したので、獅子は叢の中へ逃げ込んでしまつた。其内に大勢土人の雇人が來て、良人を寢臺の上に昇ぎ入れたが其時彼は唯一つの暖かい遺骸であつた。所が一同がテントに入るや否や、獅子が再び返つて來て戸に當る音がする。多分餌食を取り戻しに來たのであらう。而かし土人が再び發砲したので逃げ去つたが

暫くすると又遣つて来た。又發砲すると逃ける、逃げたと思ふと又遣つて来る、遂に明け方迄絶へ間なく其獅子に惱まされたと云ふことであつた。

危険極まる阿弗利加の旅行

斯ふ云ふ様な奇談は澤山ある。或獅子杯は工夫を十人も喰つたとさへ云はれて居る。そういう猛獸が今でも澤山居ると云ふのだから、阿弗利加の旅行も決して安全だとは云はれない。序ながら茲に附け加へて置きたいことは、是等野獸の生活振りの、非常に面白いことである。即ち或者は極めて伶俐であるが、或他の者は甚だ遲鈍であると云ふ事である。又彼等の内には性質の非常に、柔和な者もあるが、又寧猛な者もあり、感覺の鋭敏な者もあれば、鈍感な者もある。同時に彼等相互の間には、激し



子獅の窟

い生存競争もあるが、又驚くべき程共存共營主義も行はれて居る。其生活状態の千差萬別な事は恰も人事の複雑な事と變らないのであつて、之を仔細に觀察すると其處には、趣味の極めて津々たるものがある。

面白い野獸生活の色々

縞馬は東阿弗利加に於て、一番澤山居る野獸であつて、常に大群を作り廣い荒野の中を駆け廻つて居る。此獸に就て最も面白いことは、其感覺が非常に鋭敏なことであつて、彼等が乾燥した原野の中で、水の在場所を見出す事に於て尤も妙を得て居ることは實に不思議な位である。すべて他の動物が水を求めんとする場合には先づ縞馬を尋ね、夫を目標として捜がすとさへ云はれて居る。但し東阿弗利加の内地は一帶に高原である爲、雨季には濁流が滾々として流れて居るが、一度其時期を経過し乾燥期に入る時は、河も谷も皆干上つて仕舞ふのであるが、斯る場合に縞馬は地底に水の在りそうな處を見出し、前足でこつこつと土を掘るのである。すると其處から不思議にも、水が湧いて出ることは實に、百發百中であると云はれて居る。併し縞馬

の弱點とする所は、性質が非常に柔和で、少しも戦鬪力の無いことである。従て彼等は獅子や



トスービドルイワ及ラブセ

豹等の餌食となる斗りであつて、甚だ意氣地がないのであるが、其代はり彼等には非常に、團體意識が發達して居り、何れを駈け廻はるにも大小の群を作り、夫には必ず若干の斥候を置き、敵の來襲に備へて居るとの事である。

縞馬の斥候で失敗した活動撮影隊

嘗て英國の活動寫眞の撮影隊が河邊に水を飲む一群の縞馬を見出し、直に撮影機を組立て、夫を寫そうとした。所が、縞馬は驚いて直に逃げ去つてしまつた、併し後刻何れかの群が必ず水を飲みに来るに相違ないと思つたから、撮影機を其儘とし、其上を樹の枝で蔽ひ、一見灌木の茂りの様に見せかけ、身

を潜めて待つて居ると、果して縞馬の大群が遣つて來た。所が間近になると急に足を止め、其中の一頭丈が駈け出して來て、頻りに周圍を見廻はして居たが、懸て危険を見出したと見へ、本隊に駈け戻り何か傳へたと思ふと、其大群は折角水を目前に見ながら、其儘踵を廻らし元の道を何れへか駈け去つたと云ふことであるが、縞馬は斯の如く常に臆病であるが、自ら守護する爲には頗る伶俐であつて、彼等の團體中に、斥候又は番人の如きものを置き、常に敵よりの襲撃に注意を拂ふて居る事は誠に面白い團體組織と云ふべきである。

貴族の如き麒麟の一團

麒麟は古代動物に屬する阿弗利加特有の珍獸であつて、其堂々たる巨體、悠悠迫らざる態度は眞に動物界に於ける貴族の様な趣がある。あの長い足を擴げ、頸を延ばして、廣い原野を寛歩して居る有様は、何んと云つても天下の太平を感じずには居られない。彼は縞馬の如く大群を作らないが常に若干の同類を伴ひ、三々伍々極めて自適の生活を營んで居る。併し性質は極めて敏感であり、又非常に注意力に富んで居る。是れ活動寫眞撮影者等の最も困難とする所で

ある。

注意周到なワイルドビースト

ワイルドビースト又はヴィルデベエストも亦群居動物の一つであつて、巨大な體軀と立派な角とを有し、毛色は黒色にして、一見水牛の様であるが併し其實羚羊族に屬し、性質が極めて柔和で戦闘力無く、恰も縞馬の如く極めて伶俐で且つ敏感である。自衛上自然の必要から團體意識が非常に發達して居り、其運動は常に廣闊無遮の平野に於て行ひ、決して危険の場所に近寄らないのみならず、其前後左右には斥候を放ち、草を食ふ時は必ず相當の距離を離れて、若干の見張を備へ、其見張は決して草を食はず、始終四圍を凝視して敵の來襲を警戒して居

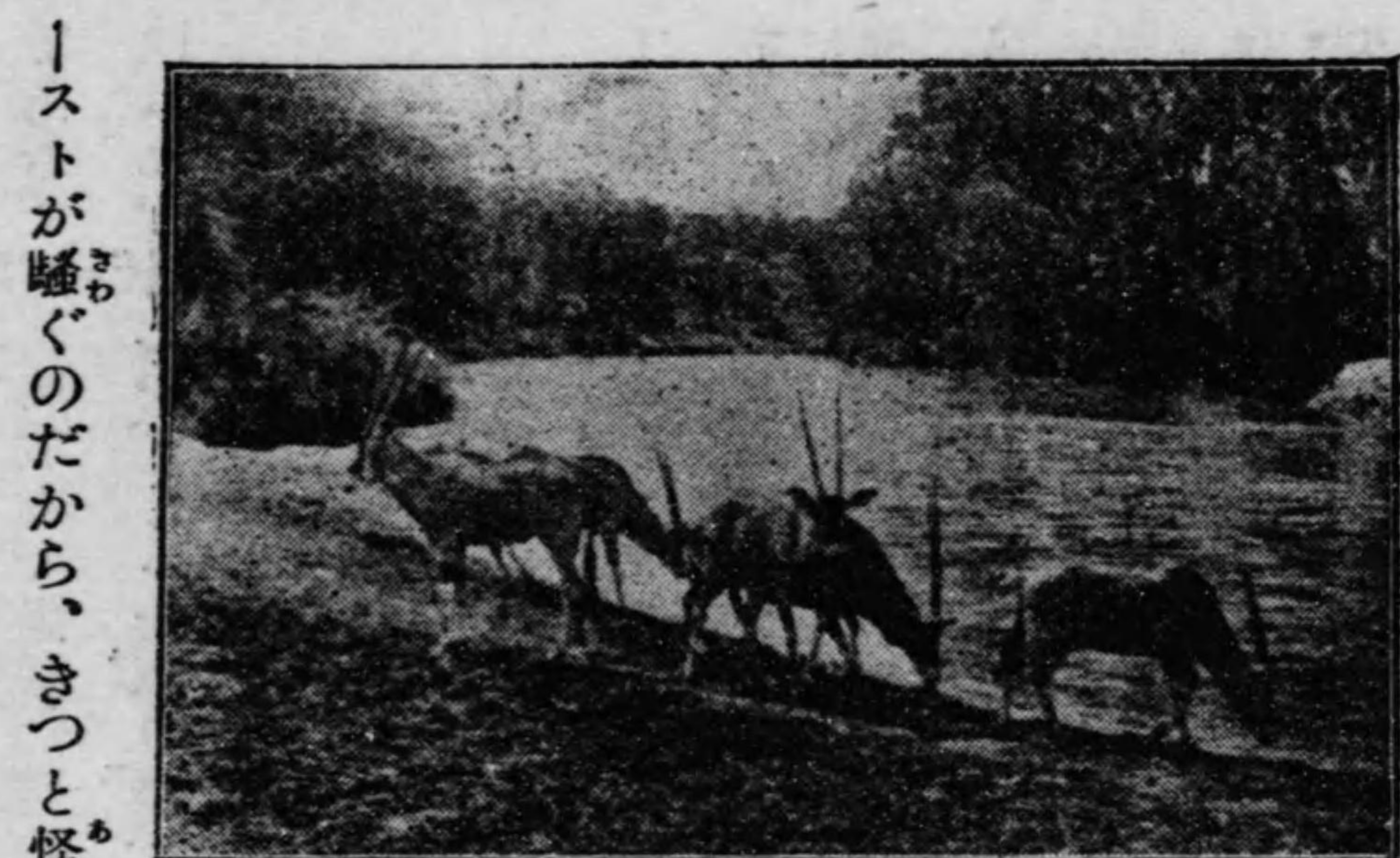


群の麟麒

河岸に遊ぶアンテロープ

るそうである。

鋭敏な頭脳を持つハートビースト



ハートビースト又はハルトベエストも亦羚羊族中の巨獸であつて、ワイルドビーストよりも稍小さく、顔は牛に似て夫れよりも長く、色は濃褐なるも體の恰好は殆ど鹿の様である。此動物は多くの野獸中に於て最も伶俐で、且つ鋭敏な感覺を持つて居り、縞馬、ワイルドビースト、麒麟等と行動を共にし、常に八方に駈け廻はり、蟻の塔又は其他の小高き地物を發見する時は、直に其上に登つて周圍を展望し、何か異變を見出す時は忽ち仲間のものに警報を發するのであつて、他の動物は何のことか分らぬが、ハートビーストが騒ぐのだから、きつと怪やしいのに違いないと思ひ、其行く方へ一目散に逃出すそう

である。東阿弗利加で遊獵の連中が、いざ是れからと云ふ大事の瞬間に、ハートビーストに妨げられ、惜しいゲームを取り逃がすことが尠くないとのことである。

天使の様なグラントカゼルとトミー

トムソン、ガゼル（小鹿の一種）は東阿弗利加の野獸中最も可憐な小鹿であつて、毛は極めて鮮明な茶色を帯び、尻の部分が眞白で、非常に美しいのみならず、其舉動が極めて輕快なもので多くの人が之を愛してトミーと呼んで居る。此動物は自族の者の間に三々伍々友を作り原野又は雜木林に於て、悠々自適の生活をなしつゝ、あるも、他の種類の動物とは決して交らないそ

うである。グラントカゼルは小鹿の一種であつて、其性質は阿弗利加の動物中最も温順だと云はれて居る。體の大きさは普通の鹿位であるが、頭に長い耳と、光澤のある恰好の善い黒色の角を頂き背の後に白の斑色があり、足はデリケートなるも極めて輕快に飛び廻はり、恰も天使の様な趣がある。但し此動物は他の種類の鹿に比し、不思議に人間を恐れず常に近づきやすく撮影者の

好表的と成つて居る様である。

人間の様なゴリラと可憐バブーン

ゴリラは最も善く人間に似た阿弗利加特有の猿の一種であつて、多く北緯二度から南緯五度の間に多く住んで居る。此の猿の體格の偉大なことは驚くべきものであつて、體量四百封に及び肩幅及胸が非常に廣く、脚は短きも全身の高さは、二メートルに達すと云はれて居る。尤も是は牡獸であるが、牝獸は夫れよりも遙に小さく、隨て容貌も牡猿程の凄みはない。

此猿に付き面白い目撃談として傳へられる話に依ると、「或時一頭の老いた牝猿が、數頭の牝猿と幼猿とを連れて、森林を散歩して居るのを見たことがあつた。

其時老猿が先頭に立ち、其次に牝と小供が、最後に牡猿が續いて歩いて歩いて居た。躡て老猿が樹の

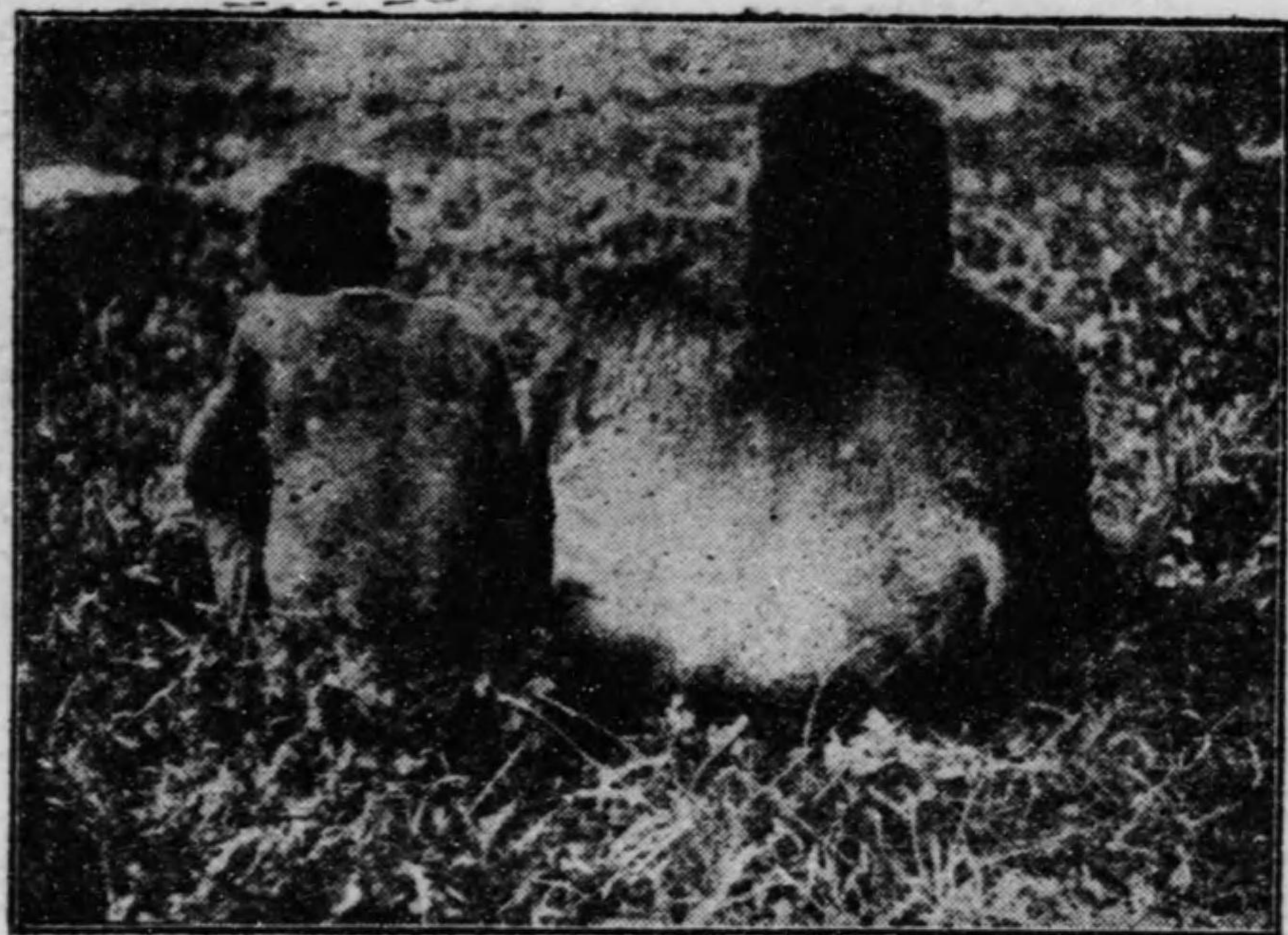


マウンテンゴリラ

下に休んで居ると、牝猿が果實を拾つて来てはあたへる。それを如何にもうまそうに食つて居ると、二匹の牝猿が彼に寄りか、つたり、腕を肩に載せたりして頻りに巫山戯廻はつて居ると彼も亦キヤツキヤツと云つて巫山戯廻る。其の内老猿は地上に横はり、さも愉快らしく全身を伸ばし、晝寝を始めた。所が牝猿も小供も共に其側に横はつて眠りに就いた。夫れから暫くすると一同が起き上り、再び歩んで居る内に日が暮れたので、老猿は安全な眠り場所を探がし、牝と子供を樹上に上げ、自分は其樹の幹に背を寄せ地上に眠つて居る。何か怪しいものを見付けた時には、手を口に押し當て鼓を打つ様な低音を發して牝と小供を逃がした後、愈々敵と見た時に身を挺して奮撃する有様は眞に天地も震動するばかりであつた。云々と話されたが、以てゴリラの生活振の一端を知るに足ると思ふ。

其の内バブーンと云ふ種類に属するのは大猿の一種であつて、是が東アフリカの高原に澤等山居る。彼はウガンダ鐵道の沿線にも多數居るが、彼等は列車の通過するのを見ると之と競争したり、石を投げたりして大に愛嬌を振りまき最も多く旅行者の注意を惹くもの一つと成つて居る。

土人と獅子の白兵戦



である。彼等の爲に好餌食と成るのは多く縞馬であるが、時には民家を襲ひ、家畜を取ること

マ ウ シ テ ゴ リ ラ

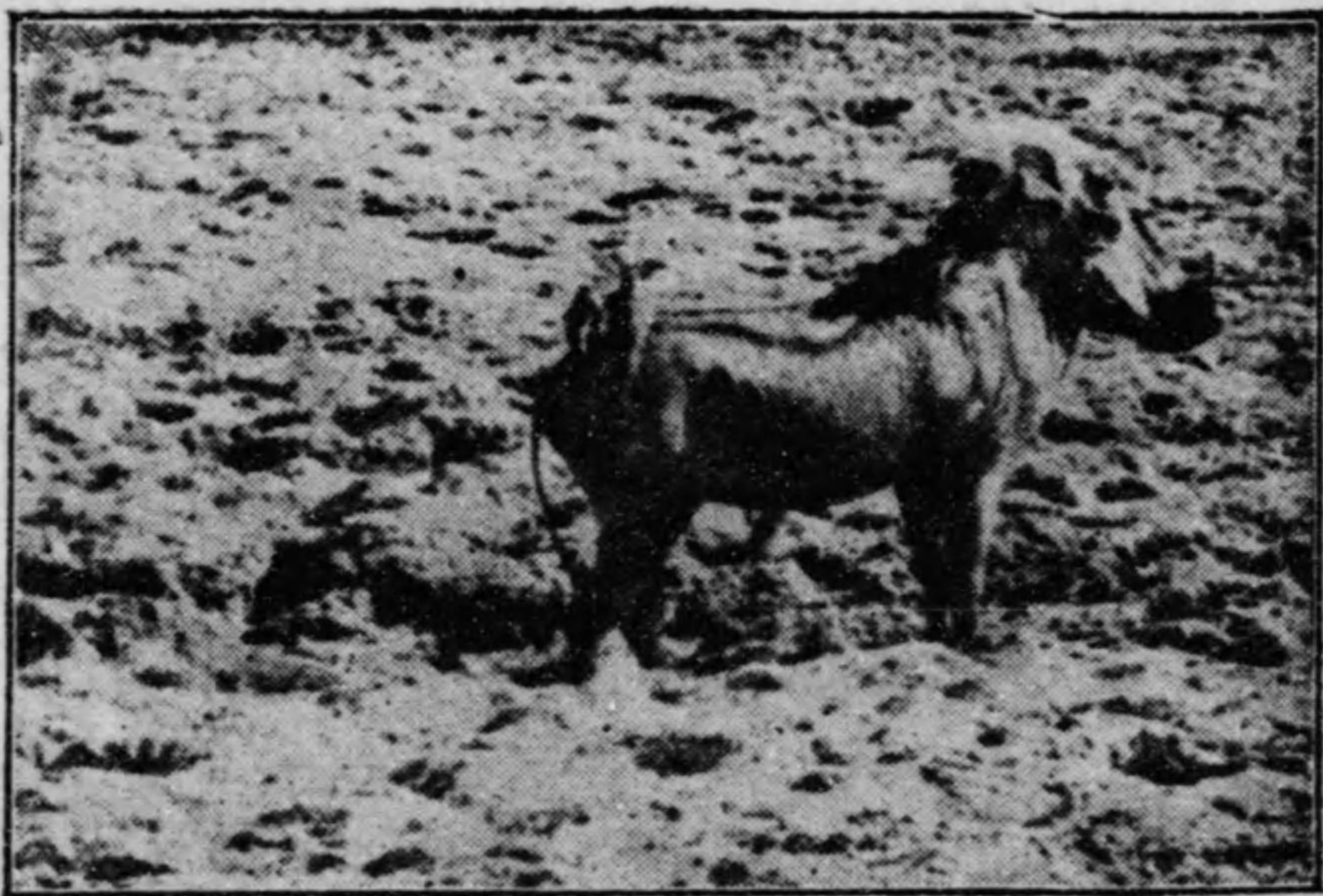
獅子は百獸の王であるが、人間に對しては常に彼の方から逃げて居り、不意に出遇した時か、何にかに驚いた時か、又は負傷して怒つた場合か、若くは牝獅子が子供を連れた時の外は、人間を襲撃する様なことは無いそうである。併し一度何かの機會に人肉の味を覺えるか、又は老いて他の野獸を襲撃する丈けの、敏捷さを失つた場合には、非常に危険だと云はれて居る、尤も普通獅子が出るのは夜間であつて、晝間は叢又は巢の中に潜んで居り、日が落ちると除々に餌食を求めに出るの

も尠くない。其處で勇猛なマサイ種族の土人は彼等の最も貴重とする家畜の爲に屢々獅子狩を企て、之を突き止めた勇者は其頭を冠物とし、手皮を着物として仲間を誇る風俗がある。されば近所に獅子が居ると云ふことが知れると彼等の戦士は、手に手に鎗を携へて之を遠巻に取圍み、其逃げ道を塞いで、次第に詰め寄せるのである。其處で初の間じつと身を潜め、隙を狙つて居た獅子も、最早危険が身に迫つたと思ふと、忽ち奮迅の勢で戦士を目かけて飛び懸る、戦士は待つて居たと計りにすばやく鎗を突き立てる、茲に獅子と戦士の白兵戦が行はれるのであつて、其勝負は實に電光石火の間に定まるのである。勿論時には戦士が死物狂の獅子の爪牙に懸り、傷を負ひ或は命を落すことも無いではないが、百獸の王も遂に鋭いマサイの鎗先きに抗し得ず、突き斃されるさうである。

小鳥の番人を付けて置く視力乏しい犀

犀は其體量約二噸に達し、象に次ぐ巨獸なるが、頭に大小二つの角が並んで居り、偉大な四足と共に恐るべき攻撃力を持つて居る。又彼の嗅覺は非常に鋭敏なるも、視覺は極めて薄弱で

あつて、數間離れると物の形も辨じ兼ねる位である。處が面白いことには犀にチツクス、ベツカーと云ふ小鳥が附いて居て、其巨大な背中に止つて居り、夫れが鋭敏な視力で四方に見張をなし、何か怪しい物を見ると直に犀の背中を突いて騒ぎ立て、警報を與へるのであつて、巨獸と小鳥とが善い鹽梅に共同生活を營んで居る。處が犀の攻撃は單に其鋭敏な嗅覺を利用して漠然と進撃するの



グイクトリヤ湖畔の犀

だが、其襲撃に對しては、吾より機敏に身を翻し、風下に逃げて仕舞へば獅子の様な危険はないのである。只彼の恐るべきことは、彼が叢の中から人間を嗅ぎ付け、突然襲撃して來ることであつて油斷の爲不慮の危害を受けることが、少くないとのことである。併し注意すべきことは犀に限らず、象でも水牛でも

總て嗅覺の發達して居る猛獸に對する場合には、風向を知り努めて風下に廻るのが最も安全で

ある。殊に象、犀の如き視覚の不充分なものに對しては最もそうである。

年々減少してゆく象の群

象は地上に於ける最大の動物であつて、アフリカには嘗て非常に澤山居たのであるが、今日では亂獲の爲め段々減少し、生息の地域も大に狭められて居る。併しアフリカには人跡稀な地方が今尚廣く、是等の地方に於ては、多數の象が群を爲して棲んで居り、世界の寶庫と考へられて居る。蓋し象の貴いのは其牙の高價な爲であつて、目下英領東アフリカのみで、象牙の一年の輸出高が約二百萬圓位に達して居る。但し政府は象を保護動物として取扱つて居り、之が射殺に對しては、本項末段に示す通り、嚴重な取締法を設けて居る。尤も象は非常な襲撃性を持つて居り、象狩をするのは獅子狩よりも更に危険と見做されて居る。蓋し象は視力は薄弱なるも嗅覺は非常に鋭敏であつて、人間が附近に居ることを發見するや否や疾風の如くに飛び來り、強大な鼻を振り廻はし、恰も四斗樽の如き足を踏み鳴らしつゝ、猛然突撃するのであつて其烈しさは眞に天地も崩れるばかりである。殊に負傷した象に至つては其危険が最も甚だしい

とのことである。象の居る處は多く數呎に餘る野草が密生して居り、到底人間の通行しあたはざる所なるも、一度象が通過した後は是等の草が殆ど薙ぎ倒され、トネルの様な道が通じるのであつて、之を「象の途」と云つて居る。象狩は普通此途を尋ね夫を辿つて進んで行くのであるから、何時叢から象が飛び出すかも知れないのであつて、非常に危険なものと見做されて居る。

最後に最も危険な猛獸としては、水牛を挙げねばならぬ、彼はケニヤの高原地には見受けられないが、奥地の沼澤地方には大群を成して棲んで居る。蓋し水牛は象、犀の鋭敏な嗅覺と他の如何なる、動物にも劣らざる視力とを有し、其襲撃力の敏捷にして且猛烈なる



群の象ぶ遊に叢

事は獅子に劣らざるのみならず、其獠猛さに至りては象、犀に優ると云はれて居る。殊に其性質は他の猛獸の多くが極めて、一本調子なのに拘はらず、非常に執拗であつて、狩獵者の爲めに傷けられた時は、一旦逃げ失せても、何日の間にか舞ひ戻つて来て、不意に突撃するそうである。是れ狩獵に際し注意を要する所以であつて、猛獸狩中最も危険だと云はれて居る。



猛犬の襲撃「ナイハ」に悲鳴を上げる

ナイロビは猛獸狩の策源地であつて、茲に幾多の狩獵會社が其の本部を置き、一般顧客の需要に應じ、内地旅行の世話を爲すと共に、其依頼により遊獵の周旋を爲すことを商賣にして居る。其内で最も組織の整頓して居る

猛獸狩奇談

ナイロビは猛獸狩の策源地であつて、茲に幾多の狩獵會社が其の本部を置き、一般顧客の需要に應じ、内地旅行の世話を爲すと共に、其依頼により遊獵の周旋を爲すことを商賣にして居る。其内で最も組織の整頓して居る

のは、サファリランド又はシヨウ・エンド・ハウンターであつて、此地方に猛獸狩を試み様と云ふ人は、豫め是等の會社に依頼して置けば、船がモムバサに着くと、會社から世話人が来て居て、上陸通關旅行等一切の世話を爲し、又内地に入る場合には熟練な銃手、彈藥は勿論食料、寢具、天幕、料理人、人足、其他一切の用意を整へ、顧客の希望に應じて、適當な旅行隊を組織するのであるが、野獸は其種類に依り、棲息地が違ふのみならず、季節に依り移動するものであるから、是等の遊獵會社では常に其の状況を研究し顧客の希望に應ずることを努めて居る。多くの狩獵者が目的とする獅子、豹、象杯の最も多く居る所は、大抵僻遠の奥地であ



珍いしらアニシバの白猿

るものであるから、是等の遊獵會社では常に其の状況を研究し顧客の希望に應ずることを努めて居る。多くの狩獵者が目的とする獅子、豹、象杯の最も多く居る所は、大抵僻遠の奥地であ

つて道路などは無論なく、只渺茫たる山路であつて其處を、短きは半ヶ月、長きは數ヶ月以上に互り食料其他大變な荷物を持つて、行かねばならぬのみならず、獲物があれば直に皮を剥ぎ首や角の始末をなし、又防腐の手當をせねばならぬのだから、自然多數の人手と、大掛りな組織とを要する譯である。但し野獸狩りには政府の免許が必要である。其料金は外來者に對しては、許可の日から一ヶ年間百磅、内地の定住者に對しては、十二月末日に終る一ヶ年間十磅、許可の日から二週間三磅なるが、象、犀、麒麟、駝鳥を捕獲する場合には、政府の許可を要し其料金は前記免許料の外に、象は一頭に付十五磅、二頭に付四十五磅、犀は一頭に付五磅、二頭に付十五磅、麒麟は牡一頭に付十五磅、駝鳥は牡一羽に付五磅を要することに成つて居る。嘗てルースヴェルトが米國大統領退職後、此地方の猛獸狩りで、勇名を轟かしたことは、世人の夙に熟知する所である。我富豪家諸君は新橋の四疊半と、東阿弗利加の荒原と其何れを遊獵の適地と認めらるゝや、呵々。

苦心を要する活動寫眞の撮影



暗夜に餌食をあさる獅子

野獸狩と共に興味の深いスポーツは彼等の自然の生活振りを撮影することであつて、其用意と工夫と勇氣とを要することは銃獵以上と稱せられ、其興味も亦一段深い様である。例へば縞馬、麒麟杯は極めて柔和な動物であるから、何等危険なきも、彼等は感覺が鋭敏で且つ、非常に注意深いから、之に接近して其姿をレンズに納めることは、頗る困難である。併し象、犀杯の猛獸に至りては極めて、細心な注意及び用意を要するのみならず、非常な勇氣が無ければ、之に近寄ることさへも不可能である。先づ第一に彼等の來往する場所を見定めた上、其處に機械を据へ付け、彼等に見破られない程度の設備をと、のえ身を潜めて待つて居なければならぬのである。而かも猛獸に對しては襲撃に備へる爲、熟練な銃手の援護が必要である。斯くして危険

を冒し苦心を重ねた末、漸く目的の動物が近寄り、いざレンズに納め様と云ふ時に、其敏感な鼻の爲に嗅ぎ付けられ、忽ちに逃げられて仕舞つたり、又は襲撃せられたりして千仞の功を、一實に缺くが如きことは決して少くないのである。若し夫が銃獵ならばはつと思ふ利那撃ち止めることが出来るのであるが、寫眞には其自由が利かないのみならず、相手の動物に一寸でも逃げられるとそれで機会を逸するのであつて、寫眞の成否は眞に間髪を容れざる瞬間にあるのであつて、殊に獅子、豹に至つては、普通閃光を利用して、夜間に撮影するのだから、晝間の夫に比し更に困難である。尤も是等の動物を晝間撮影することも無いではないが、彼等の徘徊するのは大抵夜間であるから、晝の間に其出没地を見定め、適當な場所に機械を据へ付け、其儘日の暮れるのを待つのであつて、其苦心と忍耐とは實に容易でない。

命がけの撮影技師

撮影機械を据へるのは、先づ適當な距離を計つて樹の枝とか又は幹とかに夫を結び付け、其附近に餌食を繋ぎ隠れ場所を作り、其處に閃光器に通ずる電線を引込み、技手自らは、其隠れ

場所に居て、スウキツチを握り、獅子又は豹の來るのを待つのである。斯くして太陽が地平線下に落ちると、赤道地方の常として原野は忽ち眞の暗黒になる。躑がさがさと草を踏み分ける足音がして、一頭二頭と其處に若干の巨獸が遣つて來るのである。隠れ場所から、そつと眺めると、果然猛獸が幾頭かほんやりと認められる、夫が適當の場所に進んで來たと思ふ瞬間、閃光一射暗黒を破つて茲に夜間の撮影をするのである。然も一瞬の後猛獸は逃る、邊りは再び暗黒となり、遙に物凄い咆吼の響を聞きつ、天地は又々元の寂漠に歸るのである。

土人の話

人種天覽會

阿弗利加の土人は云ふ迄もなく、皆な黒ん坊であつて、孰も頭の髪が縮んで居る。彼等を見した所では同一人種の様ではあるが、些細に點檢すると夫が、非常に多くの種族に分かれて居り、最も顯著な特徴のみに依り、區別するとしても、其數が五十を下らないと言はれて居る。現に吾等が旅行中見た丈けでも、彼等の内には、墨の様に黒い者もあれば、剃けた様な淺黒い者もあり、髪の大縮れもあれば、小縮みもある。或は手足の長い、短い、頭や顔の丸い長い、又は肉付の良い、悪いの杯、色々な種類に分れて居り、夫が互に違つた風俗や、習慣を維持し、又異つた言語を使つて居るのである。尤も是等の土人が如何にして阿弗利加に入り込み、又は繁殖したか、明でないが、多くの人種學者は阿弗利加の原人は、或小人種であつたと云ひ、今日南阿の奥地に發見せらる。ブツシユマン又はウガンダ、コンゴ等の森林中

に居住するビッグミー杯は、其遺種族であると云つて居る。

二萬年前の先住人はニーグロー（黒坊）

阿弗利加に於て、最も廣く知られて居る先住人は、ニーグローであつて、専門家の説に依れば、彼等は少くとも、今より大凡二萬年前既に阿弗利加の各地に繁殖して居たのであつて、是が狭い意味に於て、今日の阿弗利加土人の祖先であると見做されて居る。其後ハミチツクとか又はセミチツク杯に屬する異種族が、或は東歐地方から、或はアラビヤ又はベルシヤ等の、西亞細亞方面から、此大陸の北部又は東北部に入り込み、一旦埃及アビシニア又はソマリーに根據を作り、夫より更に南に向て發展し、又は其の後に侵入した強者の爲に壓迫されて南に退き、同じ事が幾度か繰り返へ



妻其と老長のイサマ

されつゝある間に、先住人と、侵入者との混血が行はれ、遂に複雑な今日の種族を見る様に成つたのである。要するに彼等は常に北から南へ南へと、移住したのであつて、其通路は大體に於て二筋であつた。即ち其第一路はナイル河の平原であつて、或は埃及より或はアビシニア又はガラ地方より、ナイル河邊に出で夫より中央部の湖水地方に侵入したものと認められ、又其第二路はグレート・リフトヴァレ



振者武の人「アビシニア」

したものと想像せられて居る。尙此外に東部の海岸地方に於ては、前に説明した通り、太古の

時代から、幾多の航海國との間に可なり、頻繁な交通があつたが、此方面から内地への移住は無かつた様であるが、但し海岸地方には亞刺比亞人が久しく勢力を振つて居た關係上、土人とアラビア人との間に幾多の雜婚が行はれ、今日スワヒリ人種として知らるゝ一大種族が生れたのである。

代表的種族の色々

阿弗利加に於ける土人が、多數の種族に分かれて居ることは、前に説明した通りであるが、其内代表的種族とも云ふべきものはバンツ、マサイ、並に其他のキクユ、バンツとアラビヤ人の雜種スワヒリ等種々雜多の混血種族であるが、彼等の中には夫々面白い風習、特長がある。今其重なる者を極く手短かに説明する事とする。

バンツ種族

バンツはヅガンダの中央部に在る、アルバート湖の北端から、稍東南に向け、ケニヤの中

央部を通じて、直線に南方に擴がる土人の大種族であつて、人種の系統から云へば、ハミチツクに屬するものと見做されて居る。尤も此地方には異種族に屬する、マサイ及其マサイ等の血を受けた、若干の種類のものも居ないではないが、人數の上から云へば、ウガンダの土人も、ケニヤの土人も、將又タンガニイカの土人も皆大體に於てバンツ種族に屬するのみならず、西方のコンゴ並に、南方一帯に蟠踞する土人の多くは、亦此の種族に屬して居る。更に彼等は多數の人種に分れ、其或者は本種族の他の者に比し、著しく其容貌、習慣等を異にして居る。然し彼等の間に、共通して居ることは、彼等が孰も大同小異のバンツ語を、使用して居ることであつて、是等の言語を除いては人種的共通點を見出し難い場合も尠くない。従て此點から云ふと、バンツ種族と云ふのは、人種的種族と云ふよりも、寧ろ一種の語族と見做すのが適當であらう。

阿弗利加日本人

ケニヤの奥地にウガンダと云ふ英國の保護國がある。其面積は約九萬四千平方哩であつて、

日本の約三割七分程に當る小國なるが、其處の土人は大體に於て、バンツ種族に屬し非常に恰愴にして且つ進歩的である。阿弗利加大陸の土人中最も優秀な種族であるが、英國人は此土人の事を阿弗利加日本人と云ひ、



ウガンダの事を書いた、或書物杯はジャバニース、イン、アフリカと名づけて居る。詰り日本人の如く恰愴であるから進歩的阿弗利加人と云ふ意味であらう、現に彼等は店員、吏員又は技手杯の如き智的方面に於て可成克く發展して居り、著者が視察した處に依れば政府の印刷所とか又は各種の製作所杯では、監督が英國人であつた外は、書記も技術者も、總てウガンダの土人を使用して居り、又諸官廳でも、商

社でも、受付、帳簿係り、又はタイピスト杯の下級職員は、悉く是等の土人であつて、其成績は甚だ可良であると云はれて居た。斯ふ云ふ様な事は、他の土人の間に於て決して見られない所であつて、之を阿弗利加の日本人と云ふのは強ち不當ではない。茲に一言附け加へて置かねばならぬ事は、此種族の土人は概して禮儀正しく、非常に丁寧なことである。彼等同志が挨拶して居る所を見ると、恰も日本人の夫の如く低く腰を曲けて挨拶をして居る。此土人の事に付最も面白いのは探險家のスタンリーが、一八七四年に英國で發表した阿弗利加探險記の一節である。夫には大要次の様に述べて居る。

エデンの神園ウガンダ

阿弗利加に於て代表的土人と其風俗とを知らんと思へば、宜しく赤道直下のウガンダに就て、之を見るべきである。至る所に廣闊な沃野があつて、満目の緑は恰も水が滴る如く、其心氣の爽快な事、植物の發育の速かな事、バナ、の克く繁茂する事、其幹も葉も其實も共に偉大な事は、實に此地方に於ける獨特の點である。然もバナ、は土人の食物として豊富な

るが故に一般の氣風も亦自ら悠長であつて、彼等が此處、彼處の樹陰に大平な顔して、涼氣を求めて居る様は如何にも呑氣なものである。云ふ迄もなく自然が微笑する所に、人も亦微笑して居るのであらう。之をエデンの神園とも云ふべきか、されば此邊の土人は目元涼しく、何となく穎敏の相を顯はし、體格は肉肥え、骨太く色は艶々と、滑かに唐金の如く、如何にも壯健な様である。之を他の部落の倭陋で汚穢なのに比すれば、同じ阿弗利加人とは思はれず、殊に其智識と能力との優秀な事、禮儀の敦厚な事杯は其特色とする所であつて、此處は裸體で徘徊するものなく、孰も皆鼠色の裾濁き服を着て居る杯は、其最も變つて居る所である。而して家々の周圍には畑を作り豆、甘藷、甘蔗、珈琲、烟草の類を植え、畑の傍には無花果、芭蕉などが繁茂し、然も其手入の善く行き届いて居ることは、文明國の農家と比較して何等の遜色ない程である。

王の寵愛を受けぬ黑白雜種女

更に婦女子の容姿に付ては他の黒人女より、幾分か上等なるも、歐洲人の目に留る程の者

は見當らないが、國王ムテサの王宮には、官女が凡そ五百人も居て、予は幸に夫等の官女に親しく接するの榮を得たるも、眼にとまる程の者は僅か二十名にたらず、其内秀麗と認め



られたものは、只三名にして、孰も黑白雜種で、鼻高く、唇薄く、眼は鈴張りの如くなるも、恨らくは、頭髮縮みて短かく、黒人種固有の特徴を失はないのを缺點とするが、併し我等の尤も不思議とする處は之等三名の佳人は他の鼻低く、

唇厚く、肉の肥へた黒人女の如く、王の寵愛を受けないとのことであるが、處變れば品變はる、我に美人も彼には醜女と見ゆ。之れを以てウガンダ土人並に其の婦女子に就き大要を

窺ふに足るであらう。

美男美女の多いスワヒリ種族

本種族は東阿沿岸地方、並にザンジバルに於ける、バンツール種族と亞刺比亞人との雜種であつて、之をスワヒリと云ふのはアラビア語で、沿岸人と云ふ意味なのである。蓋し亞刺比亞人は太古の時代より、東阿弗利加の海岸地方に植民し、又は之と通商を營んで居た關係上、久しく此地方のバンツール種族と雜婚して居たのであつて、其雜種人を沿岸人と云ふのは彼等の居住地が、沿岸地方であるからである。而して此土人は色黒きも、流石に人品の良い亞刺比亞人の血を受けて居るだけあつて、他の土人に比し遙に美男美女が多い。又其言葉は云ふ迄もなく亞刺比亞語と、バンツール語との雜語であつて、嘗て亞刺比亞人が内地の土人に對して、勢力を持つて居た爲に、南はナタルから、北はアデン迄、又東はモムバサ、ダレサラーム、ザンジバルを中心とした沿岸一帯の地方より、西はコンゴの奥地迄、殆んど各地の土人により理解されて居る。従て此言葉を知つて居る時は、内地の旅行には大抵不自由を感じない。殊に此言



作家の女「イサマ」

然亦も築建屋家 觀傍は子男事仕の女婦は働勞
る塗てに土泥を上其てしに葛 び及枝の木は料材
すぎ過に

葉の特色とする所は、語格が簡單で且つ發音が鮮明な事であつて、アラビア語とバンツール語の

發音の困難な所が全然除かれて居り、外國人には非常に語り易く、又聞き取り易い利益がある。

此の種族の特色とする所は、彼等が古い昔の時代から亞刺比亞人に接觸して居た爲、智識が割合に進歩して居る事であつて、彼等はアラビア人に依つて生活を營み、其の家庭並に店舗の使用人として雜用に從事し、内地旅行又は荷物運搬の際には、常に其人足として、使用せられた爲、鐵道開通又は自動

動車使用前迄は、東阿に於ける主なる運搬機關であつたのみならず、今日にても鐵道又は自動

車に依らざる運搬は、尙此人種に依つて行はれて居り。歐洲人其他の外國人の家庭又は商社、官廳の小使、人足等は殆ど彼等に依り、獨占せられて居るのである。

勇猛なマサイ種族

マサイはハミチツクと、ニーグローとの雜種であつて、普通之をニロチツク人種と云ふて居る。蓋し彼等は嘗て或北方の地點より南に侵入し、ナイル河の盆地に於て繁殖し、夫より東南に進んで、ケニヤの高原に出で、ウアシン・ギシユーとして知られる肥沃地を根據地とし、東はタナ河附近、南はタンガニカのカリマンジャロ地方に進出したものであるが、今日ではウガンダ鐵道本線と、マガヂー支線とによつて、包まれたタンガニカとケニヤの兩國に跨るマサイ留保地に收容せられて居る。

此土人の特色とする所は、彼等が非常に勇猛な事である。一體阿弗利加の土人は戰鬪氣分に乏しいのが特色であるが、彼等は嘗てアラビヤ人から、野獸の如くに狩り立てられ、奴隸として諸方に賣り飛ばされたのであるが、獨りマサイは非常に慍悍であつて、他の土人から恰も鬼

神の如く畏れられ、流石に勇猛なアラビヤ人の、奴隸狩も之には閉口したと見へ、マサイの地方を境とし、夫より奥へは寄り付くことも出来得なかつたのである。吾等は克く楯や、槍を持つた勇猛な阿弗利加土人の繪を見ることがある。夫は大抵マサイの勇士を描いたものであつて、如何にも其面貌に戰鬪的氣分が漲つて居る。

岩見重太郎式武勇傳

此種族には暴れ獅子を、手槍で突き止めたとか、又は豹を組み伏せたとか云ふ様な、岩見重太郎式な武勇



談が澤山にある。最近某英國人の目撃談として傳へられて居る話に斯んなのがある。或時羊の一群が、麗かな朝の日光を浴びつゝ、牧場に草を食つて居た。其處へ何處からか突

然、一匹の牝獅子が現はれて、瞬く間に其五六頭を噛み据へた。すると其の傍に立つて居たマサイの青年、年の頃は凡十六七歳なのが、忽ち身を躍らし、槍を振つて獅子の頸を突き刺したので、獅子は奮迅の勢で青年に飛び懸り、左の肩先から右の脇腹に手を觸れた途端、其時早く青年は一聲高く修羅王の如き勢で、槍先鋭く其獅子を突き止めた。其瞬間の光景は唯々電光石火と云ふ外なく、見る者皆膽を奪はれ、満場只寂として、微動だもする事が出来なうだ。然し青年は神色自若として、靜かに獅子の死を見定めた上、傍の白人に膏藥を求め、自ら其傷口に手當てしたとの事であるが、其勇氣と豪膽さとは眞に人間術とは思はれなかつた云々。



キタユの娘

三人の盜賊を相手に手槍を振ふ少年

或時マサイに一人の青年があつた。彼は幼少の時父を失ひ、祖父の手一つで育てられて居た。總て十六歳の頃、祖父が老衰したので生活上の責任は、總て青年の双肩に掛るの止むなきに立ち至つた。然るに隣村に三人の兄弟があつて、常に老人と青年とを侮蔑し、其貯へ置く蜂蜜を盗む事屢々であつた。或る時老人と青年とが、連れ違つて隣村に行つた留守を幸ひ、例の三人兄弟が又も蜂蜜を盗んで居る處を見付けた。すると三人は悪事を見られたのに心付き、老ボレと小供を疊んで仕舞へと、いきなり老人を目がけて打つて掛つた。此時青年は何を小癩など、電光の如く手槍を振り先頭者の心臓を狙つて一撃に突き斃し、後から飛んで來た第二の者の頸を突き刺したので、第三の者が又飛び掛つて來るや否や、青年は體を横に替はし、其肩先を突き立てたので、流石の悪黨も僻易して逃げ去つたが、青年の勇氣と沉着さとは、只々驚くの外はない云々。

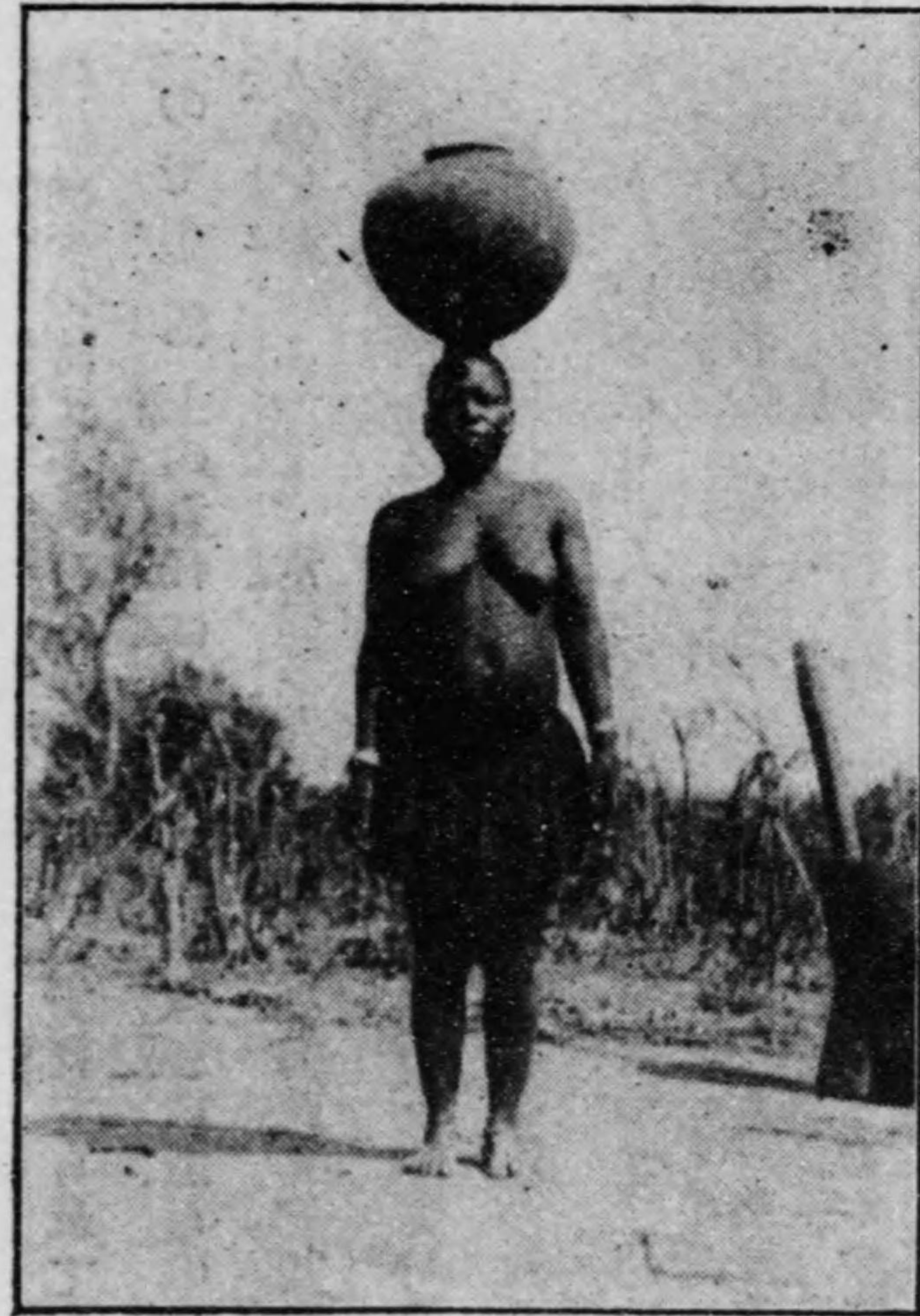
此類の武勇談は殆ど無盡蔵である。然し彼等の文化程度は極めて低く、職業上から云ふなれ

ば彼等は全然遊牧人であつて、農業を好まざるのみならず、彼等はスワヒリ種族の者が人足業を立看板とする如く、好んで牧畜に従事するも、農業には何等の趣味もなく、其代りに心から家畜を愛し、其所有する家畜数の多いのを一種の誇として居る。昔から屢々他の種族を襲撃したのも、其目的は家畜を捕獲する爲であつたのである。

農業に興味を持つ

キクユ種族

キクユはマサイとバンツトとの雑種であつて、ケニヤの高原の奥地に於て、ウアシン、ギシユーと相並び、最も肥沃地と云はれるキクユ地方に擴がつて居る。此の種族は其勇猛な事に於て、マサイに似た所はあるが、農



土人女の水運び

業を好む點に於て、マサイと違ひ、又人足業をしないことに於てスワヒリとも違つて居る。從て歐洲人の移住者が農業を営むに當り、マサイ、スワヒリ等の土人は農園の労働者として、殆ど役に立たざるも、キクユは好んで其雇入に應じ、ケニヤの開発に最も有用な人種と認められて居る。

進化の遅れて居る

カピロンド種族

カピロンドはヴィクトリア湖の東側に沿ふた、カピロンド地方に住む種族であつて、北部の者はバンツトに、南部の者は、ニロチツク種族に似て居り、共に開化の最も遅れた蕃人と認められて居る。彼等は歐洲人に接觸す



る迄は、男女共に前を掩はず、眞の赤裸生活をして居たのであつたが、近年は漸次歐洲宗教家の、感化を受け、其或者は衣服を着し、然らざる者も前を掩ふ様に成つた。但し一般人民は至つて純朴なるが、何れも盜賊ある事は此の人の種の缺點である。尤も是は一般土人の通弊であつて、彼等の間に於ては、他人の物を竊取するが如きことは差して惡事とは考へて居ないと云ふことである。

裸體から着物へ

現在の土人の開化の程度は一言にして言へば、裸體から着物へと進みつつある。即ち彼等は從來眞つ裸、又は樹皮若くは手皮杯を身に掛けて居た位の處から、段々と着物を着る様に成りつつあるのである。例へば沿岸の諸港、都會地、大きな汽車驛のある處などでは、外來の影響を受けることが多い爲、土人の生活狀態も又次第に改善し、餘り裸體姿を見ない様に成つて居る。併し奥深く内地に行くと、まだ樹皮や草の葉杯から作つた小さな、切を前に垂らした計りの裸體の土人が澤山居るのであつて、阿弗利加の前途も未だ遠遠の感がある。現に吾等一

行がタンガニイカの奥地キゴマに往つた時、其處はダレサラーム港から約八百哩の内地であつて、中央鐵道の終點驛から近く可成重要な處であるが、地方より出て來る男女共を見ると、何れも肩から全身に毛皮を掛けて居るが、大切な前のものは全然おかまひなく平然たるものである。多分夫は手足の如く身體の一部分であるが故に、何も恥する必要なしと云ふのが彼等の哲理であらうが、併し哲學的理由が何れに在るとしても、彼等が所謂世界の文明から飛び離れて居る事だけは事實である。

然らば右に云ふ土人の着物の材料は何んであるかと云ふと、夫は總て木綿である。尤も其約半分は生木綿其他は晒、更紗、染色



ランゴ族土人の女

等の品であつて、生木綿の過半は日本より供給し、加工品に就ても日本からの輸入は少くない。此外都會に居住し、又は都會に出入する土人は、段々瀬戸物、硝子器、エナメル器杯の様な、輸入品の味を覺へ年々賣行が増して居り、日本からも大分輸入されて居る。然し詳しい事は別に述べるとし、茲には東阿弗利加に對し、日本よりは等の輸入高が、一ヶ年に大凡千五百萬圓位であつて、其約半分は英領諸國へ、其他はアビシニアに輸入されて居たと云ふ事を記録するに止めて置く。

哭

出生から死亡まで

土人は云ふ迄もなく無教育であつて、無論文化杯と云ふものは樂にしたくもないのである。然し彼等も亦時代を経た古い人種であるが爲め、昔から長い間に色々な風俗、並に習慣が發達して居り、其の内には極めて奇怪な事もあるが、又頗る教訓的な事もある。今彼等の四大事件とも云ふべき出生、割禮、結婚、死亡等に付其最も奇抜なところを手短に紹介する。

出生は四大事件の一

土人は出生を人生の四大事件の一つとして、極めて丁重に取扱つて居る。即ち新婦が始て妊娠すると、吉日を卜し牛を屠り親戚、知人を招待して、盛な祝宴を催す事である。其時には結婚媒介人其他結婚の儀式に關係した重立つた人々は、悉く招かれるのであつて、一同が集まると、男の客と女の客とが二組に分かれ、男の組は近所の森林又は原野の中に良人を伴ひ、女

の組は妊婦と共に内に止り、孰も妊娠中の心得を注意し、夫が済むと酒を飲み土人一流の放歌

亂舞を演ずるのである。

面白い人情美



へるし道

妊娠六ヶ月目にも又同じ連中を呼んで御馳走するのであるが、其の時に招待せられた連中は、妊婦に毛皮の着物、食物及び籠を贈る事になつて居る。但し毛皮の着物は妊婦に風を引かせぬ様、暖かにせよと云ふ心、食物は滋養物を勧める爲、又籠は生れる子供の生立ちが善い様に、妊婦が食事の度毎に、食物を少々づ、其内に入れて置き、外出する時に夫れを携帯し、途中出逢つた小供に與へる様にと云ふ意味なのであつて、中々面白い人情美のある習慣である。

若者を招待せぬ産み月

最後の産月になると又々同じ連中を招いて御馳走するのである。併し其時は若い連中は招待せないのであるが、其意味はイザ出産と云ふ場合に於ける萬事の心得に付前以て教授を受ねばならぬ故、若い者が居ては不都合だからである。其處で來客が又々男女二組に分かれ、前記同様に男の組は良人を原野又は森林に連れ出し、女の組は妊婦と共に家に止り、夫々出産前後の心得事を教へるのであるが、特に女の組は妊婦に勇悍であれ、恐怖すると難産するとか又は生れる子が虚弱に成るとか、云ふ様な事を云ひ聞かせ、客の一人が産婦、他の一人が産婆、更に他者が母親、又は手傳人杯の眞似をして、出産の仕方を實演して見せる。そうして其間に他の人々は歌を唱ひ、興を添へる役目を努めるのである。夫から妊婦は其翌日父の家を尋ね、母に食物の土産物を贈り、萬一父親が第一第二と云ふ如く、數人の夫人を持つて居る場合には、第一第二夫人にも同様の贈物をせねばならぬ事になつて居る。すると母及右の第一第二夫人も亦妊婦に相當の土産物を持たせて歸へすのである。

生れた赤子は姑が奇麗になめる

其處で愈々出産の場合に於て、若しも生れる子供が女子の場合には不吉と稱して、槍や楯を産婦室から取り除き、急いで産婆を迎へ、良人は一生懸命に、妻の安産を祈るのであるが、但し難産の場合には平素怨みのある女の仕業であると云ひ、心當りの人へ赦免を頼みに行くのである。すると頼まれた方では、神様に怨を忘れるから、助けて遣つて貰ひ度いと云ふ祈りをするのが習慣であるとのことである。其處で愈々子供が生れると、先づ第一に姑が夫を産婆から受取る事は何等不思議はないが、或書物には姑が受取つた赤子を舌で奇麗に嘗めると書いてある。若し夫が本當の事であるとしたならば、姑たる事も中々容易な事ではない。

八ケ間敷い産後の規則

更に不淨物は姑又は(姑がなければ)他の目上の婦人の手で、産褥に近い所へ埋めるのが習慣である。又産後の養生法は種族に依つて異なるも、キリマンジャロ方面の土人は、出産後三

ケ月間は産婦を外出させない事に成つて居り、其間牛乳、生血、脂肪、肉等を充分與へねばならぬと云ふ様な、八ケ間しい規則があると云ふ。尤も初の四日間は姑が側に居て看護し、其後は婦の實母が来て、萬事の世話をする事に成つて居る。夫で産婦は右の養生期間が無事に済むと、頭を剃り耳輪、頸輪、足輪等を着け、満艦飾と云ふ出で立で部落の中を一廻はりする。其時は部落の者一同から恰も凱旋將軍の如く、祝辭を浴びせかけられ、又産婦に充分養生をさせた良人も大變に賞賛されるのである。

産兒名命と赤子を牛に乗せて乳を搾る儀式

子供の名命にも、中々むずかしい習慣がある。先づ吉日を選んで命名の日と定め、其日には毛色の美しい牡牛を屠り、部落の者を招待し、例の通りに歌つたり踊つたり、亂痴氣騒ぎをするのであるが、長男は良人の父方の祖父、長女は良人の母方の祖父、次男は婦の父方の祖父、次女は婦の母方の祖父の名に因んで、名命する事に成つて居る。其時マサイ種族の習慣では、産婦が先づ産兒を牛小屋に伴ひ、牝牛の背に載せて乳を搾る儀式を行ふ。すると良人が三人の

長老と共に其處に来て命名するのであつて、其日屠殺した牛の皮は長く家内に保存し、其頭骨は家の入口に置かねばならぬ事になつて居る。併し牛を屠る事は其人の都合に依つては小供が成長し、割禮の式を行ふ時迄、延期しても差し支へ無いのである。夫から面白い事にはキリマソジャロ地方の土人は、男の子が死んだ後に、第二の男の子が生れると、其子の耳朶を少々切つて棄てる事に成つて居り、若し何かの都合で其通りしない場合には、胸にエンダレットと云ふ特殊の頸飾をかけ、右足の二番目の指に指輪を嵌めねばならぬと云ふ事である。又小供が生れて六ヶ月に成ると、豆のスープを作つて、婦の里方の祖父母、及其他の目上の婦人を招待し、其小供に頸輪、腕輪、足輪を付け、其糞便をバナナの根本に棄てる式をするのである。

下顎から先に齒が生へると殺される男の子

殊に小供に取り最も大切な事は、齒の生へ初めである。若し不幸にして下の前齒が先きに生へる場合には、非常に不吉と見做され、夫れが男の子の場合には殺して仕舞ひ、女の子の場合には婦を其子と共に里方に歸へす事さへもするのである。又小供が死ねば婦は二ヶ月間夫と同じ

棲する事が出来ず、若し其間に小供が生れると、非常に不吉として、其子を殺す習慣があると云はれて居る。更に又男女の双子が生れた時は先づ男の子を殺し、男のみの双子の場合には初めに生れた子供を殺し、婦を他の子供と共に里方に歸へすそうであるが、土人の婦人も妊娠中から出産するまでは随分心配の事であらう。

割禮の儀式

四六

吾等の最も珍らしいと思はれる事は、彼等の間に割禮と云ふものを行ふ事である。是は廣く各地の土人に共通する習慣であつて、其儀式も部落に依り多少の相違はあるが、孰も子供が青年期に入る頃に行ふ儀式であつて、之れが濟まぬと、男も女も一人前の人間とは認められないう事に成つて居る。蓋し此習慣は太古の時代より、廣く猶太人間に於て行はれて居るのであつて、彼等と阿弗利加の土人の外には、多く其の類を見ない世界の奇習である。阿弗利加土人の此習慣と、猶太人の夫との間に如何なる關係があるかは不明であるが、能く研究すれば或は兩者の間に、多少の因縁が発見せられるかも知れないのである。

但し割禮とは英語で云ふと、男子にはサーカンシジョン、女子にはクリトリデクトミーと云ひ、猶太人の習慣は小供が生れると直に之れを施行するのであつて、成長してからではない。尤もマダカスコルの土人は生後三十日目に於て行ふものであるが、之を除けば阿弗利加の土人は、

一般に青春期に於て行ふことに成つて居る。

武装して三日間の立ちん坊

マサイ種族の習慣に依ると、子供が割禮の式を行ふ爲めには、先づ以て父が清めの式を行はねばならぬ事になつて居る。其の方法は先づ酒を造つて部落の者を御馳走し、夫から物忌の小屋を建て、身心を清めて、駝鳥の羽の頭飾を被り、猿の皮の足飾と脚輪、小牛の皮衣、山羊の腰巻、若し獅子又は豹を殺した者なれば其皮衣を着し、刀、槍、楯等の武器を携へ、山羊の胃袋で作つた水香を腰にぶら下げ、いざ戰場へと云ふ様な出立で、三日の間其處に立て籠る事に成つて居る。其間の食事は、無論自分の内から運ぶのであつて、其處では炊事をする事を許されないものである。四日目の朝に成ると村の長老が迎いに來て、夫に連れられて、自家の門前迄歸ると、長老が貴様は是れから一人前の親に成るのだと云ふ意味で、一聲高く「さあ内に這入つて、老人に成れ」と云ふ、併し本人は謙遜して内に這入らないで居ると、其處で長老が又同じ言葉を繰返し、夫れを五度程、重ねた後、漸く「夫では御免を蒙ります」と云ひつゝ、家に入

四七

り、身に着けた裝飾物を脱ぎ棄て、其時集つて来た部落の人々に挨拶する。そこで一同が何某の父と呼び懸ける、夫に對し本人が「ハイ」と答へ、同じ事を四度び繰返へして式を終り、夫から亂痴氣騒ぎの御馳走となるのであつて、其後は何日でも子供に割禮の式を行つても差支ない事に成るのである。

神に犠牲を獻けて罪障の消滅を祈る

其處で割禮の式を行ふのは、何う云ふ風にするかと云ふと、何れの部落に於ても、毎年又は兩三年の間に、一度吉日を撰び、其部落内に於ける同年輩の少年に對し、同時に行ふのであつて、キリマンジャロ地方の土人は、酋長の子供が其儀式を行ふ時迄待ち合はし、一緒に行ふ事に成つて居る。従つて酋長の子供の年齢に依り、他の一般の子供の割禮が一兩年早く成る事もあるれば、又遅く成る事もあるのであるが、若し酋長に子供が無いか、又は子供が少い爲めに他の少年が迷惑する場合には、酋長の許を得て臨時に其式を行ふ事もあるのである。併し其時には各一頭宛の、牡牛を酋長に獻上する習慣になつて居る。

更に此儀式は人生の一大事であるだけに、孰れの部落に於ても中々嚴重な規則がある。併し其第一條件は、當人の心身が最も清淨でなければならぬ事である。夫故儀式の初に兩親から、先づ過去の一切の過失に對し赦しを與へ、次に神に犠牲を獻けて、罪障の消滅を祈る事に成つて居る。是は少年の教育上極めて有効な結果を齎す事である。

卑怯の舉動は兩親の恥となる男子の儀式

男子に對する儀式は、女に對する夫と多少異なる所がある。マサイの習慣に依ると、先づ手術を受け様とする少年が身心を清め、腰に小刀を釣り、手に牧畜用の鞭を持ち、一同揃つて牡牛と鞭とを携へ、手術者を訪問の上手術の依頼をするのであるが、其承諾を受けた上儀式の日が定まると、一同は大喜びで顔や身體に彩色を施し、歌つたり、踊つたり、大騒をして部落内の各戸を訪問し、失より我家に歸り、靜に其日を待つのである。聽て其日が來ると、普通は其の儀式も一日で済むのであるが、マサイの習慣では、夫が三日に渡つて行はれるのであつて、其第一日には先づ少年の頭を剃り、羊又は牡牛を屠り、親戚知人等を御馳走し、第二日目には

少年にエルラチムと云ふ、祝の木を森から伐つて來させ、夫を我家の入口に建て、惡魔を拂ひ、第三日目には夜の明けるのを待ち、清水を汲んで齒朶の葉を浸し、夫で少年に顔を洗はせ旭の昇るのを待つて、門を開き、牡牛の皮を右側の門柱の傍に敷き、其處に少年を坐はらせ、廳て手術者の來るのを待つて手術をして貰ふのである。其の時少年が恐怖して、卑怯な舉動をする時は、本人は云ふに及ばず、兩親の爲め非常な恥辱と成るのであつて、そう云ふ場合に兩親は世間に恥ぢ、夜逃げする事さへあると云はれて居る。斯うして割禮の式が済むと、少年はシボリオと云はれ、初めて大人の仲間入りをするのである。更に傷が癒へると、もう一度頭を剃り、夫からは其儘髪を延ばし、勇者の仲間に入るのである。併し此の場合にキリマンジャロ地方では、手術後、尙三ヶ月間外出を禁ぜられ、夫が済むと頭を剃り、外出する事を許されるのである。斯くして何れの部落に於ても同時に割禮の式を済ませたものを一つの階級と爲し、夫に特別の名前を附し、其階級に屬する者は特に親密な交際を結ぶ事になつて居る。

處女にあらざれば恥辱となる小女の割禮

小女も亦年頃に成れば、割禮を行ふ事に成つて居る。夫は處女を破る式とも云ふのであつて其儀式は大體に於て、男子の場合と變らない。併し小女の手術は、總て屋内に於て行ひ、此の手術の爲めに泣いても恐がつても一向差支ない事になつて居る。

茲にキリマンジャロ地方に於て他の地方と聊か變つて居る事は、割禮を受けやうと云ふ小女に、其儀式を済まさず死んだ姉があつた場合には、式を行ふ前に、バナナで其姉に似た人形を造り、夫に對し割禮の式を行ひ、妹の割禮が無事に済むやうに、又妹が手術を恐わらないやうに、祈らねばならぬ事になつて居る。其處で愈々儀式の當日になると、親戚知人の婦人達が穀物の土産を持參して、祝の詞を述べ、一番目上の婦人が、小女を近所の小川に伴ひ、「是れから新しい生涯に入る爲めに身の汚れを清めてあげる」と云ひながら、右足の指に水を懸け、夫より家に連れ歸り、婦人達一同で其身體に油を塗り、手術を受けさせるのであるが、其儀式が首尾よく終ると、母親は非常に喜び、脂肪を以て娘の顔や身體を塗り、夫より酒宴に移り、歌つたり踊つたり、一大亂痴氣騒ぎを演ずるのである。更に三日目に手術者が傷口を洗ひに來ると、其謝禮として、曩に客人から祝に貰つた穀物を全部手術者に提供する事になつて

居る。然るに兩親に取り最も心配なのは娘が果して處女であるや否やと云ふことである。若し右の手術を受ける時に、娘が處女でないといふ事を發見せられると、夫は本人は勿論、兩親に取り非常な恥辱となるのであつて、小女は將來第二夫人以下でなければ、容易に嫁入が出来ないのである。茲に至つて土人の道德觀念は、寧ろ文明國婦人の其れよりも確實なる事である。前述の通りにして割禮の式が済むと、小女は初めて一人前の婦人になるのであつて、キリマンジヤロ地方の土人は、夫より伯父叔母又は適當な人の内に預けられ、家事の手傳を爲しつゝ、舅、姑に仕える道、妻の心得、炊事其他の事を學ぶのである。

結婚珍話

結婚は主として當事者の兩親が、定める事に成つて居る。併し本人の意思を無視する譯けではなく、最後の撰擇は矢張り本人がするのであるが、兩親が豫備的取極をすると云ふのが適當であるかも知れない。従つて或場合に男女が知り合ひ、相方に結婚の意思が出来ると、男の方で先つ兩親の同意を求め、改めて女の父親に、結婚の申込をする事に成つて居る。尤も申込の方法には色々あつて、或は男の父から、或は仲介人から、或は友人から、或は直接本人から、女の父に申込むのであつて、話が纏まれば其處で初めて結納の額を定め、婿より嫁の父に對し、牛、羊又は山羊何頭かを送るのであるが、不思議の事に此の結納は結婚の時許りでなく、其後小供の生れる度毎に引き續き嫁の里方に贈らねばならぬ事である。又或場合には孫の生まれる時迄も、其義務が繼續する事がある。従つて一度結婚すれば婦の里方は、永い間婿の方から色々理由で家畜を貰ふ事に成るのである。其處で日が経つに従ひ、贈る方に於ても段々と惜しみ

を生ずる結果、夫が原因となつて、婦の里方と不和を生ずる事が少くないのであるが、但し婦の里方からは、婿の家に對し何物も贈らない事に成つて居る。要するに娘を嫁にやると、何にかに付け目出度い事の、度毎に結納を貰ふと云ふ事は、我が國と反對であつて面白い習慣である。

態々遠廻りして連れ歸へる花嫁

更にマサイ種族では結婚の約束が調ふと、婿からムラカと云ふ仲介人を通じ、嫁の父に對し若い牝牛參頭、牝牛二頭、嫁の姉妹に頸飾を送り、キリマンジャロの土人は、嫁の祖父にも羊及山羊各壹頭を送るそうである。其處で愈々結婚の日が來ると、普通の習慣としては婿が嫁を迎へに往く事に成つて居る。併し其方法にも色々違つた習慣があつて、中には抱腹絶倒に堪へない様な事もあれば、又極めて教訓的な事も少くない。マサイ種族の習慣は婿が仲介人、並に友人二名と共に牝羊一頭と、小羊二頭とを持つて嫁を迎へに往き、牝羊を嫁の母に贈り、小羊は嫁の父から提供する同数の小羊と共に屠殺して、嫁の父親に贈物とし、嫁の仕

度の調ふのを待つて、之に寶貝の模様を畫いた瓢箪を背負はし、其家の老婦一人を伴ひ、成るべく、遠廻りして、緩々歩みながら自分の家に連れて戻るのである。

頭の黒い牝牛が欲しい

又キリマンジャロの土人の習慣は、最初婿が仲介人と共に嫁を迎ひに往くと、其父親が之を迎へて、先づ第一に「今日は何の御用があつて來られたか」と尋ねる。夫に對し仲介人が「頭の黒い、牝牛が欲くて參つたのであります」と答へると、父は又「夫は何う云ふ種類の牝牛か」と尋ねる、仲介人が「夫は貴方の娘さんの様なのである」と答へる、父は「其様な物が宅に在りませうか」とほける。すると又仲介人が「ハイお宅に在る事を存じて居ります」と答へるのだそうである。其處で嫁の父が列席の親戚其の他一同の者に向ひ、娘を何の誰に遣はす由を語り、結納取極の顛末を述べ、嫁を一同に紹介する。其れより仲介人が婿と嫁との兩人に、夫婦の務に就て一通りの教訓を與へ、最後に嫁の父又は其代理人が、嫁に告別の詞を述べそれで式が終るのである。

花嫁を背負つて逃げ出す儀式

右の式が終ると仲介人が急に嫁の頭から着物を被せ、電光石火と云ふ勢で、嫁を背負ひ逃
け出す様な真似をする。そうすると列座の人々が、大騒をして、後から追駆け、引戻そうと
して道を塞ぐ、其處で仲介人が夫等の人々に贈物、又は贈物の目録を與へ、道を開けて貰ふと
云ふ段取りに成るのであるが、之と同時に嫁も亦負われながら、否だ、否だ、と跳ね廻るので
婿と仲介人等が夫を宥め、成るべく遠路を迂廻しながら、連れ歸るのだそうである。夫れで嫁
が家に到着すると、姑が嫁を迎へて顔や身體に脂肪を塗り、其他色々と心を盡して可愛がり、
親戚友人に紹介し、終夜酒を飲み、歌つたり、踊つたり、土人一流の大亂痴氣騒をするのであ
るが、列席者は何れも夫婦者に限られて居る。

結婚申込みは直接本人へ

キクユ種族は、男が女を見初めると、友人と共に其女を尋ね、直接に結婚を申込みのが習慣
である。其時娘が同意なれば、父に尋ねて下さいと答へるのだそうであつて、それから先きは
萬事女の父と協議するのであるが、始め一回は本人が友人と共に酒其他の土産を持つて女の
父を尋ね、其後は相方の父と父とが、萬事の話纏めるのであつて、愈々相談が調ふと婿が嫁
を迎へて行き、連れて歸るのだそうである。

新郎新婦の住家は、普通新築する事に成つて居る。元來土人の家は天井も床もない小さな小
屋であるから、大勢の家族が一所に住むと云ふ事は、實際上不可能である。其處でいざ結婚と
云ふ時には、近所に適當な場所を選定し、分家を新築するのであつて、其場合には近隣の人達
が寄り集まり、其日の内に棟を上げ、屋根を葺き、夕方迄に全部を仕上げて仕舞ふのである。
兎に角幼稚な社會であるから、物事が簡單に運ぶ爲めでもあるが、其處には實に人情の純朴さ
が著はれて居る。而し新婦を連れて歸つても、直接に右の新小屋に行くのではない。先づ最初
に両親の家に入り、両親への挨拶、兄弟親戚への紹介、其他色々な儀式が終つてから、新小屋
に移る事と成るのである。尙其場合に新婦の里方でも、新郎の親元でも、盛大な祝宴を開き、
終夜亂痴氣騒ぎをするのは前に述べた通りである。

妻に排斥され主人は夜通し立ち往生

土人は總て一夫多妻主義を實行して居る。併し多妻の内でも最も勢力のあるのは、矢張り第一夫人であつて、色々な儀式的の場合に、第二夫人以下は第一夫人と、對等の取扱を受ける譯には行かないのである。盛大な結婚の儀式を行ふのも、第一夫人だけであつて、第二夫人以下には行はないのである。但し第二夫人以下を嫁る場合には、普通第一夫人の同意を求め、其承諾を得てから迎へるのであつて、其時には第一夫人から、新婦に小牛を贈る事に成つて居る。尤も各夫人は夫々獨立の小屋を持ち別居するのであるから、普通斯う云ふ場合に有り勝ちの家庭の面倒は、餘り起らないのである。併し或場合には夫人同志の嫉妬から、主人先生何れの夫人の小屋を尋ねても、他の夫人の小屋へ往けと云つて拒絶せられ、宵から朝迄部落の内を、彼方此方と辻路つき廻はる事も尠なくないと、或る土人は笑ひながら語つて居た。

姦通制裁と結婚資格

吾等の最も感心に堪へざること、密通が一般に、土人仲間に於ても非常な恥辱と認められて居る事である。夫故娘が人から私通者と云はれると、憤慨の極聲を立て、泣く事である。併し姦通は年齢の似た者同志の場合には、差して非難せられず、只若者が父の階級に屬する者の妻を侵す時には、仲間の者から非常に非難せられ、贖罪の爲め村の長老に牡牛一頭に酒を附けて送らねばならぬ事に成つて居る。併し老人が少女と私通する事は、最大の悪事と見做され他の老人達が集つて、其家屋を破壊し、勝手に家畜を屠殺して制裁を加へるとの事である。更に結婚の資格に就ては、種族により色々な習慣があつて、處により種々様々であるが、サイ種族の習慣としては、嘗て他の部落を襲ふて、敵の首をとつて來た者でなければ、一人前の人間として結婚する資格がない事になつて居たが、現今では政府が八ヶ間敷く取締つて居る爲其習慣は、全然棄たれて仕舞つたとの事である。

夫婦喧嘩の仲裁は夫の同年者に

夫婦の間が不和に成つた場合に良人が屢々婦を打擲する事がある。そんな時には婦が堪へ

きれなく成ると良人と同年輩の者に訴へて仲裁をして貰ふ習慣がある。其時に良人は嫌でも同年者の仲裁に應ぜねばならぬとの事である。それで若其後良人が再び其婦を打擲する時は同年社會の者を侮蔑したと云ふ事になるので、其仲間の制裁が喧しい爲、その云ふ事を再び繰り返す者なく、随て婦の身柄が大變安全になるのである。然し婦に何か重大な過失があり、良人の同年者に訴へ難い場合には、親許に歸つて父に訴へ、父から改めて牡牛一頭を送つて貰ひ、其罪を謝し形を附けるとの事なるが、牛は土人の最大な貴重品であつて、それを贈ると云ふことは非常な誠意を表する意味なのである、誠に面白い習慣と云ふべきである。

病氣と葬式

土人が病氣を治療する方法は鬼神に犠牲を供へ、巫を呼んで祈禱して貰ふ事である。併し如何程祈つても効驗が顯はれず、益々病が重くなる場合には、家内から一切婦人を遠け、重立つた男子のみが止まつて、最後の犠牲を獻け、森から蛇の木を伐つて來て、恰も正月の門松の如き案配に屋敷の入口に建て置くのであるが、其れに依つて部落の人々は其處に大病人がある事を知り、病家の迷惑とならぬ様、其附近に近寄らぬとの事であるが、土人の道徳心も中々見上げたものである。

其處で最後に病人が死亡すると、大抵は屍を野原又は森林に棄て、野獸に喰はせるのであつて、之を埋葬するのは、酋長又は其他の勢力家の死んだ場合にのみに限られて居る。

マサイの習慣に依ると、彼等は其場合に日没を待つて、屍を屋敷の西方の日影地、又は森林に運び、身體の左側を下にして横たへ、頭を北に顔を東に向け、左手を枕に、右手を脚に當て、

其上に足を曲げ、恰も寝て居るが如き姿にして棄て置くのであるが、老人其他有力者の死んだ場合には、屍の傍で牡牛を屠り、親戚知人を饗應し、屍と一緒に骨を棄て、置くと、狼に似たハイナと云ふ野獸が来て、其を食ふて仕舞ふのだそうである。併し酋長其他の有力者が死んだ場合には、特に埋葬する事に成つて居り、其時には牡牛を屠り、其脂肪を取つて屍に塗り、牛の皮で包んで、日影の場所に運搬し、其儘埋葬して、其上に小石を積み重ね、墓標とするのであるが、感心な事には其處を通行する人は、知ると知らざるとに拘らず、必ず小石を拾ふて其上に置き、死者に對し敬禮せねばならぬ事に成つて居る。

御機嫌よく迷はずに逝て下さい

キリマンジャロ地方の土人は、嘗て子供を設けた事のある、既婚者丈けを埋葬し、其他の者は森林又は叢の中に棄てる習慣であるが、近頃は夫婦者でも、獨身者でも、大人でも小人でも、又小供が有る無しに拘はらず、總て埋葬する事に成つて居る。目下行はれて居る同種族の上等社會の習慣に依ると、主人が死亡すると先づ生きて居た儘の姿で牛小屋に座はらせ、親戚

及部落の者に最後の別かれを爲さしめて後、裝飾品を取り外し其代はりに蛇の木の葉で再び裝飾をほどこし、更に第一夫人が顔に化粧を施しながら、「私が今御化粧して上げます、今迄善い時にも悪い時にも、貴方と苦樂を一緒にしましたが、此れで御別かれをせねばなりません、どうぞ御機嫌善う迷はずと往つて下さい、貴方が悪魔に遇ふた時に家族の者が此部落に残つて居る事を御話なさらぬ様に願ひます、又敵に遇ふたなら敗けない様に祈ります」と云ひ夫より第二夫人以下各夫人、小供、兄弟、親戚の人々が順次に、同じ様な言葉を繰返へし更に「長旅ですから充分召し上げられ」と云ひながら、牛乳脂肪杯を死人の口に入れて、最後の供養を爲し、夫が濟むと牡牛の皮で屍を包み、長男と、末男とが主に成り、男の子一同で、第一夫人の家の中央に穴を掘り、其處に埋葬するのであるが、穴に屍を入れると皆で、「御機嫌よふ」と云ひつゝ、其上に牛の糞を抛け込み、其から土をかけて式を終り、一同に對し牛肉の御馳走をする、習慣に成つて居る。

有夫の婦は葬式の御馳走を食べない

併し死者の義姉妹以外の婦人は良人が存命な場合には其御馳走を食べてはならぬ。又父が生きて居る場合に其子も之を避ける事になつて居る。孰れも良人及父の長命を祈る爲めである。尙此儀式の後、四日間死者を祭り祖先を祭る儀式があつて、夫が終ると親戚一同が頭を剃り、相續人が財産を繼承する事と成るのである。但し第二夫人以下の、未亡人等が頭を剃ると剃らぬとは各自が自由に極めるのであつて、再婚を欲する者は必ずしも、頭を剃るには及ばない。又親戚の者でも良人のある婦人は頭を剃らない事に成つて居る。但しマサイノ女は如何なる場合にも髪を蓄へないのが其種族の習慣である。

八ヶ間敷い服装規定

以上の儀式は有福な者の、間に行はれる習慣であつて、各人皆此通りにする譯ではない。財産の豊かでない者は、牡牛の代はりに山羊を屠り、又は羊、山羊の子若しくは肉の小切を用ひ、牛の皮の代はりにバナナの葉を用ひるのであつて、身分に依り節約自由の事に成つて居る。マサイ種族では死後の服装に就き、極めて嚴重な習慣があつて、父の死に對しては、家族は

一ヶ年の喪に服し、未亡人も、娘も、女達は皆一切の裝飾を取り去り、男子は小供も大人も、總て頭を剃る事に成つて居る。併し他の家族の死んだ場合には、女は耳輪及頸に掛けた大きな鐵輪は外すさないが、小さな飾裝は全部取り外すし、男は一ヶ月間丈け頭を剃り、赤ん坊の死んだ場合には、母親丈けが飾裝を外すのださうである。

蛇は祖先の化身だとして可愛がる

土人には死人に就て色々な迷信がある。マサイ種族では屍を森に乗せた場合狼又は其他の野獸に喰はれた場合は、魂も夫で死んで仕舞ふものと思ひ、埋葬した場合には身體が腐れば魂は蛇に成ると云ふ傳説を信じ、蛇は祖先の化身で、家族殊に小供の安全を守護するものと思ふて居る。夫故大變蛇を可愛がり、屋敷で夫を發見すると、牛乳を與へるさうである。又キリマンジャロ地方の土人は、家族の者が死んだ後、六ヶ月以内に誰か病氣をすると、夫は死人から牛乳の催促をするのだと云ひ、有福な土人は乳の出る牝牛を屠り、夫を死人の爲め犠牲に供すとのことである。又墓穴を造る事に就ても、大分迷信があつて、一旦墓の場所を定め、穴

を掘りにかゝる時は、必ず夫を仕上げずに他の穴を掘てはならぬ、若し他に穴を掘れば、穴は二つ入用が無いから誰かが死ぬ様な事になると云ひ、又穴を掘る際に足を踏み入れるのも、同様に不吉だと云ふて居る、然し或他の地方では、夫と反對に穴が掘れた時は、相續人が一應其處に這入つて、検査をせねばならぬと云ふ習慣があるそうである。

マサイ種族の面白い習慣は死人の名を呼ぶ事を、非常な不吉として居る事であつて、出來得る限り夫を云はない様に注意して居る、それ故人が死んだ場合には、後日の不便を避ける爲め豫め別名を作つて置き、入用の場合に夫を使ふ事として居る。併し長老又は特に有力な人の場合は例外であつて、幾代も其名を繼承し、永く其人を追慕する様な事を遣つて居る。

面白い遺産の相續

土人の財産は多くの場合に於て家畜である。而して所有者が死んだ場合に夫を相續する者は普通死者の長子と云ふ事に成つて居る。マサイは土人の内で最も牧畜の盛んな種族なるが、主人に多数の妻がある場合には、平素所有の家畜を幾組かに分かち、各々に一組宛世話させる事とし、主人が存命中は孰も主人の所有物であるが、主人が死ぬと其儘妻の家族の所有と認められ、其長子が母の預つて居た家畜を相續する事に成るのである。併し若し是等の妻の誰かに子供が無い場合には、本人の預つて居る家畜は主人の遺産と共に、他の其長子に依りて相續せられる事と成つて居り、若し何れの妻にも子が無い場合には、其財産は死人の兄弟が相續し、妻は異母の兄弟が引受ける事に成つて居る。又キリマンチヤロ地方に於ても、死者に子供が無ければ其遺産は兄弟に依りて相續せらるるも、其場合に相續者は未亡人の誰かと結婚せねばならぬと云ふ事になつて居る。

樂天的な土人の生活

六

土人は孰れも樂天的であつて、先づ第一に彼等は生活の苦勞を知らざるのみならず、土地は廣大にして食物は充分であり、又贅澤と云ふものを知らざるが故に、世間的に何等心配する事が無い。唯彼等の苦痛とする處は政府へ人頭税を納めると云ふ事丈けである。従て此税金を上納する爲めに餘議なく歐洲人の耕地、又は町に出て勞働するも、此必要さへ無ければ彼等は決して働くことを好まないのである。尤も政府が人頭税を徴收するのは、土人を働かせんが爲めの方便であつて、其爲めに土人が働かねばならぬと云ふ事は、政府の豫定の計畫であるから政府としては満足である。併し土人の側から云へば彼等は衣食住の苦勞がなく、眞に生活の満足を感じて居るのだから何も離職と働く必要がなく、貯金などして老後の謀をするなどは彼等の思ひも寄らぬ所である。

而し土人が働かない爲に困難するのは、歐洲人の移住者であつて、彼等は東阿弗利加に於て農業を計畫し、土地の拂下を受け、多額の資本を投じ、漸く事業に着手して見ると、土人の勞働者が得られない、其處では等の移民達は政府に向つて頻りに苦情を並べ立て、土人に勞働を強制する様、喧ましく請求して居るのであるが、奴隸制度に反對する、文明國の政府としては、直に其要求に應ずる譯にも行かず、本國の移民に勞働者を供給する事は、政府に於ても其必要を認めて居るのであるが、如何にして奴隸制度の形式を避け實際上土人に、勞働を強制し得るやと云ふ事に苦心して居る様である。

勞働の變りに過重なる人頭税

政府に於ても移住者の苦情に困りはて窮餘の一策として土人に對し、過重なる人頭税を課することとし、普通十六歳から六十歳迄の男子に對し一人に付、一ヶ年拾貳志即ち約我六圓、又或地方に對しては、參拾志即ち我拾五圓を徴收し、若し小屋一ヶ所に付男子の納税者が無ければ、人頭税一人分に相當する、小屋税を納附せしめて居るが、天井も無く床板も無い小さな堀立小屋に住む裸一貫の土人の負擔としては中々の重税であるが、政府は之を勞働強制の

手段として致方がないと認めて居る、尤も表面上は單に土人を産業に導く爲めに一種の教育制度であると云ふて居るが、只政府の困難とする所は、萬一土人が税金を納入しない場合に如何ともすることが出来ない事である。勿論税金を納めねば監獄に入れる事にして居るが、土人は夫を苦痛とも又恥辱とも考へないのである。

出獄すると洋行がへりの新智識

其處で刑期を終り出獄すると、仲間の者から新知識として迎へられ、日本で云へば、恰も洋行歸と云ふ様に大持てに囃し立てられ、土人仲間より引張られたこの如く歓迎されるのである。勿論監獄と云つても文明人の經營であるから、彼等の如き豚小屋同様の設備と違い、萬端整つて居り食物も相當な物が與へられるので彼等に取つては、全く天國にあるが如く部落に居るよりは遙に、優待せられる結果となるのである。それ故彼等は監獄を少しも苦痛としないのみならず、恰も客にでも行つて居るが如くその日々を愉快に暮して居るのである。現に最近の話に依れば、此種類の囚人四名が、或日曜日一人の看守に連れられ、近傍の湖水で遊泳中に、

其看守が誤つて溺死した。若し彼等が監獄に繋かれるのを苦痛とするならば、此時こそ逃亡の最好機會であつたのである。然るに彼等は入獄を洋行位に心得て居るのだから、逃亡するなと云ふ事は彼等の思ひを寄らない所である。其處で四人の囚人は悠々と其場を引揚げ、打ち揃つて監獄へ歸つて來たとて、一つの笑話になつて居るが、之れに依つても彼等が監獄を一種の別荘位に心得て居る事を想像する事が出来るのである。

投げ銭をして労働者を集める

土人も近頃は政府の課税、及勧誘並に宗教家の教化等に依り漸次労働の道に入り、又少々ながら外來の文明に觸れ、衣服及器具等の輸入品を使用することを覺へ、是等の物品を購入する爲、自然の必要から労働する様に成り、次第に勤勉の風に化せられつ、あることは吾等の大に注目すべき所である。夫で事業家の側でも、土人を使ふ爲には色々工夫を凝らし、彼等の好奇心を挑發する様なことを遣つて居る。或時労働者を集める手段として毎朝錢投げをやつて見た。所が大層土人の人氣に投げ、最初の内多數の土人が集つて來たので、主人公は大得意と成

つて居たが、其後土人の方も餘り嬉ばないので、何故かと調査してみると、土人代表者の云には、投げ銭は大變結構であるが、吾々大人が小供達と一所に成つて錢を拾ふ事は甚だ體裁が悪いから、大人は大人同志、小供は小供同志に區別して貰ひ度いとのことであつた。野蕃な土人にもやつぱり羞恥心はあをものと見へる。

慾を知らない無邪氣な土人

彼等は概して非常に無邪氣である、詰り生活上の不安と云ふものがなく、激しい浮世の波に揉まれて居ないから、氣分が自然と延びりして居る。特に面白いと思ふ事は彼等が萬事を忘れて夫に現を抜かすと云ふ事である。其代はり彼等は極めて物に感じ易く、少しの事を怒るかと思へば又些細な事を非常に喜ぶのみならず、氣分轉換の速かなことは恰かも小供の如くである。併し其結果として彼等には少しも自制力がない。例へば人足業を專賣の様に居るスワヒリ人の如きは、終日重い荷物を頭の上のせ、運搬に疲勞して居ても、一旦夫を下に降ろし食事を済まして一休みすると、忽ち今迄の苦勞を忘れて仕舞つたかの如く、笑ひ、歌ひ、巫山

戯ると云ふ鹽梅であつて、其氣分の輕快なのは文明人の間には一寸見られない所である。殊に最も面白い事は、彼等が西洋人杯の從者として、數週間又は數ヶ月間、内地を旅行する場合に愈々最後と云ふ時に至り、急に家郷が戀しく成ると他の事は全然打ち忘れ、三十六計逃るに若かすの兵法に依り、長い間の給料も貰はず、急に姿を隠すことさへあると云はれて居る。尤も彼等と雖も或場合には、中々欲張る様であるが、氣に向けば計算は御構ひなしに一週間も、十日も餘計に働くそうであつて、世智辛ひ社會の者には一寸想像し難い様な、多くの可憐性に富んで居る。

更に土人が非常に柔順なると同時に、遲鈍なことは一般の定評なるが、キクユ種族の者は特に、其傾があつて、彼等は主人の命令とあれば、如何なる事も正直に遵奉し、植木に水を遣れと云はるるまゝに、雨が降つて居ても矢張り、命令通りに水を遣るそうである。

泥棒と人力車夫の鼻歌

土人は一般に無邪氣ではあるが、平氣で泥棒をする。然し彼等は夫を大いした惡事とは思ふ

て居ないと見へ。「夫は俺のものだ、返へせ」と云へば、「ソウカ」と云つて平氣で返へすそうである。

夫から最一つ面白いのは、阿フリ加では至る處に人力車が流行して居る事である。モムバサやダレサラームの様な開港地は、勿論八百哩も内地のウガンダに於てさへ、土人が盛に車を挽て居る。尤も夫は日本の人力車よりは、遙に大きく、孰も二人乗であつて、普通一人が前で挽き、二人が後から押して居る。更に夫が何とも名状し難い氣の軽い陽氣な調子で、唄を歌ひながら、元氣に走つて居るのである。或時其車に乗つた西洋人が、餘りに面白そうな唄であつたから、通譯者に其意味を尋ねた。所が、夫は

「此外人は餘り肥り過ぎて居る、チツト食物を減じたら良からう」

「重い重い引繰り覆へして顎の骨を折つてやれ」

と云ふ意味だつたと云ふことで、大分驚かされたそうであるが、其氣分の快活さは中々無邪氣で面白いではないか、吾等が乗つた人力車の挽手も矢張り愉快らしく歌つて居たが、賢明な吾等は敢へて其意味をたゞさすとも、多分御世辭の唄であつたらうと解して居た。

マサイ種族の奇習

マサイ種族が其勇猛な事に於て、他の土人と大に違つて居る事は前に述べた通りなるが、其風俗習慣に於て更に奇々怪々にして抱腹絶倒に堪ざるものが極めて多く、阿フリ加の土人中最も其特色を發揮して居るのは實に此人種である。先づ第一に彼等が不思議の事には下顎の前歯を二本抜いて居る事である。何か感動した場合に其齒の隙間からチユツト唾を吐いて、少し許り相手の顔に唾を懸けるのが彼等仲間の習慣である。例へば久方振りに親戚又は友人杯に遇つて、親みの情を顯はす時には、抜けた齒の間からチユツト唾を吐くのが其人達に對する一つの禮儀の様になつて居る。併し是れと同時に平素きらいな奴に遇ひ、嘲弄した意味の表情をする場合にも、矢張りチユツト唾を吐くのであつて、唾はマサイ人に取り極めて必要な表情の手段になつて居る。然るに面白い事には赤ん坊が人に賞められると病氣に成ると云ふ迷信があるので、土人が赤ん坊を見る時に、あゝ嫌やな子だなと思ひながらもチユツト唾を懸け、口の内

であ、可愛い子だと言ふ表情をするのが、其の子供を愛する一つの作法に成つて居る。

男は長髪、女は坊主

小さな小供が老人に出遇つて挨拶すると、老人は大變に喜んで其子供顔にチユツト唾を懸け、長生きして、俺の様な白髪頭に成れと云ひ、青年の勇者が老人に挨拶した時にも、老人は喜んで其顔に唾を懸けると云ふことである。併し彼等も近頃は西洋人が唾を好まぬと云ふことを知り、西洋人には其禮式をしないさうである。

更に面白い事は女が頭を剃つて、男が髪を延ばして居る事である。尤も小供は男子も女子も一様に頭を剃るのであるが、男子は十四五歳に成り、割禮の儀式を済まし、一人前の青年に成ると、直ちに髪を蓄へ夫を束に編んで後に垂らして居る。併し追々彼等が中年に達し、息子が嫁を貰ふ様に成ると、長老の仲間に入り、始めて頭を剃る事を許され、部落の者から尊敬せられる様に成るのである。但し青年並に壯年の者でも、親又は親族の喪に服するか、又は病氣に罹り、鬼神に禱する時には特に頭を剃ることを許されて居る。

長老でなければ坊主になれない

彼等の間に於て頭を剃ると云ふことは一つの大きな特權と見做されて居り、喪中の者か又は病人の外は、長老でなければ、坊主頭になれないのである。併し頭を剃るのは假令夫が特權であつても、其實土人に取りては大變な苦痛である。何ぜなれば彼等には剃刀と云ふものが無いのであるが、身分上剃らねばならぬので、切れない小刀でヒイヒイ云ひながら剃つて居るのであつて、其苦痛は察するに難からぬのである。尤も近頃は硝子の破片を求め、夫を剃刀にして使つて見ると、餘程成績が善いので、彼等は非常に喜んで居る。夫故彼等に剃刀を呉れると三拜九拜して喜ぶさうである。殊に女は頭髪のみならず眉を剃り、蔭れた場所に在る總ての毛を抜き、又は剃り、其或者は向脛の毛迄も剃つて居る。併し女は頭を剃らねばならぬものと定つては居るが、出産した時は其子の上齒と下齒とが、二本宛生へる迄は、親子共に頭髪を剃らないといふ事である。

牛の生血は吸ふが野獣の肉は喰はぬ

八

マサイ種族が他の種族と異なる事は、彼等が従来野獣の肉を食はぬ事と、好んで牛の生血を吸ふことである。但し彼等の常食は、牛肉と牛乳とであつて、牛が病死し、又は野獣に殺された場合に、彼等は其肉を平氣で食するのである。尤も昔は鳥肉、魚肉、穀類、バナナ等を食はなんだが近頃は、周囲の感化を受け、段々と夫を食すと同時に、最近野獣の肉も少しは食ふ様に成つたとの事である。

更にマサイ種族に就て最も不思議とする事は、歐米人中の秘密結社社員の間に行はる、或習慣に似た事が、同種族の間に行はれて居ることである。例へば彼等が途中で人に出遇ふた場合に交換する挨拶の言葉杯は、チャント紋切形の様子に一定して居り、若し出遇ふた者が一人の時には何れからでも先きに挨拶する者が「ソバイ」と云ひ、大勢の場合には「エンダッバイ」と云ふて呼びかける、すると呼びかけられた者は夫に對し「へバ」と云ふて返事をする事になつて居る。併し相手の者が遠方から來た場合には、必ず何か善い話があるかと、尋ねるのが

禮儀であつて、尋ねられた者が夫に對して、善い事許りと返事することに成つて居る、又若し勇者と老人と出遇ふた時は、老人の方から先きに話かけるのが禮儀であつて、其時は老人が「エンダッバイ」と云ひ、勇者が「へバ」と云ふて返事をするのださうである。併し夫は單なる規則であつて、實際は其時の調子に應じ、勇者の方から先きに話しかけ、老人が後から返事することもあるとの事である。又若しも勇者が既婚の婦人に出遇ふた時は、何れからでも先きに見た方から「エンダクウエンヤ」と云ふて挨拶し、他の者から「イゴ」と返事することに成つて居る。

客の接待は妻にまかせ主人は第二夫人へ

又土人が人を訪問して歸る時にも相方の挨拶が一定して居り、客が「歸ります」と云ふと、主人は「どうか善い事許りに御遇ひなさる様に祈ります、盲人の外は誰にも御遇ひなさらぬ様に」と云ひ、客は主人に對し「緩々御酒と牛乳を召し上げ」と云ひ、主人が「ハイ、有りがとう」と云ふのを聞いて、家外に出ることに成つて居る、尙ほ此外場合に應じ、種々な規則が

九

有つて、中々むずかしい様であるが、夫に相違する時は、禮を缺く者として仲間から大變非難せられるそうである。

彼等が他の地方に旅行する時は、必ず親戚又は知人の家に宿り、親戚又は知人が無い場合は、同年の者の家に宿まることに成つて居る。尤も同年の者の家が分らない時には、人に尋ねて索がし出すより外は無いのであるが、面白い事には其時訪はれた人は、如何なる事があつても、其人に宿を借さねばならぬのであつて、そう云ふ場合には主人は何處かに寢る場所を發見し、妻丈けが内に止つて客の世話をせねばならぬ事に成つて居る。但しマサイは大低數人の妻を有し、夫が各別に小屋を構へて居る故、其内の何處へか往つて宿るのである。是は同年齡の者が一つの仲間を形造つて居り、互に助け合はねばならぬ事に成つて居るからである。

牧草は神聖にして平和の徴象

マサイが先天的に家畜を好愛し、盛に牧畜を營んで居ることは別に述べた通りなるが、彼等は世界に於て家畜程、尊い者は無いと考へて居る、從て牧草を非常に神聖なものと思ひ、人

と争闘して和解する時杯には、相方から草を握つて高く差し上げ、夫を平和の徴にして居り、如何に恨みある者と雖も牛と草とを携へて、宥恕を願つて來れば嫌でも宥して遣らねばならぬ事に成つて居る。夫故親が子を折檻する場合にも、子が手に草を握つた場合には、直に宥さねばならぬと云ふ事である。又勇者が争闘から勝鬪を擧げて、歸つて來る場合には少女が草に牛乳を浸して、頭から振り懸け、日本ならば萬歳々と云ふ様なことをする。夫から轉居の時には、飄箆に草を結び附け、夫を先頭にして後から皆の者が荷物を持ち、ゾロゾロと着いて往く、詰り草で惡魔を拂ふと云ふ意味である。更に森林又は原野杯で體に出遇ふた時には一握りの草を取つて二つの穴に差し込み、死者を弔ふのが彼等の美しい習慣である。是も草は彼等に依り神聖なものと認められて居るからであるが、彼等は旅行の途中若し倒れた木の爲めに道路を塞かれる様なことがある時は、夫を非常に不吉とし、直に草を取つて其上に振り懸け、惡魔拂をするとの事である。其他斯う云ふ様な面白い習慣が、限りなくあるのであつて、如何に家畜と家畜を養ふ牧草が、彼等にとりて神聖視せられて居るか云ふことが、窺はれるのである。尤も家畜を愛することは、何れの野蕃人にも共通な習慣であつて、必ずしもマサイ種族の特

質とは云ひ難いが、其習慣が此種族に依つて、最も善く發揮せられて居ることは、否み難い事實である。

奇抜な迷信

此種族には又不思議に面白い迷信がある。例へば病人を見舞つた時に、鳥が左の方で鳴けば、其病氣は回復するが、右の方で鳴けば到底助からぬものとしてある。又争鬭の場合にチロと云ふ鳥が右の方で鳴けば勝ちと信じ、勇んで進むが、若し左の方で鳴けば敗ける事を信じ、直に我家に歸り、他日出直ほすことにするそうである。併し人を訪問する時に其鳥が後で鳴くと、今日は屹度御馳走が出ると云つて喜ぶが、若し遠方へ旅行する場合は、夫が雨に遇ふ前兆だと云ふて居る。又用談の爲めに人を訪問する途中一人の、歩行者に出遇へば、不成功の前兆として大に悲觀するそうである。

小供の學校教育

小供の教育は學校教育と、家庭教育とに分かれて居り、學校教育は何れの地方に於ても、殆んど宗教家の手に依つて教育されて居る事は變りがないが、政府に於ても自ら若干の學校を經營し、又私立學校に或程度の補助金を與へ、相當の援助をして居るが、教育の爲めに主として活動して居る者は宗教家である。但し授業の程度は簡易な算術、習字及讀書位のものであつて、若干の學校に於ては大工、左官、鍛冶等の如き職業教育も授けて居る。但し是等の地方へ最初に入り込み、歐洲人の勢力を扶殖した者は英國、佛國及獨逸の宗教家であつて、彼等は布教と同時に兒童の、教育に力を用ひ、至る處に學校を設けて居る。従て、今日では教育の事は殆ど宗教家の任務の様に成つて居り、政府も亦之を便利として成るべく獎勵することを努めて居る。隨て各英領地又は保護國、中學校教育の最も普及し、且つ進歩して居るのはウガンダであつて、同地方では小學校の数が、簡易な屋外學校を併はして四、三九一校に達して居る。尤も其内四、二四〇校は宗教家に依りて、經營せられ、政府の支配に屬するものは、僅に一五

一校に過ぎない位である。又此外に中學校及び、師範學校が二八校、専門學校が八校あつて、其處では大工、煉瓦工、鐵工、ブリキ工、靴工、印刷、裁縫、電信、測量、醫術等の職業教育を教へ、學校教員をも養成して居る。尤も其の内ブガンダ王國では、土人中に右の如き職業専門の教育に満足せず、文化的高等教育を要求する者が無いではないが、政府は時期尚早と稱し今尙取り合はない様である。

感心すべき家庭教育

土人に對して家庭教育と云ふことは、聊か大袈裟な様ではあるが、如何に土人と雖もホームが有る以上小供を撫育する上に於て、其處に何等かの教が無くてはならないのである。勿論簡單な社會であるから深い教のあるべき道理は無いが、それでも部落の人と成るに必要なことは多少あると同時に夫等は總て幼少の時から、兩親の手によつて教へる事に成つて居る。先づ第一に女の子には母親が、家事の手傳をさせ、其内で最も必要なのは、炊事と家畜小屋の掃除で

あつて、家族の爲めに食物を調理する事と、牛糞を浚つてバナナの畑に入れる事は、女子として必ず心得て置かねばならぬ事に成つて居る。次に頭に物を載せて運搬することも、女の主たる用務の一つであつて、女の子が一人歩みをする様になれば、何か頭に載せて歩ませて居るが、子供も亦親に倣ひ、頭に何にか物を載せねばならぬものと思つて居る。現に小さな小供が一本の木切を頭に載せ、母親と一緒に歩いて居るのを見るのは、極めて普通の事であつて、其熟練して居る事は到底幼少な小供とは思はれない程である。尤も成長するに従ひ段々と修業を積み水壺、徳利の様な破はれ物とか、又は重量のある物を頭に載せる様になり、初めて一人前の女と成るのである。又男の子は家事の手傳は一切しないが、成長するに従つて家畜を飼はねばならぬ義務があるので、是れも幼少の時より父親、又は長兄に従ひ牧場に出て、其手傳をせなければならぬ事に成つて居る。

其の他男女を問はず人間としての心得事は、祖先より傳へられた昔噺、又は方諺等に依り、或程度の教訓を受ける事は、文明國にもある習ひであつて別に説明するまでもない事である。

新舊思想の衝突

阿弗利加にも土人の間に、新舊思想の衝突と云ふものがあつて、大に彼等の頭を悩まして居る事である。云ふ迄もなく日本が歐米の文明と接觸してさえ、非常な影響を受けたと同様、裸體生活の阿弗利加の土人が、一足飛に別世界の如き白人の社會に接觸したのだから、其影響の甚大なる事は決して不思議ではない。例へば土人の若者が、或は町に往き、或は農園に出て、白人の家に使はれ、夫が生嚙りのハイカラに成つて歸つて來る、親は全くの世間知らずであるのに、子供が何でも知つたかぶりをして、親を馬鹿にし、村の長者を馬鹿にする、そう云ふ新しい空氣に觸れた者を、古い連中が統御する事は到底出來ないのであつて、其處に段々溝を生じ家庭が破壊せられるのみならず、部落の秩序が亂されると云ふので、古老達は大變に困つて居る。英國の宣傳師杯は土人をして、餘り急激な變化を受けしむることは、其健全な發達の爲めに有害であると云ひ、土人と白人との接觸を遠ざけしむる爲め、成るべく彼等を其境土に止

め、自己の農園に於て自作せしむるに、若かずとの説を主張して居る。勿論右の論者と雖も土人の舊弊に屬することは、改めねばならぬと云ふことを認めて居るが、彼等の爲めに必要な固有の習慣も亦尠くないのであるから、是等は努めて保存することに注意し、改革すべきことも餘り急激に夫を實行し様とすれば、却て彼等の秩序を亂し、有害な結果を招く恐があるので政府としては土人に對し、餘り出稼など獎勵せざるに若かずとの説を唱へて居る。併し不幸にして政府近年の政策は此點に於て土人の利益が甚だしく無視せられて居るが如き傾がある。

土地所有の觀念

土人の多くは所謂遊牧人であつて個人的には常に流々轉々し、一定の地方に永住するが如き事なく、何れも何年かの後には又元の場所に歸つて來ることも、無論あるのであつて、其狀は恰も牛馬が廣い牧場の中を、自由に駆け廻はつて居るのと、少しも違はないのである。從て土地は同種族の共有物の如く成つて居るが、土人の或者が其區域を個人で所有する坏と云ふ様な、觀念は少しも無く、例へばマサイ種族の如きは、其最も顯著なものであつて、英國が始めてケニヤを占領した時に、同種族は現今ウガンダ鐵道の通つて居る高原地内に於てナイバンヤからモーロ迄ナイロビから、キウ迄の大地積を占領して居たのであるが、彼等は之を其種族の共有物と考へては居たが、各人に就て云ふ時は、何人も一定の場所に固着して居たのでなく、或は一年或は二年位毎に、轉々と他に移動し、自己の都合に依つては數年の後、舊地に歸還する事もあるので、種族的に云へば土地は勿論彼等の所有である事は知て居るが、個人的に土地

を所有すると云ふ様な考へは持たないのである。尤もキクユ種族は其の例外であつて、彼等は元ケニヤ山麓地方に住まつて居たのであるが、今より約百年前、現今のキクユ地方として知らるる、中央高原の森林地を、先住人から牛及山羊千頭と交換し、爾來自己の努力で夫を切り開き、現在の農業地に作り上げたのであつて、其結果土地に對し、種族的にも、又個人的にも稍所有權に近い觀念を有つて居り、又嘗て代價を拂ふ者と、之を開墾した者とは必ずしも同一人でない爲め、兩者の間に地主と小作人との様な關係が成立つて居る。尤も部落内の土地は全然同種族の者にのみ屬するものと認められ、他の種族の者には讓渡されないことに成つて居る。

土地の讓渡は一時的と考へて居る土人

土人の土地に對する觀念が右の通りであるから、土人が土地を讓り渡すと云ふことは、彼等の立場から云へば單に一時限りの讓渡を意味するのであつて、夫が永久的に他人に依りて、占領せらるる杯とは少しも考へないのである。從て最初英國なり又は獨逸なりが、東阿弗利加の未開地を占領するに當り、彼等は名義上土人の酋長と條約を結び、土人から土地を讓り受けた事

にはして居るが、條約に對する土人の考は歐洲人の考とは全然異なるのであつて、永久の讓渡杯と云ふ事は、土人の頭には少しも無かつたものである。従て、土人は後に至り夫が歐洲人に依りて永久的に占領せられるのを見て、大に驚きそう云ふ意味では約束せぬとか、又土地は種族全體のものであるから、假令酋長でも、之を種族外の者に讓渡す權能は無いなどと云つて居るそうである。

眞理を穿つた土人の方諺

世人は阿弗利加の土人と云へば、道德の觀念も何も無い、自然其物の様な蒙昧の蠻人とのみ解する様であるが、其實彼等の間にも、祖先傳來の色々な方諺があつて、夫が彼等に向ひ常に一種の教訓を與へて居る。其内には恰も天外より落ちた様な奇想もあれば、千古不磨の金言もあり、諸謬語を解くが如き風刺的なものもある、今其内の代表的なものを掲げ、大方の一餐に供することとする。

息子に嫁貰つた様な女。

是は人に勞働させて、自分は少しも手足を動かさない女のこと。

蠅に耳あり。

是は土人の家には蠅が澤山居るから、出來た諺であつて、人が居ないと思ふて、お喋りする
と直に曝露すると云ふ意、日本の壁に耳ありと云ふ諺と同意味である。

暗夜に耳あり。

是も壁に耳ありと云ふのと同様であつて、暗夜に油断してお喋りすると、人に聞かれて失敗すると云ふ意味である。聊か違つた話ではあるが、阿弗利加では土人が皆黒ん坊だから、暗夜には顔の見分けが出来ない、其處でケニヤに於ても、又タンガニカに於ても、土人に對し日没後、提燈なしに外出することを禁じて居る、成る程暗夜に耳ありとは善く云つたものである。因に壁に耳ありと云ふことは西洋にもあるが、人間の思想は東洋も西洋も又野蠻地も變りはないと見へる。

炭が灰を見て笑ふ

是は炭が自分も何時か灰に成る運命を持つとも知らず、餘所の灰見て笑ふと云ふ意味、詰り身の上知らずと云ふ心である。

炭が焼かれて居る薪を見て笑ふ。

是も前と同様に身の上知らずと云ふ意味

人に呼ばれて来たのでも、又自分で出て来たのでも来て居る以上は同じ事。

ゼブラの様な生活をする。

是は多く責任を逃がれ様とする人を嘲ける場合に用ゆる、言葉であつて、所謂瓜田に靴を容れた以上は其動機などを辯明しても無駄と云ふ意味。

セブラは編馬の事であつて何處にも、定住する處がない、其編馬の様な生活をするに云ふのであるから、天竺浪人と云ふ意味。

物には端がある。

土人も仲々隅に置けぬ、丁度幾何學の定義の様である。

山は出遇わぬ。

山と山とは出遇はぬが、人間は別れても失望するには及ばぬ、又出遇ふ時節があると云ふ心、普通親戚友人などが分れる時に云ふ言葉。

一本の指で蚤は取れぬ。

阿弗利加の土人にも、共同力の必要な事は分つて居る。

姪振せねば腹は脹れぬ。

火の無い處に煙はないと云ふのと同じ意味。

鼻は顔より先に進まぬ。

是は多く不幸に遇つた時に使はれる言葉で鼻が獨りて先へ進めるものなら、豫め不幸を嗅ぎつけ注意も出来るが、併し夫が出来ぬ故、不幸は避けられぬと云ふて、諦めるのである。

縞馬は自分で自分の縞を取り去る事が出来ぬ。

天性は自分の力では、曲げられぬと云ふ意。

事件は日の様に絶へ間が無い。

事件は次から次へと、絶へ間が無い、丁度今日、明日、明後日、と毎日日が繰り返へされる様なものだとの意。

手を下す前に考へれば失敗は無い。

他人の垣を繕ふ前に自分の垣を繕へ。

鷹に弓を見せるな。

一つ皿から食事する友達の間でも互の腹は分らぬ。

友達の間でも人の心は計られぬと云ふ意。

番犬の耳は塞がれ無い。

主ある妻を訪ずれる、不所存者を誡める言葉。

敗けるも死ぬも同じ事。

敗ければ生き甲斐が無いと云ふ意、土人も又恥を知ると云ふべきである。

人は様々。

人は様々で善人もあり悪人もあると云ふ意。

馬鹿も経験で賢くなる。

ジツト背中に負はれて居らぬ子供。

人の背中に負はれて居ながら動き廻り、じつとして居らぬ子供と云ふ意味、氣儘者と云ふ心

人は豊かな時には夫を感じぬ。

人は不幸に遇ひ、始めて昔の豊かな時の事が思はれると云ふ意。

生れない前に雛の勘定をすな。

取らぬ狸の、皮勘定と同じ意味。

自分の子であつても人の子であつても夫はどうでも善い、務を怠らない子が一番尊い。

バブーンは生れた場所から遠くは往かぬ。

人間も故郷を戀しがる、一時他國へ往つても、又歸つて來ると云ふ意、バブーンとは大きな猿である。

一つの木の皮は外の木の皮には成らぬ。

人間には夫々習慣がある。甲の種族はこの種族の習慣に従ふ譯にはゆかぬと云ふ意。

安定して居るのは山ばかり

山は動かぬが人の身には、浮き沈みがあると云ふ意。

お喋りはすな。

土人も多言は善くないと認めて居る。

大勢の子の親の様に柱に足をもたすな。

大勢の子の親ならば兎も角も、それで無い若者が寝轉んで惰まけて居ては善くないと云ふ意。

富んで若死するよりも、貧乏で長命するのがよい。

祖母育の徒ら子供。

家畜は門を出てず。

親が死ねば子が相続するから、一旦家畜を飼へば其家から離れないと云ふ意。

子供は内に居れば千人力。

子供は家庭に居さへすれば、何んなに幼少でも、又虚弱でも、親の保護を受け、親が死ねば家畜を相続するから、安全だと云ふ意。

何んな事件も眞相は一部分だけが傳へられる。

何事も世間に誤解せられるのが、普通であると云ふ意。

牛は一時にニケ處では吠えられぬ。

勇氣は満能でない、一人のよりも二人のがよい。

人間は勇氣計で仕事が出来るもので無い、餓鬼も人数と云ふ意。

野蕃地にも華街はある

野蕃地に華街があると言へば、ちと大袈裟の様ではあるが、ほんとうだから致し方がない、尤も一寸考へると、夫が或程度迄進歩した、秩序ある社會の裏面にのみ現はれる、現象ではないかと思はれるが、事實は必ずしもそうでなく、何んな意味な蕃地でも、凡そ人間の居る世界にはそう云ふものが乞度ある。現に阿弗利加に於ても、吾等の足跡は、北方の炎熱焼くが如き礮礮不毛の、佛領ソマリランドから、南の方瘴煙蕃雨の葡領東阿弗利加迄、此大陸の東半分を掩ひ、更にマダガスカル島の全土に及びしが、沿岸の各地は勿論、僻遠の内地に於ても、到る處に色々な形の歡樂境が見出され、今更ながら青山は世界の何處にもあると思はれた。併し夫は社會の裏面のことであるから、只上層から見た丈けでは、中々其真相が分らない。況や吾等は極めて不粹な木強漢擲なるに於てをやである。然し必要の前に困難はない、窮すれば必ず通ずで決して悲觀するには及ばない。斯く云へば吾等は孰も各地で大に窮し、大に通じ

た様ではあるが、實の所、そう云ふ果報者は吾等の仲間には一人も居なかつたのは甚だ遺憾であつた。尤も打ち明けて云へば、吾等の内には一騎當千の勇者が無いはなかつたが、何分狭い部落内のことであり、且つ吾等は到る處で國賓の様な優遇を受け、衆人環視の内に置かれたのだから、如何に敏腕でも、そう勝手な眞似をする譯には行かない。併し原因は何れにあるとしても、一行の者が純潔無垢であつたことだけは、著者が堅く保證する處であるが、吾等には土人の社會状態と云ふ喧しい問題を研究する爲に、斯う云ふ方面の事情に就ても大に之を知つて置く必要があつたので、著者は政府代表と云ふ役徳を善用し、到る處で其地の官憲又は其の他の有力者の助力と案内を受けたので、少くとも其の外観丈けは充分に見て置いた積りである。

久米仙人正に雲間から滑り落ちんとす

先づ第一に吾等が最も驚いたのは最初に上陸した「モムバサ」の光景であつた。其處は流石に東阿弗利加第一の要港丈けに、内外人の遊客が多いと見え、華街と云へば華街、魔窟と云へ

ば魔窟が可なり盛であつた。著者一日其日の用務を終り、諸方散步の折柄、不圖土人街の或區域を通過の節、何者か小屋の内から奇妙な聲をして呼びかけるので、はて妙だと思ひながら眺めると、其處に嬋媚たる一人の黒姫が、さわれば散らん風情をして、吾に秋波を送つて居る。咄、久米仙人ならば正に雲間から滑り落つべき所であつたが、忽ち満身の勇氣を鼓舞し、涎を呑んで其儘行き過ぎんとしたところ、彼女は此奴餘程遅鈍だと思ひしと見へ、蠻人相應の智囊を揮つて、見るに忍びざる種々な表情をなし、大に歓迎の意を表したが、斯る光景は獨り其小屋のみならず、其邊に立ち並ぶもの軒を並べて皆然りであつた。只恨むらくは著者は事實遅鈍であつて此好意に酬ゆる道を知らず、遂に千歳一遇の機会を逸したことは、著者一生の不覺と云ふべきか、呵々。

検事長の案内で魔窟見物

忘れ難きは「アピシニア」に旅行の途中、佛領「ソマリランド」の「ヂブチ」で、同地の検事長某の案内で土人の部落を一巡した時の事である。其際検事長先生一人の黒奴に杖を持た

せ、數間離れて吾等の先頭に進ましめたが、夫は道案内の様ではあつたが、道は極めて簡單であつて、案内人を要するとは思はれない、然らば護衛かと云ふに必ずしもそうとは見へない、多分御役人のヴァニチーならん杯と考へつ、案内せられるまゝ、従ひ行きたるに、馳て部落の或區域に入ると、忽ち左右の小屋から、妖艶な黒女が現はれ、頻りに吾等を誘はんとし、其内の或者はいきなり手を取つて離さない。検事長も著者も自力では到底其重圍を脱することが出来ず、困つて居ると件の黒奴が吾等の心を知つてか知らんか、忽ち飛び來つて夫を追ひ拂ふが、あだかも砂糖に蠅がたかる如く後からくと飛び付いて來て吾等の手を取り衣を引張つて離さない、成る程是れでは土人街の見物には追拂の足が必要であると、検事長の従者の証は遅時ながら解くことを得た。併し此日折角虎穴に入りながら虎兒を得ず、敵に後を見せたは之を武門の恥辱と云ふべきか、斯う云ふ光景は他の蕃地に於ても同様な事である。

偉なるかな我が娘子軍

茲に一つの變つたことは、ザンジバルに二組の日本娘子軍の居ることである。其一つは酒屋

を營み、可なり繁盛して居る様子であるが、主婦は芳紀正に五十歳だと云ふから最早現役兵ではあるまいと推察するが、又他の一つは珈琲店であつて、娘子三人の共同經營だと云ふ話であるが、見たところ孰も三十歳前後の屈強な古強者である。此娘子達は皆島原邊の生れ、様子あつて新嘉波に出稼ぎ、夫より此地に轉戦したものらしく、孰も相當貯金して居る様子なるも、年久しく海外に流浪することゝて、雨の朝、風の夕、忘れんとしても忘れることの出来ないのは故山の夢である。されば、彼等は吾等一行七名と云ふ大勢が遙々此島に來たと云ふことを聞き、非常に嬉しかつたと見へ、吾等が旅館に着くと早速使を以て御寢巻でも洗濯さして頂きたいとの旨を申出た、是れ實に故國愛慕の一念から出た純眞無垢の心の現はれであつて、誠に同情の至りに堪へない。然も吾等としては萬里の異郷にて吾同胞から、斯る眞實な歓迎を受けたのだから嬉しかつたのは云ふ迄もない。其處で一同は喜んで其好意を受けることとし、各人から肌衣又は寢衣を一二枚宛集め、洗濯して貰ふことにした。其處で著者は右の厚意に對し禮を述べたり、慰問もしたり、又序に其實狀を見もしたく、一日店先まで訪ねたところが、其時の一同の喜は又實に非常なものであつた。そして否應なしに著者を家内に招じ、商賣柄とは

云へ痒い所に手の届く様な、否、徹頭徹尾商賣氣を離れ、美酒珍菓で心一杯歡待せられたのは誠に氣の毒ではあつたが、此旅行中最も喜しい印象の一つであつた。

産業と日本人發展の可能性

獨逸が歐洲戰爭の結果其戰敗者として、一ケ年に約二十億マーカーの償金を仕拂はされながら、世界の不景氣を餘所にして、獨り降々たる國勢を維持して居ることは、實に世人の驚異とする所なるが、其原因は素より多々あるも、吾人が獨逸人に對して最も敬服することは、彼等が戰敗に屈することなく、勞働者も資本家も總てが一身同體となり、一意専心其國の復興の爲に努力しつゝあることであつて、彼等は其爲三つの大きな目標を定め、夫をモットとして粉骨碎身して居る。即ち其一人は人の行かない處に行くこと、其二人は人の爲ないことを爲すこと、其三人は人の一倍働くこと、是が今日の獨逸國民の信條であつて、彼等は此心を心とし、一心不亂に奮闘しつゝあるのである。獨逸に不景氣なく職業難の無いのは當然である。現に「タンガニカ」は元獨逸の領土であつた關係上、獨逸人に其事情が能く知れて居る爲でもあるが、今日は夫が英國の支配の下に在るに拘らず、一九二五年六月敵人入國禁止解除以來、獨逸人が續々と

して移住し、或は商業に、或は農業に卷土重來の勢で各地に活動して居り、同地目下の人口は英國人の約九百名に對し、獨逸人は約二千人に達して居る。獨逸人の此意氣込は目下不景氣に惱みつゝある吾等日本人の是非共學ばねばならぬ所であつて、若し日本人に此決心があり、人の行ない所に行き、人の爲しあはざる事を爲し、人一倍働く決心があるならば、日本人の活動し得る處は世界の何處にでもある。著者は過般阿弗利加の内地を視察し、獨逸人が遠大の志を抱き、土人と同様に床も天井もない憐れな堀つ立て小屋に住居し、臥薪嘗膽しつゝあるのを見て、日本人も是でなければならぬとの感を深ふした。然らば産業的に見た英領各地は一體何んな處か、是等の地方に於ける日本人發展の可能性は何うであるか、今之を左の順序に依り極く簡単に説明する。

重要な産業

優良な棉花産出と重要輸出品

此地方に於ける重なる産業は、農業と牧畜とであるが、孰も幼稚の域を脱しない。然も農産物の種類は極めて少く、且つ其多くは地方限りの需要を目的とした食料品であつて、輸出品としては、僅に十種を算ふるに過ぎない位である。即ち其重なるものは棉花、珈琲、サイザル麻、玉蜀黍、落花生、胡麻、丁字、ココナツツ等なるが、牧畜に就ては牛、羊、山羊の飼養が盛んである。只其例外としてケニヤノマガチ湖から夥しい天然曹達が産出し、又風變りの商品としては各國から象牙が盛んに輸出せられて居る。

ウガンダ及タンガニイカは極めて優良な棉花の栽培に適して居る。但其主産地はウガンダであつて、所謂東阿の棉花として近頃日本が非常に輸入しつゝある棉花と云ふのは即ち此ウガン



況 状 の 燥 乾 麻 ル ザ イ サ る け 於 に 「 ガ ン タ 」

ダ産である。併し現在の所タンガニカからの産出は極めて僅少であるが、將來は地理的關係上却て、ウガンダよりも遙かに有望と認められて居る。

ウガンダの棉作

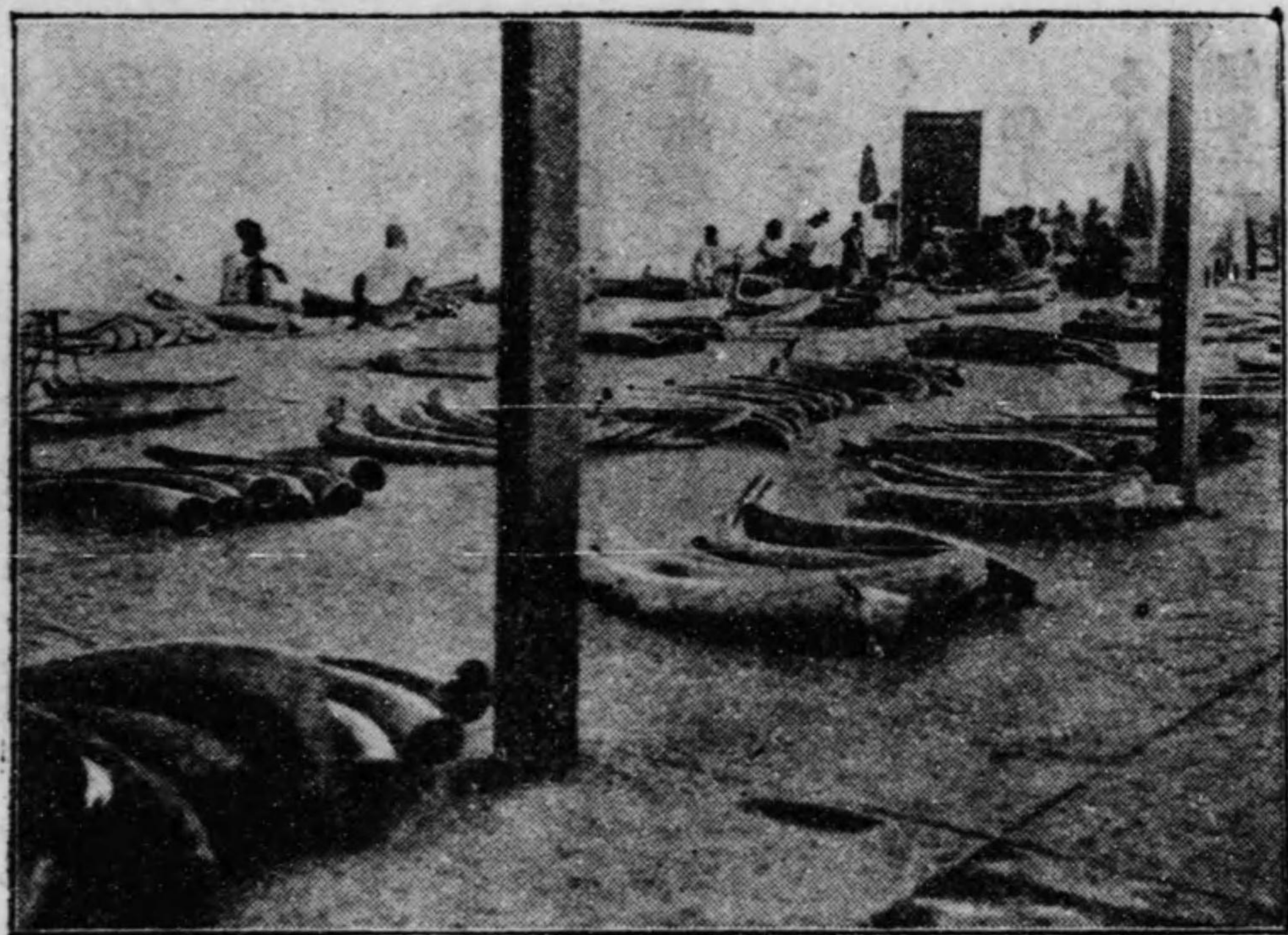
ウガンダの棉作は一九〇九年に、米國からアツブランド種を試植したのが始であつて、爾來其成績が好良なので土人に對し其栽培を強制して居り現今では各土人は自家の傍に四分の一英加乃至二英加位の棉畑を設け、其總面積が大凡六十萬英加位に達して居る。但し棉花の生産額は、一九二五年の十九萬六千俵、此價約四百七十萬磅を最高記録として居り、政府は總産額五十萬俵迄増加する事を、理想として居るが、最近は兩三年間天候不良

と、價格低落との爲約三割方減じて居る。

當國に於ける、實棉の買入は繰棉工場又は公設市場、若くは私設買入所に於てするのであつて、夫には政府が土人を保護する爲めに、色々嚴重な取締規則を設けて居る。例へば買付開始日の指定、買入最低値段の公定相場等の如きは即ち夫である。斯くして土人は棉花を收穫すると、夫を籠に入れ頭に載せて右の買付場所に運搬し、其時の定められた値段又は夫れ以上の市價で賣渡すのであるが、政府は土人保護の爲め現場に官吏を派遣し、土人の賣らんとする棉花を秤量し、紙片に當日の市價に依り、評價した金額を記入し、之を本人に與へる事にして居る。其處で土人は其紙片を買手に示し、品物を渡して代金を受け取るのである。茲に最も面白いのは棉花買付所の門前に、印度人が木綿店を出し、土人が棉花を錢に替へて歸る所を捉えて木綿を賣附けて居る事である。併し土人も亦夫を便利とし、棉花を賣つて木綿に替へ歸つて妻女等を喜ばして居る。是れ綿花の豊凶と市價の高低とが、綿布の賣行に大關係を有する所以であつて、阿弗利加の奥地の景氣が、我紡績業者にも多大な影響を與へる所以である。

日英印三つ巴となつて棉花買ひ入れ競争

現在ウガンダで棉花を買附けるのは日、英、印三國の商人であつて、日本人はモムバサの日本棉花株式會社支店員、孟買の東洋棉花株式會社及び、江商株式會社の兩支店員が、各數名乗込んで来て、是等の英、印兩國人と三つ巴に成つて買付を争ふのであるが、日本棉花會社は一九二六年カムバラを中心とするブソガ地方に、繰綿工場を買収し合計六個の機械を据へ附け、又買附時期に至れば、更にジンジャにも出張所を置き、盛に實綿及び繰綿を買入れて居り、又東洋棉花株式會社は、ジンジャに、江商株式會社はカムバラに出張所を置き、印度人經營の繰綿工場を通じ繰綿を買入れて居る。斯して日本人の會社はウガンダ棉花の約三分の一、乃至四分の一を買入る、のであつて、是等は主として日本に直送するのであるが、市場の關係に依りては、孟買又は季浦に送り、印度人又は英國人に轉賣する事になつて居る。但し日本人が棉花の買入を爲す事に對し、英國政府は何等妨害は試みざるも、マンチエスター方面に於ては、嘗て英帝國の綿業獎勵並に、保護の趣旨に反すとして苦情を唱へた事もあれば、東阿に於ける本邦商



曼光の造荷牙象るけ於にムーラサレダ

人將來の地位を確保する爲め、成るべく速に繰綿工場を新設又は買収し、地盤を固め置く事が、必要だと思はれる。

タンガニイカの棉作と東阿の珈琲

タンガニイカに於ける棉作は主としてヴィクトリア湖畔のムワンザと、東部地方のモロゴロ地方に於て、行はれるのであつて、最近の生産高は一ヶ年二萬五千俵位なるも、將來は非常に有望と見做されて居る。日本人發展の可能性に就ては、後段の記事参照せられたし。

主として歐洲人に依り生産せらるゝものなるが、其輸出額はケニヤに於ては、農産物輸出額の

約三分の一に當り、タンガニカに於ては約四分の一に達して居る。但し普通キリマンジャロ地方として知られる。モシ及びアルシヤ地方の珈琲は、其品質東阿第一と稱せられ、ケニヤ珈琲の上位に置かれて居る。

サイザル麻耕作

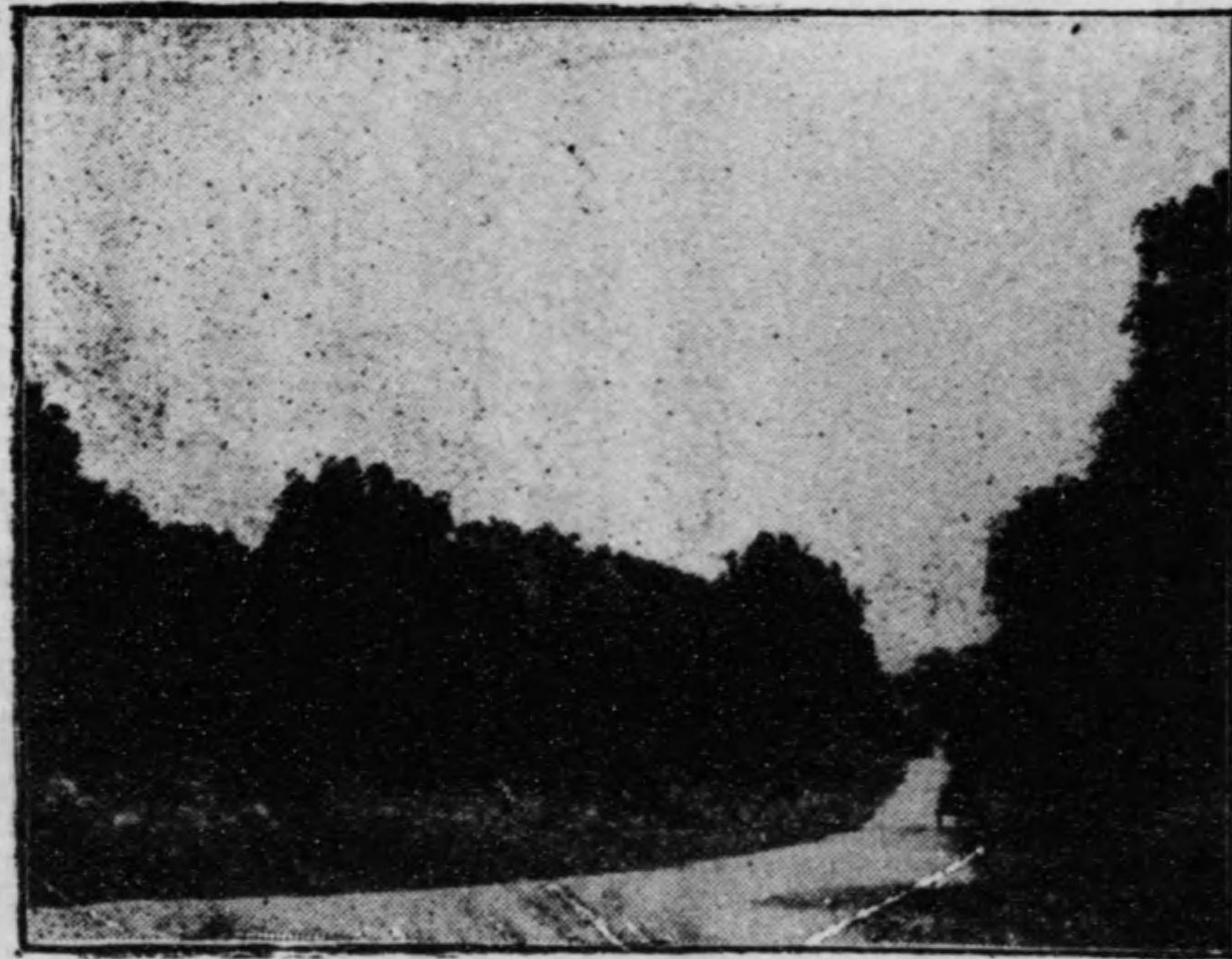
サイザル麻は珈琲と共に農産物の大宗であつて、タンガニカに於ては輸出品の第一位を占め、農産物輸出額の約半額に達して居る。但し耕作者は、歐洲人及び印度人であつて、土人中には之れを耕作する者が無い。又ケニヤに於て、本品の耕作を始めたのは、極めて近年の事であつて、栽培地の約二分の一は漸く三ヶ年に過ぎない位なるも、輸出品としては既に珈琲に次ぐべき、重要な位置に達して居る。

但し本品は六年乃至八年位の壽命を有し、海岸地方に於ては、約三ヶ年にて其葉を採取し得るも、高原地方にては三年半乃至四年を要し、第一回には一本より六十葉位、第二回目よりは毎年二十乃至三十葉位、採取することを得べく、一英町より千百二十封度位收穫し、其歩上り

は普通三分乃至三分五厘なりと云はれて居り、棉花と共に日本人に取り有望な事業と認められて居る。

盛なる丁字樹の栽培

丁字はザンジバルの特産品であつて、世界産額の九割三分は同國から、其他はベナン、アムボイナ及び其他の東印度地方、並にマダガスカルから産出せられて居り、ザンジバルからの一ヶ年の輸出額は丁字及丁字軸を併せ、百二十萬磅内外と見られて居る。但し丁字は丁字樹の花の蕾を開花の直前に採取し乾かしたものであつて、主として印度、英本國、及米國に輸出せられ、或は粉末となし或は、蒸溜して丁字油となし、香料に使用せらる、但し丁



有名なる丁字樹
丁字樹は「バムベ」及「ルバジンザ」は島南
す爲を趣の園樂に眞てしと郁積氣香ひ覆

字樹の栽培者は、アラビヤ人及土人であつて、嘗て奴隷制度の行はれた時代には、本島の労働は總て、奴隷に依りて行はれた爲め、其經營が極めて容易であつたが、同制度の廢止せられると共に其經營が非常に困難と成り、漸次凋落したものであるが、最近に至り印度人が本業の有利なるに着目し、之に資本を投じ土人をして栽培せしむる者が増加する様に成り、其結果が頗る良好なので、政府に於ても大に之を奨勵して居る。目下本業に必要な労働者は、大低季節的に大陸から渡來するのであつて、彼等の内労働の貯蓄で、小さな土地を買入れ、其儘土着する者が尠なからざるも、多くは郷里に歸り、貯金が盡くれば、再び稼ぎに來る様に成つて居る。但し其賃銀は除草其他耕地的労働は、普通一ヶ月二十六日間労働して十八留比位、菅摘採仕事は一日一留比位である。

コロナツツと其他の農作物

コロナツツは椰子の實であつて、東阿弗利加に於ける重要産物の一つである。併かし其産出の最も盛んなのは、ザンジバルであつて、一ケ年の輸出高三十萬磅内外に達し、之に次ぐものはタンガニイカであつて年額十五萬磅見當と見られて居る。

更に落花生、玉蜀黍及胡麻はケニヤ、ウガンダ、タンガニイカに於て土人に依り耕作せられて居り、孰も可成り外國に輸出せられて居る。

牧 畜

東阿弗利加に於てザンジバルの外は至る處に、牧畜が盛であつてケニヤ、ウガンダ、タンガニイカの三國に於ける最近の家畜の飼養数は牛九、二七二、〇〇〇頭、羊五、八六七、〇〇〇頭、山羊一〇、四一七、〇〇〇頭であるから、其の數に於て素晴らしい勢である。

驚くべきマガチー曹達湖

東阿弗利加は概して鑛物の資源に乏しい様であるが、併し只一つの例外として驚くべき事はケニヤのマガチー湖であつて、其處から天然の曹達が無盡藏の湧出で居る。但し此湖水はモムバサ港から、二八六哩の處に在る、ウガンダ鐵道のマガチー・ジャンクションと云ふマガチー支線の分岐驛から、九十一哩の西方、又首府のナイロビから云ふと凡百哩程、直南のタンガニイカ國境附近に在つて、之と連續する幾多の湖沼と共に、有名な東阿大地溝の一部を形造つて居る。モムバサからは汽車便が一週一回であつて、午後四時にモムバサを出發すれば翌日の夕方、湖畔に到着する様になつて居る。

湖の大きさは長さが十二哩、幅が三哩、面積が三十平方哩であつて、湖面全體が白色又は、薄桃色の曹達の結晶で蔽はれ、恰も氷で張り詰めた様になつて居る。勿論相當の重量を支へ得る位の堅さになつて居り、其上を人間が歩んでも差支ないのである。但し曹達の埋藏量は二億

噸と云はれるも、實際は湖内及湖岸に多數の泉があつて其處から曹達液が、自然に湧出するのであるが、結晶した部分を採掘すれば、直に曹達の液體が、其空間に流れ込み夫が其儘結晶して元の通りになるのであるから、寧ろ無盡藏と云ふのが適當である。恐らく世界廣しと雖も、マガチー湖位不思議な且つ結構な湖は、又と他に無いと思はれる。然らば何う云ふ譯でさう云ふ様に曹達液が湧出するかと云ふと、夫は地熱の作用で湧いて出る、鑛泉其ものであるか、又は地下の曹達層が其處を通過する地下水の爲めに、溶解せられて搬出せられるのであるかは明かでない、併し何れにしても夫が地下から湧いて出て、何日の間にか自然に結晶するのであるから實に豪勢である。

採掘權は英國人の獨占

斯う云ふ不思議な湖水の存在するのは、昔からアラビヤ人に依り知られて居り、其結晶物は彼等に依り、本國に輸送せられて居たのであるが、一九一三年に英國資本家の手で、マガチー曹達會社と稱する會社を組織し、ケニヤ殖民地政府より、右の鑛床全部に對し九十九年間の

採掘の特許を受け、右のマガヂー驛から、湖畔迄九十一哩の間に鐵道を布設し、湖畔に大きな機械を据へ付け、キリンヂニ港に専用の倉庫と、棧橋とを設け、大々的に事業を開始せしも、經營意の如くならず、結局會社は破綻に瀕する様になつたので、一九二六年社長のサー、アルフレド、モンドが其の地位を去り、サー・ジョン、ブラナーが其後を襲ひ、尋て之をブラナー、モンドなる新會社の經營に移し、爾來其内容を改善し、設備を整頓した爲め、大に其面目を一新したと云はれて居る。但し目下の所其輸出先は、主として日本であつて、日本は此曹達の最も善い得意である。然るに日本への輸出値段はモムバサ渡し一噸六磅半なるも其生産費は噸當り三磅半に足らず、之にモムバサ迄の鐵道運賃並に諸掛を加へるとも、四磅を越へざる由なれば、會社の利益は中々莫大なものだといはれてゐる。是れ吾當業者の大に注意すべき所である。

日本人に適する棉作事業

ウガンダに於ける棉花栽培

棉花栽培が「ウガンダ」に於ける主要産業なることは前に述べた通りなるが、其事業は全然土人に依りて經營せられ、歐洲人中には之を計畫する者さへも無いので、著者は之を不思議に思ひ、英國統監府の農務局長に就き、大農式棉作の可能性に付見込を尋ねたるに、同官は本業は土人の副業としてのみ有望なるも、之を大農式に經營しては到底成功の見込なしとて、極めて消極的な意見を述べたるが、幸ひ當國に於て棉作の本場たる「カムバラ」附近に多年農様を營む山邊義昭と云ふ人があり、同君にも同様の質問を試みた所、同君は農務局長と大に意見を異にし、大農式棉花栽培の有望なことを説き、現に「カムバラ」附近に適當な地所三千英町借入のラプシオンを有するに依り、相當な日本の資本家と共同し棉花及煙草を栽培したき希望なり

とて、其實験に基く栽培明細書と共に意見書を示されたが、右は極めて有益なものにて、吾事業家の爲多大な参考と成るに依り、其要領を左に摘載し、切に同君の成功を祈る。

棉花栽培に無頓着の土人

「ウガンダ」は棉花の名産地なるも、土人は元來耕作を好まず、他の地方より裸體の黒人を雇入れ、之に萬事を任かし、自分は殆ど之に關係せざる位にて、品質又は耕作法の改良の如き事には全く無頓着である。又政府は土人に對し耕作を指導するも到底行届かざるのみならず、土人自ら農業に熱心ならざるに依り其効果極めて乏しく、只當地の地味及び氣候が最も棉作に適するに依り、耕作法の原始的なるに拘らず、尙善く一英加より千二百斤の收穫を擧げつゝある次第なれば、若し吾等が自ら經營の任に當り、大規模の耕作を爲す時は容易に巨利を博する事を得べし、且つ「ウガンダ」は棉花の耕作に於て有望なるのみならず食用作物及煙草の栽培にも亦甚だ適して居る。幸にして英國官憲は常に吾等に對して好意を表するに依り、事業の經營に好都合のみならず、土人の勞力は非常に低廉（苦力一人一ヶ月十二志

即日本金六圓）且つ供給豊なるに依り、勞力の爲に要する經費尠なし、若し日本人が農業を經營するとせば、英國人と同様に政府より九十九年の借地を爲すことを得べく、又土人より土地を買入れることも自由である。然るに此地方に於ける歐洲人の多くは軍人上りなれば極めて農業の智識に乏しく、是れ彼等が棉作に着手せざる所以である。余は茲に五ヶ年間の經驗に依り棉花栽培明細書を作製し、各位の御清鑑を仰ぐ。

實地棉花栽培明細書

- 一、栽培地、ウガンタ國カンペラ市郊外山邊農場耕地内
- 一、栽培種目、棉花（米國陸地棉改良種）
- 二、栽培面積、一英町（我が約四段二十四歩に相當す）
- 一、地質、腐所壤土
- 一、氣温、平均華氏六十七度
- 一、發育期に受けたる雨量、十三インチ
- 一、植付本數、一萬四千七百本 畦三呎間一呎

- 一、收穫英貨二百八十志十六仙
 - 一等棉 一千二百六十英斤
 - 二等棉 二百五十二斤
 - 一、栽培費英貨一百四十二志五十仙也
- 内 譯
- 一、英貨五志五十仙 草刈十一人
 - 一、二十一志 耕起四十二人
 - 一、二十一志 土碎四十二人
 - 一、七志五十仙 種薛十五人

- 一、十三志
- 一、十三志
- 一、十三志
- 一、一志

中耕二十六人
同
同
切二人

- 一、四十志五十仙
 - 一、二志
 - 一、五志
- 採取棉花八十一人
借地料
農具損料及管理雜費
以上は五ヶ年間實驗平均に依る

ウガンダに於ける適作品

棉花栽培に關する山邊君の意見は大略右の通りなるが、同君は更に自己の農園に於ける適作品耕作の成績なりとて、其要領書を示された所、是れ亦吾企業家の爲、極めて有益な参考となるに依り、左に之を摘載する。

- 一、薄荷、一英町（我が二段廿四歩）に赤丸種を栽培せしに、其發育良好にして年六回の收穫をなす、品質は内地産の如く其香味辛烈、粗險のものでなく、北米品に類似し稍々優良である。其收穫は一萬二千封度で能率は略六十パーセントである（三ヶ年間の平均）病虫害なし。

- 一、除虫菊、一英町に赤花種を栽培せしに、其發育が極めて良好で、移植後二年にして其收

獲一英町に付乾花五百四十二封度を得た。（三年間平均）

- 一、茴香、年々一英町に付三百五十封度乃至三百八十封度の收穫をなしつ、ある、毛肥料年四回の除草である。

- 一、薑、一英町に種薑一千五百封度を栽培せしに、其收穫一萬六千餘封度を得た。（三ヶ年間の平均）

- 一、大麻、一英町を栽培せしに其發育良好にして製芋七百五十封度を收穫した。

五ヶ年間平均收穫表

一、小麥、當國の氣温及土性に適し、其發育良好のみならず、病虫害の損失を見ず、五ヶ年間通常の小麦種を栽培せしに其收穫平均一千六百五十封度の收穫を得た。

- 一、陸稻 發育良好 一英町の收穫一千九百封度
- 一、粟 發育良好 一英町の收穫八百二十封度
- 一、蜀黍 所々野生あり 一英町の收穫一千三百封度

一、玉 黍 發育良好 一英町の收穫二千一百封度
 一、大 豆 發育良好 一英町の收穫八百五十封度
 一、小 豆 發育良好 一英町の收穫七百八十封度
 一、豌豆 發育良好 一英町の收穫六百餘封度
 一、甘藷、は土人の常食として汎く栽培せられ、其收穫一英町一回二萬七千五百封度にて、年三回の收穫あり、病害なく、蝕害としてはエビガラ蛾の幼蟲や、小蛾の幼蟲の大害(乾期に)ある事もある。

一、瓜哇薯、土人間にも栽培せられ、發育良好にて收穫九千二百封度を得、蟲害なし、病害としては立枯病にかゝる事あり。

一、桑樹、所々に野性あり、四季採桑し得べし、當國の氣温は養蠶に適するに依り有望と思ふも余に實驗なし。

一、茶、一英人の試験に依れば成績頗る良好、四季採葉し得べく、勞賃低廉なるに依り將來有望ならん。

一、煙草、五ヶ年間栽培及研究の結果に依れば其發育が極めて良好であつて、東アフリカに於ける最適物と認めらる、余はアメリカン黄色種、ハバナ種を栽培し、年々アデンの煙草工場へ輸出して居るが、將來有望のものと思はれる、一英町の收穫は一千二百封度内外で、病虫害を見ない、栽培費としては僅かに一英町一百九十志である。

一、草棉、一英町の收穫一千二百三十封度内外にして、栽培費は毎年一英町に付百三四十志内外である。(栽培明細書は前に示せし通り)更に煙草の實地栽培明細書を左に掲ぐ。

實地煙草栽培明細書

- 一、栽培地、英領東アフリカ洲ウガンダ國カ
ンバラ市郊外山邊農場耕地内
- 一、栽培種目、烟草(米國黄色種、ハバナ種)
- 一、栽培面積、一英町(約我が四段二十四歩)
- 一、地 質、粘質壤土
- 一、氣 温、平均華氏六十七度

- 一、發育期に於ける雨量十一インチ
- 一、植付本數、七千七百本 畦三呎間二呎
- 一、收穫英貨一千六百八十志
收穫乾燥烟草一千一百二十英斤
- 一、栽培費英貨一百八十九志五十仙也

内 譯

- 一、英貨五志五十仙 草刈十一人

- 一、二十一志 耕起四十二人
- 一、二十一志 土碎四十二人
- 一、三十八志五十仙 畦作り七十七人
- 一、十志 移植二十人
- 一、十五志五十仙 中耕三十一人
- 一、十五志五十仙 中耕三十一人

- 一、八志 切及手入十六人
 - 一、四十二志五十仙 刈取及乾燥八十五人
 - 一、二志 借地料
 - 一、英貨十志 農具及管理雜費
- 以上は五ヶ年間の實驗平均

有望なタンガニカの棉作

「タンガニカ」に於ける棉花の栽培は極めて小規模な土人の手に依る耕作と、印度人、獨逸人、希臘人等の外國人に依つて經營せられる大農式のものとの二種に分かれて居り、其内最も盛に活躍して居る者は獨逸人なるが、大阪の喜多又藏君を社長とする日本棉花株式會社は、ダレサラム港から約二百哩内地の「モロゴロ州」に於て二千英町の土地を買入れ、棉花の栽培を始めて居る。但し此地方は中央鐵道に沿ひ、且つ「ミケシ」停車場に近く交通が極めて便利のみならず、土地が平直で土壤が肥沃なれば、我將來の企業地として頗る有望だと見做さ

れて居る。殊に「タンガニカ」は委任統治地であつて、國際聯盟に屬する各國は英國人と均等の待遇を受けることに成つて居り、日本人も亦國際聯盟所屬の國民として其保障を有するに依り、何等差別待遇を受くる危険なく、又此隣のケニヤに比し其開發が遙に遅れ、歐洲人の移住者が尠きに依り、日本人に取り萬事に都合だと認められて居る。因に此地方は熱帯地なれども海拔三千呎の地高を保つに依り、暑氣が酷烈ならず、雨量も亦適量なりとのことなれば各同胞の企業地として理想の條件を具備するものと云ふべきである。敢へて吾投資家並に海外發展を希望する人達の考慮を望む。

薄資な日本人に好適する新事業

以上は「ウガンダ」及び「タンガニカ」に於ける有望の事業なるが、孰も多額の資本を要し、薄資の同胞には適當ならざるやの恨がある。然るに茲に見逃し難いのは「ザンジバル」に於ける丁字園賃借業である。是れならば極めて薄資の者にも容易に經營し得べく、努力さへ惜

まねば必ず成功すべき有望な事業だと認めらる。但し丁字栽培業は前に説明した通り、ザンジバルの主産業なるが、同園は主として亞刺比亞人に依りて所有せられるものなる所、彼等は昔は中々活動したるものなるが、今日では非常に遊惰と成り、孰も農園を去つて市街に移り、丁字園の経営は一切使用の土人任せとなす爲、少しも事業の成績が上がらない、併し世界に於ける丁字の需要は非常に盛んなれば、此事業に於けるザンジバルの將來は極めて有望であらねばならぬ。故に若し之を勤勉な日本人の手に於て賃借し、適當に經營するならば、必ず偉大な成功をするであらうと見られて居る。右に關し「ウガンダ」の農業に付有益な報告を與へられた山邊君は、嘗て「ザンジバル」に在留し、同地の農業に就ても研究した由にて、同地に於ける丁字栽培業が日本人に有望なりとの、意見書を送られたるが、是又極めて有益なるに付参考の爲左に其大要を摘録する。

偉大なるザンジバル平原

「ザンジバル」の地勢は概ね平坦であつて、山岳も、森林も、川も無く、全面積の七割以上は耕地として可能である。

飲水量は井戸を掘れば何所からでも容易に、良水を得られるから、乾燥期に於ても、水に不自由はない。

降雨は十二月及一月を除くの外は毎月多量にあるから、食用作物にも灌水の必要がなく、本島には温帯野菜等も相等に栽培せられて居る。

本島に丁字及び椰子を植付けたのは、西曆一千八百三十年以後であつて、其後僅か十年間に全内地の七割を其樹園とし、全世界に其名をなしたのであるが、本島が英人の保護領となるや、彼等は第一に奴隷の賣買を禁じた爲、直ちに其努力に困難を生じ、其結果として勞賃が暴騰し、目下では一人分月額十八留比（邦貨十二圓餘）でも容易に苦力を得られぬと云ふ

状態に成り、丁字採取期（一月）には其二倍又は、三倍の割増をなすとも、其全收穫の三分の一若しくは半額位は、毎年採取不能に終ると云ふ有様である。併し英人政府は之に對し何等の保護政策を用ひないのみならず、園主（亞刺比亞人）も亦私財を投じて、他國より勞働者を呼び寄せる等の事を爲さず、然も彼等は其居住を樹園より町に移し、其栽培は勿論採取まで、一切を土人任せとなし、之を全然自然の儘に放任して居る。従て栽培地は頽廢し、其産額は年々減少して居る。尤も除草、其他の手入をして結實を、多くしても採取不能に終るのだから、結局放任主義を取つて居るのであらう。然も丁字は採取期を逸すれば、過熟して香氣を失ひ、賣品とならないのである。斯くして同島の丁字樹は生理的に衰退して行くばかりでなく、經濟的にも衰退しつゝ、あるのである。

日本人に適する丁字栽培地

本島が氣候風土の點に於て、丁字の栽培に適してゐるのは勿論だが、其開墾に長足の進歩を爲したのは、奴隸の利用と、世界に對し丁字の供給を獨占したのが、大なる原因である。

現今に於ては世界の丁字相場は、同島の採取率に依つて左右せられてゐるのであるが、本島の丁字樹は最早老境に入つて居り、其生命も今後二十年か又は三十年である。世界に丁字消費額の増しつゝ、ある今日、同島の丁字業回復策は頗る急務であらねばならぬ。併し英人の手に於て夫を成し能はざる事は明瞭である。

余の信ずる所に依れば丁字栽培業は極めて、日本人の作業に適當して居る。南米ブラジルやメキシコの炎天の下に於て作業するよりも、健康地で且つ生活し易いザンジバルに於て、此の有利な事業に手を付ける事は、日本人の爲め極めて有望であると考へる。

無資本で出来る丁字栽培

新たに丁字林を造るには、植付後十年でなければ採取は出来ぬが、既成林を借入れるならば、其年より採取の一部で、借林料を支拂ひ、相當の利益を得る事が出来る。借林料は大略收穫の四分の一位である。收穫した丁字は同市の丁字市場に持ち行けば、直ちに金に換へ得られるのであるから、資本としては除草、採取費位のものである。夫も邦人が小作農的に經

營するとせば、自分で總てを成し得るから、結局衣食費だけにて經營し得るのである。但し借林料は收穫の時支拂ふ習慣であるから、生活費としては一人に付二十五留比乃至、三十留比位で足りるのである。

除草は一年二回すれば十分で、其作業は南米の如く炎天下の仕事ではなく、十五尺乃至二十尺もある丁字林間の樹蔭に於てするのであるから、邦人に取り極めて容易なものである。

一英町一千六百圓以上の利益

丁字果の價格は一定して居らぬが七ヶ年間の、平均相場は英斤三十六封度「一フラスラー」に付二十四留比(邦貨二十圓餘)である。收穫は丁字樹一本に付(樹齡二十年前後のもの)英斤八封度で、一英町に百二十本とすれば其産額は英斤九百六十封度である。假りに五英町を借林とするとせば、年收四千八百封度で、其内から借林料一千二百封度を引去つても、其利益は三千六百封度残るから、先づ年々二千留比(一千六百圓餘)以上の利益がある、日本人が經營するとせば、除草や其管理も、宜しきを得るであろうから、收穫も随つて増加する譯

である。

新に造林するには一英町の開墾費、百三十六留である。丁字苗は實生で床蒔にして二回移植して二ヶ年目に園地に移すのである。結實は夫より七八年後である。最初の結實は英斤二封度位、二年目は四封度、三年目は六封度と云ふ順序で、造林してから、栽培宜しきを得たなら十五年目には一本に付十五封度の乾燥丁字を收穫することが出来る。交通は内地より大阪商船の東アフリカ直航があるから(月二回)別に不便の事はない。

因に此地方の土語はスワヒリ語であるが、英語も可なり善く通するので不便はない。